
Fate Spiner

甲斐日向

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e S p i n e r

【Nコード】

N 7 0 7 1 L

【作者名】

甲斐日向

【あらすじ】

平穏な学校生活を送る高校生・穂積 恩には、誰にも言いたくない秘密がある。それはとある『便利屋』でアルバイトをしていること。外見とは裏腹に傲慢な社長に振り回される日々。そんなある日、空から降ってきた不思議な少女との出逢いが宿命の扉さだめを開け放つ…

第1話 空から落ちてきた女神（前書き）

この作品は都合上、機種依存文字を使用することがあるため、PC閲覧推奨です。携帯閲覧の方は機種によっては文字化けする恐れがあるため、お手数ですが、作者運営のサイトからご覧下さい。

第1話 空から落ちてきた女神

都立慶星高校^{けいせい}は市内では中の上程度の偏差値の学校である。なんの変哲もない、いつも通りの朝。

十月下旬。秋休みが終わり、肌寒い秋風が吹く中、生徒たちが友人たちと話をしながら登校してくる。

「でさー、バルキトラプスに乗って草原を走ったんだ。それがもう気分爽快！」

「うんうん！ 風が程よく冷たくて気持ちよかったんだな」

「へえ、いいなあ。あたしもバルキトラプスに乗ってみたかったあ」
仲良さげに並んで歩いているのは亜櫛^{アズサ}Ⅱ^{バンジウ}畔上^{いのうえ}、井上玲汰^{ふじなみゆ}、藤浪幸緒^{きお}の三人。

この星、リーフェの双子星とも呼ばれるシェーシアの生まれである亜櫛は、セミショートの紫の髪に黄色の眼。

やや太り気味のぽっちゃりした体型ながら、人のよさそうな表情の玲汰。明るい茶色の髪と眼。

女としては背が高く、涼しげな目元の幸緒。少しハネ気味の髪は、藍泉国人^{あいずみこく}の中で最も多い黒髪で眼は灰色だ。

「幸緒ちゃんも来ればよかったんだな。ドゥーラサファリパーク」
「タイミング悪くライブ本番と重なっちゃったからね。ほんと残念」

古代セキエキという爬虫類生物が進化したドゥーラは、大きさも種類も多種多様だ。

主に陸生で水生のものや羽の生えている種類もあると言う。共通しているのは全身が硬い鱗に覆われているということ。

バルキトラプスは二本足で歩く陸生のドゥーラー—ティエロドゥーラだ。馬ほどの大きさで人間に懐きやすく、家畜にされているものが多い。

ドゥーラサファリパークはドゥーラを放し飼いに行っている自然公

園のことで、人気があるテーマパークの一つだ。

ため息をつく幸緒に亜檣が尋ねる。

「そうだ、藤浪。ライブの方はどうだったんだ？」

「もっちゃん成功！ 盛況だったわよ」

がぜん元気を取り戻した幸緒。その傍らで玲汰がぽつりと呟く。

「来れなかったと言えは：恩くんもなんだな」^{めぐむ}

「ああ、そうね。あたしらのライブにも顔出せないって言ってたし」
「バイトだっけ。秋休み中毎日だろ？ あいつ、なんのバイトして
るんだろうな。聞いても全然教えてくれな：」

にわかに校門の方が騒がしくなった。周囲を歩く生徒たちが浮足
立つ。女子は歓声を上げ、中には校門の方に駆け足で戻る生徒まで
いる。

男子生徒も顔を綻ばせてそちらに注目し、これからやってくるあ
る生徒を待ち構える。

「おっ。噂をすれば、だな」

亜檣たちも立ち止まり、校門を振り向いた。一台のエアバイクが
校門に入ってくると、とたんに女子だけでなく男子までもが黄色い
声を上げた。

「キャアーツ、穂積くーん！」

「恩君が来たわぁっっ」

「あ、恩せんぱーい！」

「穂積ーっ、おはようー！！」

「おはようございますう、穂積先輩！」

「恩先輩、これ受け取ってくださいーい！」

減速したエアバイクはあっという間に生徒たちに囲まれる。

その中心にいる生徒は、口々に挨拶したりプレゼントを渡してく
る生徒たちに困った顔で挨拶を返し、なんとか輪を抜け出してくる。
疲れた顔で出てきた男子生徒は前方の亜檣たちに気づくと、パッ
と表情を明るくさせた。

「亜檣！ 幸緒！ 玲汰！」

エアバイクを手で押しながら笑顔で駆け寄って来る。少し長めの赤みがかった栗色の髪に、真朱色しんしゅの眼。十七歳とは思えない幼い顔立ちと小柄な体。

彼の名は穂積 恩。この学校のアイドル的存在だ。

「おはよー、恩。今日も大量ね」

「少し持ってあげるんだな」

「ありがとう、玲汰。もう毎日大変だよ」

「穂積はうちのアイドルだからなあ。いいじゃないか、もらえる物はもらっておけば。あ、ほら、穂積の好きなパンダもあるぞ」

亜櫛が手のひらサイズのパンダマスコットをちらつかせると、恩は頬を赤らめてキュンとするが、すぐにはっとして顔を逸らす。

「べ、別に、そんなの好きじゃないし。くれるって言うから仕方なくもらってあげただけだよ」

「何言ってるんだよ！ ホントはすごくうれしくてたまらないんだろ？ 顔に出やすいくせに天の邪鬼だよなあ、穂積って」

ぺんっ、と亜櫛に肩を叩かれ、恩はぐうっと言葉に詰まった。

「ほ、ほんとに仕方なくだってば！」

「ふーん。じゃあこれは僕がもらっちゃってもいい？」

「うえっ!？」

揶揄の笑みを浮かべる亜櫛。恩は名残惜しそうな顔でちよっと涙目だ。

「畔上ってばからかわないの！」

「いてっ。あはは、ごめん、つい」

幸緒に後頭部を叩かれ、亜櫛はマスコットを戻す。恩は返ってきたマスコットを見て、こっそりうれしそうに微笑むが、三人にはバレである。

四人並んでてくてく歩いていると、二階の教室の窓から元気な声が降ってきた。

「恩ちゃん！ みんなー！ おっはよーう！」

見上げれば黒髪おかつぱの少女がぶんぶんと手を振っていた。恩

が手を振り返し、亜檜たちも顔を綻ばせる。

教室に行くまでも、いろんな人に注目されたり声をかけられたりし、恩は自分の教室——二年C組に入った。自動ドアが開くと同時に、さっきの少女が文字通り飛びついて来た。

「おっはよー、恩ちゃん！ またモテモテだったねえっ」

「わわっ、ちょっと、みんな見てるよ」

少女は同年代の男子の中で、比較的背の低い恩よりも一回りほど小さかった。

彼女は円藤まひろ。恩たちとは同級生だが、実年齢は十三歳。本来ならば中学一年生だが飛び級で高校二年生になっているのだ。

「恩ちゃんが注目されるのはいつものことじゃない」

「えと、そうじゃなくて…」

あわあわと行き場のない手を動かしていると、眼鏡をかけた少年がクスクスと笑いながら近寄ってきた。

「まひろ、恩が困ってるよ？」

「だってえ、恩ちゃんに会えるの久し振りなんだよ？ 秋休み中、全然連絡つかなかったじゃない。恩ちゃん！ 秋休み中どこで何してたの？ どうしてまひろたちに全然連絡してくれなかったの！？」

ぎく、と恩が体を強張らせた。秋休みに入ってからというものの、ヴァモバー——携帯端末の一種で、電話やメール、インターネットなどの機能がついている——はほとんど電源を切った状態だったし、家にもあまり帰っていなかった。

では、その間どこにいたのか。それは……

「こーら、まひろ。そんな尋問みたいな言い方したら恩がかわいそうだろ」

眼鏡の少年はまだ恩に抱きついていたまひろを引き離す。

まひろとさほど変わらない背丈。黒髪に灰色の眼。顔立ちもどこかまひろと似ている彼は円藤 要^{かなめ}。まひろの双子の弟だ。

「誰にだって話したくないことがあるさ。ねえ、恩？」

「う、うん…」

内心ホッとして恩は微笑んだ。秋休み中、恩はバイト先に泊まり込んでいた。

しかし、そのことは言えない。言ったらなんのバイトをしているのか、確実に問い詰められるだろう。

言いたくない。あそこのことは…誰にも。

ぷく、と頬をふくらますまひろに要はくすりと笑う。まひろの体を自分の方に反転させ、その頬を両手でそっと挟み込んだ。

「それに、あんまりばく以外の男に抱きついてちゃダメだよ。たとえ恩相手でもね」

「要ちゃん……」

まるで恋人同士のように熱い視線で見つめ合う二人。恩を含むクラスメートたちは「お熱いねえ」と手でパタパタ仰ぐしぐさをして散っていく。

これが恩の日常。気の合う仲間たちとふざけ合ったりしながら、だるい授業を受ける。そんな日常がずっと続いていくものだと思っていた。

一日の授業が終わり、恩は慌ただしくバイトに向かう。今日は帰りのホームルームが長引いたので、このままでは遅刻してしまう。

駐輪場へ走って行く途中、何人かの生徒に呼び止められたが、「急いでるから!」と適当に返す。

盗難防止のチェーンを外し、キーをはめ込んでエンジンボタンを押した。すると、エアバイクの車体が十センチほど浮き上がった。

エアバイクは反重力システムが組み込まれた、スクータータイプの二輪車だ。移動用として最も活用されている。

エアバイクに乗り込んだ恩は、バイト先への道を急ぐ。バイト先は隣の市である宝生市^{ほうせいじょう}。エアバイクでは四十分ほどかかる。

（間に合うか? いや、間に合わせる! でないと俺、あいつにどんな仕打ちされるかあゝっ!）

バイト先の社長の恐ろしい笑顔がよぎる。ブルッと恩は身震いした。自然とエアバイクのグリップを握る手に力が入る。

「うおーっ、絶対間に合わせてみせるうーっ!!」

安全運転を心掛けながらも恩はエアバイクのスピードを上げた。脇道に入り、何気なく空を見た。

「今日は珍しく暖かいなあ」

学校は冷暖房完備なので気にならなかったが、外に出れば十一月にしては気温が高い気がする。空を見ていた恩は、ふと空から地上へと落ちていく何かを見つけた。

「ん？ あれ、なんだ？」

逆光でよく分からないが、それは人の形に見えた。

（え、まさか人！？）

いったいどこから落ちてきたのか。頭上には雲以外何もない。それよりももしも本当に人ならば、このままでは地面に叩きつけられてしまう。

「やばいっ」

恩はエアバイクのスピードをさらに上げ、人らしきものが落ちてくるあたりに目星をつけてエアバイクを停車させる。

誰もいないことを確認し、恩は強靱な脚力で塀の上に飛び乗り、そばの電柱を蹴って空中へ飛び上がる。

落ちて来る人影を見事抱き止めたが、その軽さにぎょっとし、地面に着地する。まるで大きなビニール人形を抱いているような軽さだ。

「もしかしてこれ、ビニール人形か？」

と、抱いていたその顔を見た恩は赤面した。白磁のような肌、伏せられた長いまつげ、柔らかそうな唇。ほんのり色づいた桜色の頬は、それが人形でないことを物語っている。

長くゆるやかに波打つ金色の髪と、変わった服装ながらロングスカートをはいているところからして女だろう。

（か、かわいいっ!!）

一瞬にして恩は心を奪われた。この子はいったい何者なのだろう。なぜ空から落ちてきたのだろう。疑問が浮かび上がったその時だった。

突然、少女の背中から一對の純白の翼が現れたのだ。恩は当然、目を丸くする。

手をかすめた羽根の感触はまぎれもなく本物だった。恩が呆然としてみると、少女のまつげが微かに震えた。

「…ん……」

「！」

少女の閉ざされていた瞼がゆるゆると開かれる。エメラルドグリーン

の瞳が、恩の顔をとらえた。

「……まあ……」

「あ、あの」
少女に見つめられた恩はどぎまぎした。少女は二、三度瞬きをすると、ぼんやりと言った。

「おはようございます…」

「は？」

少女の第一声に恩は面食らった。おはよう？ 今は夕方。夕日が沈む頃だ。恩が何も言えずにいると、少女は寝ぼけ眼のまま尋ねてきた。

「あなたは…どなたですか？」

「えっ、お、俺は」

「わたし…どうなったんでしょう？」

「…えーと…」

いまいちつかみにくい子だ。恩はずっと少女を抱えていたことに気づいて、慌てて少女を下ろす。

「ご、ごめん！」

「？ なぜ謝るのでしょうか。あなたは悪いことをしたのですか？」
小首を傾げる少女に、恩は言葉を濁す。

「いや、えっと…」

「あら？ 翼^{はね}が出ているわ。もしかしてあなたは男性の方ですか？
今頃気づいたらしく、少女は自分の背中の翼を見てきよとんとする。

「そう、だけど」

「そうですか。困りましたね。見られてしまいました」

と言いつつもまったく困っているように見えない。顎に人差し指を当てて、小首を傾げる。

「こういう時はどうすればいいんですたっけ。うーん、忘れてしまいました。とりあえず翼^{はね}はしまっておきましょう」

初めて少女は微笑み、ポン、と両手を軽く叩いた。恩は少女の笑顔にどきつとする。少女が「ウイスプⅡウォルテルク」と呟くと、白い翼がすうっと消えた。

「！？ 翼が…」

「ああ、思い出しました。リーフェを散歩していたら、太陽の光にくらくらとなったので、落ちてしまったんです。あなたが助けてくれたんですか？」

思い出したというから対処方法かと思いきや、落ちた理由だった。少女がぐつと顔を近づけてきたので、恩はかあつと顔を赤らめて、ずささつと後退した。

「？ どうかしましたか？」

「いいいいや、なんでもない！ き、君が無事でよかったよ」

「はい。ありがとうございます」

ぺこりつと頭を下げ、少女はきびすを返した。

「それでは、さようなら」

にっこりと満面の笑みで少女はどこかへと歩いていった。恩はぽかんとしばらくの間、その場に立ち尽くしていた。

恩がバイトのことを思い出したのはその一分後だった。確実に遅刻である。恩は半泣きで道を駆け抜けた。

宝生市——ここ、藍泉国の首都・神京都しんきょうの中心の市だ。国内で最も栄えている王都なだけあって、活気に満ちあふれている。

恩の住む狩城市かれぎには高層ビルなどほとんどないが、宝生市は高層ビルが立ち並ぶコンクリートジャングル。

宝生市は十二のブロックに分けられていて、ダウンタウンは九ブロック。恩のバイト先はその南東に位置する四ブロックだ。

四ブロックは高層ビルも少なく、どちらかと言えば狩城市に近い雰囲気きふうのブロックである。

バイト先の近くの無料パーキングにエアバイクを収納し、恩はビルとビルの間の細い道に入っていく。

滅多に人は通らず、人がようやくすれ違える程度の幅しかない。だが、ここがバイト先の入り口なのだ。

恩はバイト先を誰にも言わない。誰にも知られたくないからだ。恩のバイト先は少々特殊で、普通の人間ではそこに行くことすらできない。

薄暗い細道を行く恩。道の入り口からぴたり十三歩。ぬわんと空間がたわんだような感覚。気にせずそのまま道を抜けると、そこは静かな無人の大通り。

エアバイクも自動車エアカーも走っていない。空にも何もなかった。

雲も、さっきまで輝いていた夕日も。それどころか、色すらもないのだ。道路、小さなビルや店、街路樹、すべてが真っ白。

——いや、ひとつだけ。真っ白なこの空間の中で唯一色のついた建物があった。といっても薄い灰色なのでさほど差はないのだが。

迷わずそこに向かう恩。二階建ての小さな雑居ビル。恩は階段を使って二階に上がり、左右両方にドアノブのついているドアの、向かって右側の赤いドアノブを回して中に入る。

「悪い、遅くな」

びゅんっ

「つとあっ！」

恩の目の前にダーツの矢が飛んできた。素晴らしい反射神経でそ

れを右によける。

ダーツの矢は開いたドアの間をまっすぐ飛んで行き、進行方向の壁に突き刺さった。

「む。外したか。狙いは正確無比だったはずだが」

「残念でしたね」

子供のような高い声と、抑揚の乏しい女性の声。恩は壁に突き刺さった矢を振り返り、顔を引きつらせた。なんの変哲もないダーツの矢。だがしかし、壁に深々と突き刺さり、小さな亀裂が走っている。

どれだけ強い力で投げれば、あんな細いダーツの矢で壁に亀裂を入れることができるのやら。

「的が動かなければ中心に当たっていた。的が勝手に動いたのが悪い。今度こそ当ててくれる」

「げっ」

言葉が終わるかどうかのところで、恩は慌ててドアを閉めた。ちょうどドアが閉まった瞬間、再び投げられたダーツの矢は、ドアに引っかけられていた的の中心を射抜いていた。そう、射抜いたのだ。的に当たったのではなく。

「どうだ、オレ様の腕前は」

「お見事です。間違いなく中心に当たりました」

「当たってないし！ ぶち抜いてんじゃない！ 的に穴開いてるだろ！」

的の横で叫ぶ恩を、ダーツを投げた張本人がぎろりと睨みつける。

「ようやく来たか。この愚図が」

そう吐き捨てたのは、見た目十歳ほどの少年。灰白色の短い髪、シェーシア人の特徴である黒目がちの縦長の眼はバイオレット。左眼だけが前髪に隠れている。

ダークブラウンのベストにライトグレーのシャツ、胸元には大きなグレーのリボンで飾っているのがかわいらしい。

だが、その表情は子供らしくなく、目はきつく細められ、眼差し

には侮蔑が込められている。

少年は体に似合わない黒い革製の回転椅子に座り、同色のデスクに頬杖をついていた。

その傍らには同じくシェーシア人と思われる女性が佇んでいる。紫紺色の長い髪と眼。黒っぽいヘアバンド、修道士シスターのような紺色の服の美人だ。

「今日はホームルームが長引い」

「言い訳は見苦しいぞ、下等生物」

最後まで言わず、すぱっと切り捨てる少年。恩はぐうっと口をつぐみ、少年を睨みつけた。

「なんだ？ その目は。それが雇い主であり、持ち主でもあるオレ様に対する態度か」

と、いつの間にやら少年は恩の背後に回っていて、恩を床に押しつけて頭を踏みつけていた。

「いててて、顔が潰れるー！」

「他に言うことはないのか、単細胞」

「…すみません、此武様コノム。もう致しません…」

苦々しげに恩が言くと、少年はにやりと嗤った。

「初めからそう言えばいいのだ。貴様はオレ様の玩具がんぐなのだからな」
彼こそがこの高科FW社長である此武タカシナフリーワークII 高科。恩の主だ。

傍らにいた女性は助手の千咲チサキ。高科FWの社員は恩を含め、この三人しかいない。会社といっても、このメイnlームと奥にある給湯室しか使っていないが。

やっと解放された恩は制服についた汚れを払う。白いのですごく目立つ。

「来たのならとっとと仕事をしろ」

「はいはい」

恩は部屋の中央にあるテーブルに置かれた白いノートパソコンを開いた。

室内はモノトーンの物しかないので殺風景に見える。社長イスと

デスク、その上に置かれたデスクトップパソコンは黒。

プリンターと、今では骨董店でも見かけなくなった回転ダイヤル式の電話機は白。パソコンの横にある小さな陶器の壺は薄い灰色だ。他はガラス製のテーブルとそれを挟むように置かれた黒いソファ、壁際にぽつんと置かれた銀のコート掛けと、その下にある黒い大きな革製のカバン。

パソコンを開けば、すぐに会社のサイトのトップページが表示される。依頼はたいてい、サイトの掲示板に書き込まれるのだ。

高科FWはいわゆる便利屋で、国内ならばいつでもどこにでも行く。ただし、人外に關係する依頼のみ。

人外とは文字通り、人間以外の生き物——ただし動物は含めない——のこと。幽霊、獣人、恠妖^{あやし}、悪魔……そういった生き物の総称だ。この世界には様々な種族が存在している。

高科FWでは、人外と共存する上での悩みや事件を解決するのが仕事なのである。サイトの掲示板を見ると、今日入ってきた依頼が三件。うち一つはすでに解決済みだ。

恩は新たに入っている依頼を読み上げる。これが恩の仕事の一つ。「えーと、まず一つ目。行方不明のペット捜しみたいだな。三日前に散歩に出かけた時にどこか行っちゃって、まだ帰ってきてないんだってさ」

「種族は？」

「んー、ユンゲルだ」

クマの恠妖であるユンゲルは、成体になっても中型の犬くらいの大きさで、虎縞の体毛に黒い二対の羽が生えている。

きちんとしつければ懐くので、最近ではペットにする人間もいるようだ。ちなみに恠妖とはいわゆる妖怪のことである。

此武は社長イスに深く腰掛け、九十度ほどイスを回した。ひじ掛けに手を置いて瞑目する。

「ふん、おおかた紐を手放したか、逃げ出したのだろう。奴らは元々、束縛を嫌うからな」

「ウンゲルは羽があるから、自由に飛べた方がうれしいんだろうな」

ふと恩の頭に、さっき会った少女の姿が浮かんだ。羽、で思い出したのだろう。

「そういえばさ、ここに来る時、不思議な女の子に会ったんだ」

手を止めて恩は言う。此武の返事はないが構わず続ける。聞いていないようで、此武は結構ちゃんと聞いている。返事をしないだけなのだ。

「空から落ちてきてさ、それもびっくりしたんだけど、その子から：翼が出てきたんだ。背中から真っ白な翼が」

此武が半分だけ目を開き、ちらりと横目で恩を見た。

「あれにはびっくりしたよ。急に翼が出てくるんだもん。聞いたことない言葉もしゃべってたし、服だってちよつと変わってたし。でも：かわいかったな」

最後の言葉だけは小さい声だったが、此武にはしっかり届いていた。にやつと口の端を持ち上げ、恩の方も見ず笑う。

「一目惚れか？ 単純なことだな」

「いつ、いいだろ、別に！ 本当にかわいかったんだよ！」

「そんなことより次の依頼だ。無駄口を叩くな」

「そんなことって：ちえっ。はいはい、次ね！」

拗ねたように恩は次の依頼を読む。

「父親から継いだ館で、ときどき奇妙なことが起きるので調べてほしい、ってことみたいだよ」

「具体的には？」

「ラップ現象とか、家具が勝手に動くポルターガイスト現象、館の中を歩いてると誰かがついてきてるような気配がしたりとか：一般的な心霊現象ばかりだな」

此武はあごに手を当て、しばし考える。わずか二秒ほどで結論が出たらしい。イスを回転させ、先ほどから微動だにしていない千咲に体を向けた。

「二件目の依頼を片づける。千咲、準備しろ」

「はい」

「一件目は他の奴らに任せる。場所はどこだ」

「最初のは祢州ねしゅうの香呂市。二つ目は五響谷州いひびやの弥生市みうだよ」

イスに座ったまま足を組む此武。フツ、と不敵に笑う。

「ちょうど東西に分かれたな。オレ様たちは東か。依頼受理の返信をしておけ」

「はいはい」

千咲がコート掛けにかけられていた此武のロングコートと、その下のカバンを持ってくる。準備といってもこれだけなのである。

恩は依頼者の住所と連絡先をプリントアウトし、一件目の方を此武に渡した。紙を確認すると、此武はデスクの壺から手のひらサイズの土のカケラを三つほど取り出し、ふうっと息を吹きかけて床に落としていく。

カケラは床につくとむくむくと大きくなり、シンプルな服を着た人間の姿になった。男が二人、女が一人。背丈は千咲と同じくらいだ。

「貴様らはここに行け。しくじるなよ」

紙を差し出すと、三人は無言で頷いた。恩がサイトを閉じ、パソコンの電源を落とす。

千咲がカバンを恩に渡し、此武はコートを羽織って唯一のドアに向かった。

「では出るぞ」

此武が、恩が使った方とは反対の青いドアノブを回してドアを開くと――そこに廊下はなかった。

壁も天井も床も何もない空間。オーロラのように空間の色が目まぐるしく変わる。

全員がそこへと足を踏み出した。地面を歩くようなしっかりとした感覚はないが、不思議なことに歩くことはできる。

ここは時空と時空を繋ぐ時空廻廊じくうかいろう。時空の狭間だ。此武いわく、

この廻廊のどこかに、時空ときがみを司る時空神・ジルティリードが住む“時空神の神殿”があるらしい。

高科FWは時空の狭間に存在する。恩が時空の狭間に迷い込み、高科FWで働くようになったのは秋休み突入直後のこと。

時空の狭間に入ることができたのは偶然ではないと此武は言っていたが。

普通の人間は時空の狭間には入れない。そう、普通の人間は。

此武も千咲も、人間ではない。彼らは人外なのだ。この姿は人間に化けているに過ぎない。

土のカケラから生み出された三人――ゴーレムと別れ、此武たちは時空廻廊を適当に歩いていく。ほんの十数秒歩くと、此武は立ち止まって左側に顔を向ける。

「この辺りか」

言って左手を横(?)に伸ばすと、ぬわん、と空間がたわみ、三人は見知らぬ場所に立っていた。時空廻廊を抜け、通常の空間に出てきたのだ。

三人の周りに広がるのは、葉が紅く色づき始めた森。足元には落ち葉がある。その奥に一軒の大きな洋館。あれが依頼者の言っていた館だろう。

見たところ普通の少し古ぼけた館だ。だが、恩には分かる。あの館には何かがある。もちろん依頼者以外の、人間ではない何かが。

「ごめん下さい。高科FWの者ですけれど」

恩が呼び鈴を鳴らして中に呼び掛ける。此武は少し後ろでふんぞりがえっていて、千咲は微笑をたたえたまま此武の傍らにいる。

しばらく待ったが応答がない。もう一度呼び鈴を鳴らして「すいませーん」と声をかけると、ややあつて扉が開いた。

「どちら様でしょう？」

出てきたのは二十代後半くらいの、精悍な男性だった。右足を怪

我していて、松葉杖をついている。それで出てくるのが遅かったのか。

「小室井一樹こむろいかずきさんですね？ 先ほど依頼を受けた高科FWの者です」

「ああ、そうでしたか。ついさっき依頼受理のメールが届いたのに……到着が早いですね」

当然だ。こっちはメールを送ってから二、三分でここに来たのだから。

時空廻廊はどの空間にも繋がっているので、遠く離れた地にも一瞬で辿り着ける。高科FWはそこにあるので距離など関係ない。

恩は営業スマイルで「うちは早さが売りですの」と言った。

「あなたが責任者……ですか？」

「いいえ、俺はアルバイトでして。あちらが責任者である社長です」
恩が指した先を見て、青年は目を丸くした。

「……女性の社長さんですか」

「いえいえ、その隣」

「え……」

隣と言えば此武しかない。此武は客向けの笑顔を見せる。

「初めまして。僕が高科FW社長の此武Ⅱ高科です」

「……………」

明らかに信用していない顔だ。だが、せっかく来てくれたのだからと思い直したのか、青年は三人を館の中に招き入れた。

「私がこの館で暮らし始めたのはひと月ほど前です」

依頼者の小室井は、応接間で三人にお茶を出して、ソファアに腰掛けてから語り始めた。

「十五年前に前の持ち主であった父が病死したのですが、遺品を片づけていたら私宛の古い遺言が出てきましたね。そこにこの館を私に託す、とあったんです。館の存在はその時初めて知りました」

出されたお茶を飲み、此武は普段とはまるっきり正反対の柔らか

な物腰で尋ねた。

「依頼には奇妙なことが起こる：とありましたね。詳しく聞かせてもらえますか？」

「はい。館に来たばかりはこれといって何もなかったんですが：一週間ほど経った頃、誰かが廊下を走っていくような足音がしたんです。この館には私一人しか住んでいないので、おや？　と思いました」

「足音：ですか」

「その日はそれ以外何もなかったので私の気のせいだと思ったんですが：次の日も同じことが起こりました。それも同じ時間に。」

足音は三日間続き、それ以外にも食器がいつの間にか割れていたり、夜中に花火が破裂するような音が聞こえたり、目の前で家具が動いたり宙に浮いたりしました。この足の怪我は、動いた家具がぶつかったんです」

「現象は毎日ですか？　日に何度も起きたりは？」

「そうですね、一日に一、二回程度ですが、毎日なので夜はろくに眠れませんし、最近では声も聞こえてくるんです」

「声？」

小室井はうなだれて声を震わせた。

「『出ていけ』と。子供のような声で、何度も何度も」

「遺言はまぎれもなくお父さんのものだったんですか？」

「筆跡鑑定もしたので間違いありませんよ」

「では、イタズラということではありませんね。お話を聞く限り――ここにはあなた以外に見えざる住人がいるようだ」

此武がちらっと、隣でお茶を飲んでいる恩を見た。

「恩君、気をつけた方がいいですよ」

「へ？」

その時、恩のカップがカタカタと小刻みに震え始める。

「！？　なんだっ？」

「現れたようですね、見えざる住人が」

此武の言葉と同時に、恩の持っていたカップが宙に飛び上がる。零れ落ちてきたお茶を恩は慌ててよけた。

「うわっとー！」

そして一斉に、家具が動きだしたり、すさまじい破裂音が鳴り響く。ライトが明滅し、どたどたと廊下を走る音、人のすすり泣くような声。今までよりひどい怪現象に、小室井は蒼い顔で頭を抱えた。此武たちが座っていたソファも震え出したので、全員が部屋の隅に退避する。

「随分とお怒りのようですね、見えざる住人は」

「な、なんとかして下さい！」

「もちろん。それが我々の仕事ですからね。千咲、恩君。とりあえずこれを鎮めて下さい」

「分かりました」

「はいはい」

千咲はガタガタ動くソファに無造作に近づいていき、なんと素手でそのソファを押さえ込んだ。完全に押さえ込まれたソファは身動きできない。

その間に恩がカバンから紙の札を出す。表面には墨で『祓』の文字が描かれていた。それをソファに貼ると、じゅわっと蒸発するように札が消えた。同時にソファも鎮静する。

物質に対してはその繰り返しで鎮静させていく二人。此武は壁際に立って腕組みをし、不敵な笑みを浮かべているだけだ。

家具やライトはすべて鎮静されたが、廊下を走る音や破裂音、すすり泣く声はいまだ聞こえてくる。

「ふむ。往生際が悪いですね」

呟いた此武は部屋の中央まで行くと立ち止まり、瞑目すると、

「――たかが人間霊ごときがオレ様に盾突くな」

本性に戻り、低い声で言うとその体から強い気が迸った。

「ぎゃああああっ！」

音がやみ、代わりにどこからか絶叫が轟く。苦しげな子供の声。

小室井は真っ青な顔で震えていた。

千咲が仮面のような笑みを浮かべたまま此武に近寄り、恩は大声に耳を押さえた。

「姿を見せろ。身の程知らずめ」

双眸を開いた此武が気を強めると、空中からオーバーオールを着た、十歳くらいの子供が落ちてきた。だがその姿はうつすらと透けている。

子供の霊は自分で自分を抱きしめるようにして、苦しそうに床にうずくまった。

「う……うぐ……」

「君がこれまでの怪現象を起こしていた張本人ですね？」

にっこりと笑顔で此武は子供霊に近づく。子供霊は恨めしげに此武を見上げた。

「なぜこんなことを？ 君は彼に恨みでもあるんですか？」

「……てけ……出ていけ……」

此武はふう、と小さくため息をつき、肩をすくめた。

「言葉が通じないんでしょうか？ 質問に、答えなさい！！」

がつんつ、と此武が子供霊の体を蹴り飛ばす。霊を蹴るなど、霊能者や退魔師でなければできないが此武には造作もないことだ。子供霊は床を転がり、呻いた。

「さあ、答えなさい。なぜ怪現象を起こしたのか」

「……出て……いけ……この館から……出て、いけ……」

「……………。穏便に事を済まそうと思ったのに残念ですね。消えるがいい、低級霊！」

此武が右腕を子供霊に向けた。その前に恩が立ちはだかる。此武は眉根を寄せた。

「待てよ、此武。ちゃんとこの子の話聞いてやれよ」

「聞きましたよ？ でも答えなかったのはそっちです」

「そんな脅すような聞き方じゃダメだっていうの。まったく、力押ししかできないんだからなー、此武は」

恩は子供霊に向き直る。子供霊は怯えながらも恩を睨みつけた。恩は子供霊のそばにしゃがむと優しく話しかけた。

「ねえ、君。俺たちは君の敵じゃないよ。俺たちは助けに来たんだ。この館の主を。そして君を」

「……………」

「まずは話し合おう？ どうしてあの人にイタズラをしたんだ？ 理由があるなら教えてほしい。ちゃんと聞くから」

恩の柔らかい笑顔に、子供霊は少しだけ警戒心を解いた。起き上がって俯くと、小さな声で話し出す。

「…ここから、出ていってほしかったんだ。ああすれば怖がって出ていくと思ったから」

「あの人が館にいるのが嫌なのか？」

「だって、ここはぼくのうちだから。ぼくと友達の」

「友達？」

子供霊が頷く。此武はつまらなそうに腕組みをしてそっぽを向く。ようやく落ち着きを取り戻した小室井が、おそろおそろ此武たちに歩み寄ってきた。

「ぼくの名前は順司。生きてた頃、ここに住んでたんだ。ぼくが死んだあと、お父さんたちは別の家に引っ越しちゃって、この家は新しい人にもらわれることになった。」

新しく来た家族の中にぼくと同じくらいの歳の子供がいて、一人でいるのはさびしかったから、思い切って話しかけた。その子は最初は怖がってたけど、少しずつ打ち解けて、友達になった。それがひろかず弘一だった」

「弘一?! それは父の名前だ!」

小室井が驚愕の声を上げた。

「父…? じゃああんたは、弘一の息子? …そっか、外ではもうそんなに時間が経ってたんだ。なのに弘一は…“約束”を守ってくれなかったんだね」

子供霊——順司は床に両手をついて、また涙を流した。恩が「約

束って何？」と諭すように尋ねると、順司は拳を握りしめた。その上に涙が一雫落ちる。

「弘一と友達になって：何年か経った。弘一は大人になって、会社を作った。その会社のために、弘一は家を出ていくことになった。その時に：約束したんだ。いつかまた、一緒に暮らそうって」

『それまで、この家は誰にも譲らない。だから、俺が戻ってくるまでこの家を守っていてくれ。何年後：何十年後になるか分からない。でも、俺は会社を成功させてまたこの家に戻ってくる。その時はもう一度、一緒に暮らそう。順司』

初めて会った時より十歳以上も年を重ねた友達。けれど、何十年も前にこの世から去った順司にとって、友達と呼べるのは弘一だけだった。だからその言葉はともうれしかった。

その日から順司は、その約束を信じて家を守り続けた。弘一が戻ってくるまで、この家は誰にも渡さない、と。

「だから、小室井さんを追い出そうとしてたんだね？ 弘一さんとの約束のために」

恩は順二の体にそっと触れようとする。けれど、この世のものではない彼には触れることができない。

順司に悪意はなかった。たった一人の友達との約束のために、一途な願いを貫こうとしただけだったのだ。

「でもね、それでも他人を傷つけちゃいけない。大切なものをまもるために：無力なもの相手に、強い力を使っちゃいけないよ」

恩は自分に言い聞かせるように言った。此武がそんな恩の背中を見る。

啞然とした顔で二人の会話を聞いていた小室井が、何かを決心したように表情を引き締めて、恩と順二に歩み寄ってきた。

「順司君、でいいかな？ 私では、駄目だろうか」

恩が小室井を見る。小室井はもう怯えてなどいなかった。決然としたまなざしで順司を見下ろしている。

「私が君の、新しい友達になろう。父の代わりに。父は君との約束

を忘れてはいなかったよ。ただ、忙しい毎日に追われ…病魔に冒された父は、植物状態になってしまったんだ」

「……！」

順司は弾かれたように小室井を見上げる。小室井は足の痛みを堪え、膝を折って順司と視線を合わせた。

「遺言はそうなる前に書かれたものだろう。その遺言に書かれていた『順司を頼む』という言葉の意味を理解することはできなかったが、さっきの君の話でようやく理解したよ」

「……………」

順司は困惑気味に小室井と正面から向き合う。思えば、こうするのは初めてのことだ。

ずっと小室井を邪魔者として見てきた。姿を見せるのも、こんなに近くで話をするのも、この一カ月で初めてなのだ。

「順司君、父との約束を、私が代わりに果たそう。私と、友達になつてくれないか？」

「……！」

小室井が笑顔を見せる。こんなふうには、優しい言葉をかけられたのは、弘一と別れてから初めてだった。

「…友達…なって、くれるの？」

小室井が首肯すると、順司の目から涙があふれ出す。

「…ふ…うわあーんっ。わああああんっ」

ずっとひとりぼっちだった。弘一がいなくなってから、館には誰もいなくなつた。

たくさんの月日が流れても、弘一からはなんの連絡もなくて。

さびしかった。忘れられたと思った。それでも、約束にすぎるしかできなくて。

ずっと独りで、約束を守ってた。

——でも、もうひとりじゃないよ。

順司は泣いた。たくさんの涙を流した。弘一との別れを惜しむ涙を。新たな友達ができた喜びの涙を。

依頼を終えた此武たちは、小室井から報酬をもらって会社へと戻る。此武が時空廻廊への扉を開き、一行は時空廻廊を歩いていった。「よかったなあ、今回は結構楽に終わって。あの二人仲良くやっていけるよな」

上機嫌の恩に、此武は半眼を向ける。

「ふん、甘いぞ、恩。今回は相手が鼻たれ小僧の霊だったから楽なものだったが、あれがもしも質の悪い悪霊だったらああはいかなかった。その甘ったれたヘナチョコな考えは捨てろ、ボケナス」

「なっ、へなちょこと言うなよお！」

「まあ、相手がどんなものだろうと、オレ様には足元にも及ばんだろうがな」

完全に他者を見下した笑みを浮かべる此武。恩は不服そうな顔で「ちえっ」と舌打ちした。

「いいか、恩。甘ったれた考えは早急に捨てろ。貴様は一生オレ様の玩具として、足元にひれ伏すのだからな」

「……」

「返事はどうした、下僕！」

「だわっ」

ゲシッ、と此武が後ろから恩を蹴り飛ばす。前につんのめった恩は、ちょうど空間の出入り口を抜けて会社のメインルームに出た。床を顔面スライディングする。

此武はどかっと社長イスに座ると、千咲にコーヒーを入れるよう命令した。

「さて、恩。貴様はもう帰っていいぞ」

「いでで…はい？」

「貴様の耳にはウジでもわいてるのか。帰れと言ったのだ」

イスを回転させ、部屋に唯一ある窓に体を向ける此武。恩は立ち上がった。

「もう帰っていいのか？」

「何度も言わせるな、愚鈍なガキめ」

「はいはい、分かりました。じゃあ、帰りますよー」

恩はソファアーに置いておいた通学カバンを取って、左側の赤いドアノブを回す。

このドアはノブによって繋がる空間が変わる。青いノブは時空廻廊、赤いノブは高科FWの廊下と繋がっている。

廊下に出た恩は建物を出て、最初に通ってきた裏路地に入る。そこからぴたり十三歩。空間がたわんで恩は時空を移動する。

現実空間に戻ってきた恩は、パーキングに自分のエアバイクを取りにいった家路についた。

高科FWのある空間は、現実空間とほぼ同じ速さで時間が流れる。あれから三時間が過ぎ、とくに日は暮れていた。

恩の住んでいる家は他の家より少々大きい。あの館ほどではないが、この辺りの家の中では抜きん出た大きさだ。部屋数も相当ある。

「ただいまー」

「あっ、お帰りなさい、めぐ兄！」

恩が家に入ると、顔に白い面をつけた子供が走り出てきた。

藍鼠色の長い髪はツインテール、面には目に当たる部分に細長い楕円の穴が空いている。

初めて見る人はたいいてい驚くもので、恩も最初は奇妙に思ったものだ。この子供は天狗族^{てんこう}で、犬の耳と尾、鳥の羽を持つ人外の種族である。

彼らは生後一年から成体になるまでの間、面をつけて過ごし、血族や心を許した相手以外に素顔をさらすことは禁じられている。

「お仕事お疲れさま！ ご飯もう食べた？」

「ううん、まだ」

「じゃあすぐあっためるね！」

元氣良くガッツポーズをして、子供はダイニングへ向かった。恩がリビングに入ると、アームチェアに座っていた婦人が笑いかけてきた。

「あら、恩くん。お帰りなさい」

「ただいま、織枝さん^{おりえ}」

四十代半ばくらいだろうか。膝にブラウンの膝掛けをかけ、木漏れ日のような優しい笑みを浮かべている。彼女は滋生織枝^{しきようぢ}。この家の主だ。

「ちょうどよかったわ。今、あなたの話をしていたところなのよ」
「え？」

「カーレンさん、紹介するわね。彼が恩くんよ」

恩はそこで初めて、織枝以外にも人がいたことに気づいた。織枝の向かいに座っていた人物が立ち上がる。

「！ あ…っ」

振り向いた人物に恩は驚愕し、頬を赤らめた。

「また、お会いしましたね」

柔らかに微笑むその人物は、空から落ちてきたあの少女だったのだ。

時空の狭間。高科FWの社長イスに深く座った此武は窓の外を見ていた。組んだ足の上で絡めた両手を置き、無表情で一人ごちる。

「ついにあの二人が廻り逢ったか。ならば動き出したのだな。宿命^{さだめ}の歯車が」

遠く、永い、終焉^{しゅうえん}の刻へと。

藍泉歴二〇一五年。宿命の扉は、今開かれた。

第1話 空から落ちてきた女神（後書き）

追伸列記簿

2010年5月末。とうとう始まったこの物語！ どーも皆さん、初めましてorこんにちは！ 作者の甲斐日向です。

僕の作品はこれで四作品目。これが甲斐日向作品初めての人も、他の甲斐日向作品を読んだことがある人も楽しんでいただければ幸いです。

この『Fate Spinner』（フェイトスピナーと読む）略して『フェスピ』はエデンシリーズという長編シリーズの一つです。フェスピだけ読んでもいいし、フェスピは読まないで他の作品だけ読んでも大丈夫です。

ただ、シリーズ作品をよく知りたい！ 結末まで見たい！ という方は、ぜひ全章読んでみて下さい。

エデンシリーズは一貫して、オリジナル世界観と設定で展開していきます。今回出てきたリーフェ&シェーシア、ドゥーラや恠妖^{あやし}など知らない単語が多々出てきます。

設定や単語の説明は本編でももちろんするのですが、詳しく知りたい方は僕が運営中のサイトをご覧くださいませ。

今回はまだ序章的なもので謎だらけですが、もしも興味がおありでしたら二話以降も読んで下さいね！

それでは次回の追伸列記簿でお会いしましょう！

第2話 宿命（さだめ）を紡ぐ者（前書き）

今回は環境依存文字を含むため、ケータイ閲覧の方はお手数ですが、サイトのケータイ版からご覧下さい。PCの方はこのままご覧頂きます。

第2話 宿命（さだめ）を紡ぐ者

腰まで届く緩やかに波打つ黄金色の髪。磨き抜かれたエメラルドのような瞳。人間とは思えぬ整った顔に白い素肌。

見間違えるはずがない。彼女はあの時の少女だ。恩は頬を紅潮めぐもさせて呆然とした。

「また、お会いしましたね。あなたが恩さんですか。初めまして、カーレンと言います」

軽くお辞儀をする姿は優雅だった。織枝おりえが二人を見比べる。

「知り合いだったのかしら？」

「ええ。昼間に一度お会いしました。空から落ちたところを助けていただいたんです」

「まあ、そうだったの」

女性陣はにっこりと笑い合う。恩はようやく現実を認識し始めた。当惑しつつ織枝に尋ねる。

「…あの、織枝さん。彼女がなんでここに？」

「散歩をしていた時に会ったんだけどね、どこにも行くところがなくて言うから連れてきちゃったの」

「きちゃったって…また拾ったんですか!？」

織枝は動物でも人でも、困っている人や捨てられているものを拾ってくる癖がある。恩は大きいため息をついた。織枝がおろおろする。

「だって、かわいそうじゃない？ 天界に帰りたくても、帰り方が分からないって言うんですもの」

「だからってむやみに拾ってきちゃダメって何度も……ん？」

今、何かおかしい単語が混ざっていたような。恩は小首を傾げて確認する。

「えーと、今なんて言いました？」

「『だって、かわいそうじゃない？ 天界に帰りたくても、帰り方

が分からないって言うんですもの』」

律義にも、織枝は一言一句間違えずに繰り返す。天界？　今、天界って。

「天界いいいっ？！！」

目玉が飛び出そうなほど恩は驚いた。天界とは誰だって聞いたことがあるだろう。死者が行くという死後の世界のことだ。なら、カーレンは死者だということか？

「ま、まさか君は死者だとか言うんじゃない？」

それならあの軽さには納得がいく。が、触ることができたし、肌も白いいえ血は通っているように見える。カーレンはきよとんとした。

「え？　いいえ、違います。わたしはファイリンです」

「ファイリン？」

「ファイリン 斂子は神が産んだ子供のことです。わたしは生命神の娘なんですよ」

今度こそ恩の目が飛び出した。生命神はその名の通り、生命を司る神のこと。

生物に命を宿したり、逆に奪うこともできる。天界にいるのがその生命神だと言われているが、真実だったのか。

「そういうわけだから、帰る方法が見つかるまで一緒に暮らそうと思うの。いいでしょう？　恩くん」

織枝のおねだりする子供のようなまなざしに、恩は折れるしかなかった。

こうして、この家に新たな住人が増えた。

翌日、恩は疲れた顔で登校してきた。好きになった女の子と、いきなり同居生活をするようになったのだ。しかもその子は神族。人外だ。

恩は人外に偏見はない。むしろ友好的だ。織枝も旦那が天狗族だ

から、偏見などあるはずがない。昨日、恩を出迎えた子供——織はとりはそのヒトとの娘で、十歳になる。

織は妹みたいなものだからいいが、年頃の女の子（外見的には）と一つ屋根の下で暮らすというのは、初めての体験なので緊張する。それだけではない。カーレンは人間界のことをある程度は知っているが、来るのは初めてだというので知らないことだらけなのだ。

神は基本的に食事を摂らないらしいので、箸やフォークの使い方も知らない。手づかみで食べようとしていて驚いた。使い方を教えたが、まるで幼児のようにたどたどしかった。

テレビや電話も近くで実際に見たことがなかったというので、興味津々な顔でいじっていた。

同年代というより、物を知らない幼児と暮らしているようだ。それが嫌なわけではないのだが、見た目とのギャップというか……

「まだまだ苦勞しそうだなあ……」

廊下を歩いてけ歩いていた恩は大きくため息をつく。と、ヴァモバの着信音が鳴った。この音はメールの方だ。

「メールだ。……って、此武コノムから！？ ……俺、此武にメルアド教えたっけ？」

疑問に思いつつもメールを開くと、簡潔な言葉だけが並べられていた。

【来る時に貴様の家にいる神の娘を連れてこい。】

……脅迫文か？ ……と思えなくもない文章だ。

「これだけ？ えーと、カーレンのことだよな？ ……なんでうちにいるって知ってるんだろ。まあ、此武なら知っててもおかしくはないけどさ」

何せ相手はあの此武だ。恩はパチン、とヴァモバを閉じた。

放課後、いったん家に帰った恩はカーレンと一緒にバイトに来てくれないか尋ねた。

今のカーレンは、あのままの服だと目立つということで、織枝が娘時代に着ていたという洋服を着ている。

「バイト…とはなんでしょうか？」

ほえほえとした笑顔で頬に手を当て、小首を傾げるカーレン。恩は脱力しかけた。

「あ…えーと、バイトっていうのは臨時の仕事…かな」

「お仕事ですか。恩さんはお仕事をしているんですか？」

「うん、まあ」

「えらいんですねえ、恩さん」

カーレンがにつこり笑うと、恩は赤面した。

「わたしもお仕事をするんですか？」

「そ、それは分からない。バイト先の社長が…カーレンも連れてこいって言うから」

しどろもどろに答える恩。カーレンは目を瞬かせてしばし考え、ポン、と両手を合わせた。

「お出かけですね？」

「え？」

「これってお出かけですよ？ うふふ、楽しみです」

どうやら一緒に行ってくれるらしい。カーレンの人となりに慣れるまで、まだ時間を要しそうだ。

「エアバイクには乗ったこと…ないよな？ ここにまたがって座るんだ」

エアバイクの乗り方を説明すると、カーレンは不思議そうな顔で後部シートに座った。恩も前部シートに座り、肩越しにカーレンを振り向く。

「じゃあしっかりつかまって…」

と、近距離でカーレンの顔を見てしまい、恩は赤面した。これほど接近するのは最初に会った時以来だろうか。

「こうでいいですか？」

一方のカーレンはまったく恩を意識していない。カーレンの細い腕が、するりと恩の腰に回される。恩の心臓がどきーんと跳ねた。
(にああああああ!!)

内心で悲鳴を上げた恩は、カーレンの背中から純白の翼が広がるのを見て、ぱかっと口を開けた。

「カ、カーレン、その翼……」

「あら、また出てしまいましたね。翼はですね、異性に触れると出してしまうんです。この翼は人間に見られてはいけないですよ」
「って、じゃあ今まずいんじゃないか!？」

「言われてみればそうですね」

カーレンは緊張感のないほわほわとした笑みを浮かべる。恩は脱力した。いいのか? そんな悠長に構えていて。

「でも、恩さんならいいです」

「え?」

「本当はダメですけど、恩さんにだったら見られてもいいです」
目を細めて笑うカーレン。たぶん彼女はなんの含みもなく言っているだけなのだろう。だが、恩の胸は淡い期待にときめいていた。
カーレンの顔を直視できなくて、恩は顔を逸らした。

「こ、このまま行ったら他の人にも翼見られちゃうよな。どうすれば……」

「そうですね……バイトにはエアバイクでないと行けないんですか?」

「いや、バスとかマグレブでも行けなくはないけど」

「でしたら、飛んで行きましょう」

恩は目を点にした。

「……はい?」

「飛んで行くんです。エアバイクに乗ったら、恩さんにつかまっていけないと危ないんでしょう? でも、わたしは異性に触れると翼が出てしまいます。なのでこのまま空を飛んで行きましょう」

「ちょ、ちよつと待って、カーレン。空を飛ぶって…え？ 本気で？」

エアバイクを降りるカーレンに恩は慌てる。人が空を飛ぶなんてできるのだろうか？ カーレンが翼をばさりと広げた。思わずその姿に見とれる恩。

ほんのり翼が光っているように見えて、夕日を受けて全身がきらめいている。まさしく女神だと思えた。

「さすがに誰かを運びながら飛ぶことはできないので、今から恩さんに風をまとわせますね」

「風？」

「ルンウェⅡフォカⅡエウゾザエルク・フォカⅡラーチⅡクムⅡウイトリセルク」

カーレンが何かの呪文らしき言葉を唱え、恩の体を風が取り巻いた。そしてふわりと宙に浮く。

「うわ！ 俺、浮いてる！？」

「念じれば恩さんの思う通りに飛ぶことができますよ。それと…ヴァアオⅡリストⅡパファウⅡジーコトアエルク」

新たな呪文を唱え、二人の体が透明になっていく。

「うえ！？ 体が透けてる！」

「これで他の人には見えないので、安心して飛べますよ。では行きましょうか」

飛び立ったカーレンの後を恩はもたつきながら追いかけた。確かに思い通りには飛ぶが、気を抜くとバランスが崩れる。

「なんだかすごいなー。あのさ、さっきから使ってる不思議な言葉ってなんかの呪文？」

「あれは神魔語です」

「ロジイーニルズワング？」

「はい。わたしたち神族や魔族が使う言語で、人間界以外の世界での共通言語です。人間界だけは独立した言語を使っているんですよ」
風をまとっているせいかスピードはかなり出る。この分だとあと

十数分もあれば入口につけそうだ。

「へえ：人間界以外の世界って、天界とか魔界とか？」

「はい。わたしたちが存在するこの次元には、六界りっかいと言って六つの世界があります。

一つはこの人間界。あなたたち人間の住む世界ですね。そしてわたしたちが住む天界、魔族の住む魔界、十七属の神々などが住む神界。

それからジョアロト：いえ、今はアダムスでしたね——などが住む魔法界、死者が住む冥界。この六つです」

「前半の三つは知ってるけど、後半は初めて聞いた！ 死者って天界に行くんじゃないのか？ 十七属の神々だって天界に住んでるんじゃない？」

「いいえ？ 天界にいるのは天帝と天使とフィリンだけですよ」

これまで信じてきた知識は、女神本人にあっさりと否定された。十七属の神々とは、人間界を守り支える柱とも言うべき神々のことだ。

この世界にあるすべてのものを創りし、大いなる母の創造神。すべての生命を生み出し、死した魂を癒す生命神。

現在、未来、過去を自在に行き来し、歴史を守る時空神。

強きを挫き、弱きを助ける勇猛なる意志を授ける戦神。

あらゆる音を生み出し奏で、美と調整を司る音楽神。

海に住むすべての生き物の守り神、海神。

太陽を動かし、あまねく世界を照らす太陽神。

月や星を動かし、夜空を彩る月神。

大地に宿り、恵みを与える地神。

火を操り、熱を生み出す炎神。

水を操り、雨をもたらす水神。

風を操り、大気を動かす風神。

雷を操り、電気を生み出す雷神。

木に宿り、草花を育てる木神。

氷を操り、雪を降らせる氷神。

岩に宿り、石を生み出す岩神。

金属に宿り、金属を生み出す金神。

神話では十七属の神々は天より人間たちを見守り、時には救いの手を差し伸べてくれるという。天使は死者の魂を天界に運ぶとされているが：

「：天使は分かるけど、天帝って？」

「天帝は天界を統べる王です。わたしの父でもありますね」

「へえー、父ねえ……………父！！？ ひよわっ」

驚いたことで集中力を欠き、恩はバランスを崩した。ぐらりと体が傾き、落ちかける。カーレンが慌てて恩の腕をつかんだ。

「大丈夫ですか？」

「あ：う、うん、大丈夫。ありがとう」

「気をつけて下さいね」

「あはは：」

つかまれた腕が熱い。どきどきしながら恩は飛ぶことに集中した。天帝が天界を統べる王ということは、人間界で言うならば国王や皇帝に当たるのだろうか。ならばその娘であるというカーレンは王女か皇女ということに？

（なんか：すごいな、カーレンって。女神ってだけでも信じられないくらいなのに：天帝とかすごく偉いんじゃないか？　なんでそんなすごい神の娘が人間界に来たんだろう。何か重要な理由があったりして：）

黙考していると、時空の狭間への入り口が近づいてきた。二人は狭い裏路地に降り立つ。

「ここがバイト先ですか？」

「違うよ。ここから時空の穴を抜けて、時空の狭間に行くんだ」

「時空の穴：あら、本当です。ありますね」

「分かるんだ。さすが！」

恩が時空の穴を通り抜けると、カーレンも難なくついてくる。穴

を抜ければ異空間。白い街を行き、高科FW^{フリーワーク}の建物に入る。

「カーレン、気をつけて。この社長、すっごく意地悪いから！」
階段を上りながら恩はカーレンに注意を呼び掛ける。

「あいつ、見た目は子供のくせに高飛車って言うか、傲慢で自己中心的で、いちいち小うるさ…」

素直な感想を並べたてながら、恩はメインルームの赤いドアノブを回して中に入った。その途端――

グワーンッ！！

恩の頭上に大きな金だらいが落ちてきた。恩は無言で床に倒れ、金だらいは余韻を残しながら転がっていった。

カーレンがきょとんとして立ち尽くす前で、倒れた恩の背中を銀髪^{銀髪}の少年がぐりぐりと踏みつける。

「誰が意地悪くて、高飛車で傲慢で、自己中心的でいちいち小うるさいだろ？ ふはははは、よくもそんなことが言えたものだなあ！」

腕組みをして哄笑を上げ、足元の恩を見下す此武。頭をさすりながら、恩はかろうじて首だけを起こした。

「いきなり何するんだ、此武ー！」

「下等な人間の癖に、主の陰口を叩くとはな。少々、躰が必要か？」
にんまり笑った此武は恩の前に回り、恩の頬を引っ張った。

「そのよく回る舌を引っ抜いてやろうか。それとも、首輪をつけて手足を縛り、地面を這いずり回らせてやろうか」

「はにやせ」

「ふははは！ よく伸びる頬だな。おもしろい、どこまで伸びるか試してやろうか」

此武は愉しそうに片方の頬も引っ張ってみる。まるで餅のようだ。
「ひやめお」

「玩具は玩具らしく、黙ってオレ様に従っていればいいのだ。今度ふざけた真似をしたら捻り潰すぞ」

パツと此武は手を放した。起き上がった恩は涙目で両頬をさする。カーレンが心配そうに顔を覗き込んでくる。

「痛いですか？ 恩さん。すみません、わたし何もできなくて」

「や、大丈夫大丈夫。気にしないでいいから…」

「貴様が天帝の娘か」

此武は何事もなかったかのように、社長イスに座ってふんぞりがえった。隣には相変わらず千咲チサキが佇んでいる。

恩は理不尽さを覚えるが、この少年には口でも力でも勝てない。なぜなら相手は人間ではないのだから。

「はい。カーレンと申します。あなたはどちら様でしょう？」

「ハッ。世間知らずのお姫様め。オレ様が分からんか」

足も組み、此武は嗤う。その体から強い気が放たれる。神族だけが放つ神気が。

ビリビリと体中に響く痛いほどの神気だ。恩は息を飲み、カーレンはきよとんと目を瞬かせる。此武は低い声で告げた。

「我が名はクロム。凍土のクロムだ」

「クロム……どこかで聞いた覚えがありますけれど？」

頬に手を当てて小首を傾げるカーレンに、此武ではなく恩の方が脱力した。

「ほ、ほんとに知らないの！？ あっちの世界じゃ有名だって本人が言ってたけど…」

ちらっと此武を見ると、静かに微笑んでいる。

（怒ってる！？ もしかして怒ってますぅー！？）

恩がうろたえていると、此武は腹を抱えて笑い出した。

「ふはははは！ ここまで何も知らんといっそ見事だな！ まあ、

知らんのも無理はない。話に聞くだけでオレ様たちが会うのはこれが初めてだからな。だが、戦神アスラオと言えば解るだろう？」

「アスラオ……ああ、思い出しました。お父様たちから聞いたことがあります。戦神の中で最強の一族ですよね？」

アスラオはゼーヴァ、クアトリに並ぶ戦神の名。これまで恩はアスラオとは一柱の名前だと思っていた。だが、カーレンの言ったように、アスラオとは一族の名だ。ゼーヴァ、クアトリ、他の十七属

の神々も同様に。

恩だけではない。世の人間のほとんどがそう思い込んでいるだろう。神話に出てくる神々の名前は個体名だと。

恩がそうでないと知ったのはクロムに会ってからだ。この真実を人間たちが知らないのは、当の神々たちが真実を伝えないからである。

世界中に古くから伝わる数々の神話は親から子へと語り継がれる。国や地域によっては多少内容が異なるものの、神話を知らない子供はいない。後世に創作されたものもあるが、事実を含むモノばかりだ。

特に世界創造神話は単なるおとぎ話ではなく、歴史上の事実として授業でも習う。十七属の神々は三十八柱いるとされ、神話の中でも中心になる神々なので、たいていの人はずべての名前を暗記している。

しかし、クロムの話が真実なら、十七属の神々は三十八柱よりもつといるのだ。カーレンだって数いる生命神の一柱になるわけだし。生命神と言えばゲルニムとルシャの二柱だが、これが一族名ならカーレンはどちらかの一族に入るのだろう。

「そうだ。さすがにそれくらいは知っていたか」

「最強の戦神一族と言われるアスラオのクロム様が、こんなにかわいらしい方だったなんて」

くすくすと笑うカーレンに、此武はため息をついた。

「阿呆か。この姿は仮の姿だ。人間界で動きやすいように子供の姿を取っているだけに過ぎん」

「あら…？ でもクロム様はなぜ人間界にいるのですか？」

カーレンの問いに答えず、此武は恩を見た。恩は思わず身構える。

「恩、オレ様は言ったな。時が来ればすべてを話してやると」

「！」

「その“時”が来た。貴様にすべてを話してやろう。貴様が背負う宿命を」

「宿命…？」
さだめ

此武の真剣な表情につられて、恩も表情を引きしめる。此武は恩とカーレンに座れ、と仕草で促し、二人がソファーに座ると静かな声で打ち明けた。

「この空間には、普通の人間が入ることはできん。ここに入れるのは特別な、選ばれし者だけだ。それは、時空渡りの力を持つ者」
とき

「時空渡り？」
とき

「時間と空間を自在に行き来することだ。魔法界のテュレーゼミアルどももそうする術を持っではいるが、奴らが入れるのは時空廻廊と時空神の神殿だけだな。
ときがみ

オレ様が時空神に作らせたこの空間に難なく入れるのはこの世で二人だけだ。そのうちの一人が恩、貴様だ。貴様には時空渡りの力が宿っている」
ときがみ

初めてクロムに会った時、ここに入れたのは偶然ではないと言われた。特別な理由があると。それが、時空渡りの力を持っているということだったのだろうか。

「時空渡りが使える人間は二人。一人は時空神の神殿を守る守人。
ときがみ

そして恩、貴様は人間の運命を導き、宿命を紡ぐ者——フェイトスピナーだ」
さだめ

「フェイト…スピナー？」

恩は困惑した。運命を導く？ 宿命を紡ぐとは、一体どういうことなのか。カーレンは口元に手を当てて、恩の横顔を見た。

「生あるものには必ず運命がある。いつどこで生まれ、誰と出会い、別れ、死ぬのか。それは生まれる前にすでに決められている。すべての生き物が、その運命通りに生き、死んでいく。

とは言っても、運命は変わることもある。特に人間の場合は些細なことがきっかけでな。変わるものもあれば変わらないものもある。運命とは不安定な未来だ」

よく物語の中で、運命は変えられる、というが、あながち間違っているのではない。選択次第で運命は変わるのだ。

「だが宿命さだめは違う。宿命さだめは『定められた運命』。どんなことがあるうとも決して変わることはない。運命は誰でも変えられるが宿命さだめは変えることができない。だがな、貴様ならばそれができる。貴様はこの世で唯一、宿命さだめを動かすことのできる人間だ」

「宿命さだめを動かすって…どうやって!？」

聞く限りかなり大事おおいじな気がする。運命が生まれてから死ぬことまでを指すなら、運命を変えらるというのは生死に関わることなのではないか？ 声が震えているのが自分でも分かる。

「宿命さだめは自然な流れに任せても必ず定められた通りになるが、いくつかの選択肢があるのだ。

他の誰にも、本人でさえもその選択肢を選ぶことはできないが、貴様だけは選択肢の中から一つを選ぶことができる。それが宿命さだめを動かすということ。

運命を導くというのは、選んだ選択肢になるように、その宿命さだめを持つ者を動かすことだ。貴様が誰かと出会ったり、助言をすることで運命が選んだ宿命さだめへと流れていく。そうして宿命さだめを紡いでいくのだ」

「…それってさ、つまりは他人の人生を俺が決めるってこと？」

「一部はそういうことになるな」

恩は手を膝の上で組み合わせてうなだれた。他人の人生を変えることができる。それはいいことなのか？ 悪いことなのか？ 運命を導いて、宿命さだめを紡いで、それで何があるというのか。

そもそも、なぜそうしなければならないのか。運命は決まってるというのなら、自然の流れに任せればいいのではないか？ 宿命さだめも、わざわざ選ぶことではないのでは？

「なんで、そんなことしなくちゃいけないんだ？ わざわざ俺が何かしなくたって、もう運命は決まってるんだろ？ だったらみんな、その通りに生きればいいじゃないか」

恩の嘆きのような言葉を、此武は一蹴する。

「それでは物足りんのだ」

……は？ 恩が顔を上げると、此武はデスクに頬杖をついて、めんどくさそうな顔をしていた。

「我々、神にとって、人間が生きる様は物語のようなものだ。すでに決まっている結末までをただ眺める。これまで多くの人生を見てきた。だが、それだけでは物足りなくなれたのだろう、あの方々は」

「あの方々？」

唯我独尊で、誰かに対して敬意など持ち合わせていなさそうな此武が、敬語を使うとは！ 信じられない行為に恩は驚いた。

「だからあの方々は一つの“プロット”を創り上げた。一部の人間の魂を使い、一つの物語をな。

ゲームのシナリオといった方が分かりやすいか。エンディングをいくつか用意し、キャラクターやプレイヤーを置く。その、ゲームの主人公たるプレイヤーがつまり貴様だ」

頬杖をついたままからかうような笑みを浮かべる此武。

「ゲームでよくあるだろう、選択によって様々なストーリーが生まれる。それと同じだ。ただ、貴様の場合はそれが現実というだけのことだ」

「ちょ、ちょっと待てよ。軽く言ってくれるけど、どっちにしろ俺の選択次第で他人の人生が決められちゃうんだろ？ そんな重大なこと、俺にはできないよ！」

「できない、ではない。やらねばならんのだ」

「！」

不意にまじめな顔で見つめられる。刺すような視線に、恩は二の句が継げなくなった。此武の視線はまるで槍のようだ。

そのまなざしに込められているのはいつだって侮蔑。此武にとって、人間は愚かで卑小な下等生物なのだ。

「人間の宿命さだめを紡ぐ。それこそが貴様の宿命さだめ。逃れることのできない運命なのだからな」

何も言えず、恩はただ拳を作り、視線だけを此武から外した。

「オレ様は貴様に助言し、補佐をするために、この空間を創らせたのだ。それがオレ様の役目だからな。

このオレ様が下等な人間の補佐をするなど、しち面倒で屈辱極まりないが、あの方々が決められたことだ、逆らうわけにはいかんでな。話はしてやったぞ。今日は他に用はない。その女を連れてとっとと帰るがいい」

うるさい虫を追いかうような仕事をする此武。恩は突きつけられた己の宿命がまだ受け入れられず、のろのろと帰る支度をした。

ほとんど無意識で帰ってきた恩は自室に引きこもった。

床に敷いた布団にゴロンと転がり、お気に入りのパンダぬいぐるみを足元から引き寄せる。

自分があの場所に迷い込んだのは偶然ではなかった。あそこで此武と出会ったこと、それも自分の宿命の一つだったのかもしれない。恩があそこで働くことになったのは、此武の気まぐれだと思っていた。気に入ったからと有無を言わず玩具と称され、アルバイト社員にされた。

せめて真実を聞くまではと思い、仕方なくバイトをしていたが、あんな重い宿命を知らされるとは思っていなかった。

自分が、他人の運命を動かし、宿命を紡ぐ。他人の人生が、自分の選択で決まってしまうのだ。

怖い。もしも、選択を間違えたら？ 此武はゲームのようなものだと言った。けれど、現実である。

現実がゲームと違い、やり直しはきかない。一度選んだら後戻りはできないのだ。結果がどんなものであっても。

（責任、重大じゃないか。宿命を紡ぐなんて：どうして俺なんだよ）自分でなくてもよかったのではないか。なぜ自分が選ばれたのか。こんな弱虫な自分に、そんなものが務まるのだろうか。

胸が締めつけられる。恩はぎゅうっとぬいぐるみを抱きしめた。

今日の天気は今の恩と同じようにどんよりしていた。学校の廊下の窓から空を見上げると、黒い雲が空を覆い尽くしている。予報では雨となっていたから、そのうち降り出すだろう。

昨日の此武の衝撃発言を引きずっていた恩は、窓に手を当てたままため息をついた。その時、どこからか不気味な声が聞こえてきた。

「み…つ…け、た……」

「！　なんだ！？」

周りを見回すが人の姿はない。声が再び響く。

「見つ…けた…！　見つけたあ——っ！」

廊下の角から何かが飛び出してくる。恩は飛びかかってくるそれに顔色を変えた。

「げっ…」

「めぐ先輩、会いたかったあー？」

がばちよと抱きついたのは恩より一回り背の高い男子生徒。短い黒髪に茶褐色の眼。男子生徒はうれしそうに恩に頬をすり寄せる。

「秋休み中、全然会えなかったし、休み終わってから時間合わなくて会えなかったけど、やっと見つけたよお〜」

「お、おい、啓也^{けいや}。そんなひつつくな！」

「あぁ、先輩のいけずう。いいじゃないですか、ちょっとくらい」「これのどこがちよっとだー！」

絡みつくように抱きついている男子生徒を恩は必死に引き離そうとする。彼は帝　啓也。恩の一つ下の学年で、なぜかやたらと恩に懐いている。悪い奴ではないのだが、このようにスキンシップが激しいので苦手なのである。

もう一人、スキンシップが激しくて苦手な人がいるのだが…出てこないことを祈る。

「ねーねー、めぐ先輩。そんなことより、なんか元気なかったみたいだけど、どうかしたの？」

問われて思い出した。恩はまたため息をつく。啓也は恩を抱きしめたまま横から恩の顔を覗き込んだ。

「悩みがあるなら僕でよければ聞くよー？　むしろ聞かせてほしい

！　ねーねー、せんぱーい？」

「いい加減離れろっての！」

恩は啓也を無理やり引っぱがした。

啓也はうつとうしかったが、あの明るさで少しは気持ちちが落ち着いた。

それでもまだ、宿命を受け入れるということに対しては踏ん切りがつかない。沈んでいる恩に、すれ違う人たちがかわるがわる心配そうに声をかけてくれる。

気にかけてくれてありがたいと思う反面、煩わしくも思う。沈んでいる理由なんて言えるわけがないし、言ったところで本気に受け取られないだろう。分かり合えるはずもない。だから放っておいてほしい。

（嫌だなあ、みんな好意で言ってくれてるのに、こんなふうと思うなんて。でも、本当のことだもんな……）

分かってももらえない淋しさはずっと昔に体験している。あの頃とは全然、状況も理由も違うけれど。

教室に入り、自分の席に着くと、頬杖をついて小さくため息をついた。

「恩、おはよう。珍しいね、君が落ち込んでるなんて」

「おはよー、恩ちゃん。どうかしたの？」

微笑笑しながら要が話しかけてくる。まひろの元気な声も。顔を上げると、恩はちよつと困ったように笑った。

「うん：ちよつとね」

「ずばり、恋の悩みでしょ！？」

まひろが机の前にしゃがみ、机上に両腕を乗せて恩を正面から見

上げる。恋――の単語で、恩はカーレンを思い浮かべてパツと顔を赤くした。

「ち、違うよ」

「そーお？ 顔赤くなってるけど？」

「~~~~つ、とにかく違うんだって！」

「でも悩んでるんだね？ 他人には言えないほど、重いことで」

要の静かな声に、ドキン、と心臓が小さく跳ねた。要は鋭い。眼鏡の奥の、湖面を思わせる静かな瞳は何もかも見透かしているようだ。

「恩がどんなことで悩んでいるのかは判らないけれど、聞くことはできるよ？ 話せることなら教えてほしいな。口に出すだけでも、少しくらいは楽になるかもしれないから」

似たようなことを何人の人に言われただろう。啓也も言っていたことだ。けれど、話しても無駄だと口を閉ざして、大丈夫と笑顔でかわしてきた。なのに、なぜか要に言われると話してしまいたくなる。

まひろがうんうんと頷き、満面の笑みを浮かべる。

「溜め込むのはよくないよ。無理にとは言わないけど、すぱーつと外に出しちゃってスツキリしちゃいなよ」

言えれば苦労しない。押し黙る恩の表情を見て、まひろはくすつと笑った。

「ねえ、他人には理解できないだろうって思ってるんじゃない？」

だから言えないでいる」

ハツとして恩はまひろを見た。いつもの無邪気な彼女とは違う大人びた表情で、まひろは恩を見つめていた。

「解るよ。まひろたちと君は、似てるから」

他人に理解されないこと。普通の人間とは違うもの。それはまひろと要も同じ。

「そういうこともあるよ。誰だって、そういう悩みや想いを抱えることがある。だけどね、だからって抱え込んだまましていると、心に

よくないよ。

理解されないから、他人とは違うからって壁を作ったら、いつか孤立していつちゃう。それを教えてくれたのは恩ちゃんだよ？」

生まれた時から、他人より優れた頭脳を持っていた。あまりに聡過ぎて、周りから恐れられた時期もあった。両親でさえ、二人のことが解らない、と嘆いたこともある。

異能者でなくても、ほんの少し他の人と違えば“異常”とされる。そんな現実を幼い頃に理解し、心を閉ざした姉弟。

いつからか互いだけが必要とし、理解し、求め合った。他人を、世界を見限り、二人だけの白い世界に心を預けた。

そんな二人だけの世界に入り込んできたのが恩だった。他人と距離を置き、心を許させずにいた二人に光を与えた。

今、他人と心から笑い合えるのは、恩のおかげなのだ。だから恩の悩む心を理解できるし、力になりたい。

「恩ちゃんがまひろたちにくれたように、まひろたちも恩ちゃんの心を軽くしてあげたいんだよ」

「……まひろ……」

えへ、と笑うまひろ。見れば要も、まひろと同じ気持ちだというように微笑んでいる。

理由は同じではないけれど、二人も恩も“普通”とは異なる。だからと言って“異常”でもない。少し他人と“違う”だけなのだ。

それぞれ悩みは違うけれど、普通と異なる者同士通じ合う何かがあった。そのせいだろうか、二人の励ましに不思議と心が軽くなり、恩は笑みを零した。

「――ありがとう」

此武は言った。できないではなく、やらねばならないと。

他ならぬ神の言葉だ。はねのけたところで、それが決められたことで、自分にしかできないことだというのなら……どんなことでも、怖くても、受け入れるしかないのだ。心を決めたが、もう一押しが欲しくて二人に尋ねてみた。

「あのさ、自分にやるべきことがあって、それは他人にはできないことで、自分にしかできない、でも命に関わる、とても責任重大なことだったら：どうすればいいと思う？」

命に関わると聞いて、二人は一瞬目を丸くしたが、笑顔で答える。
「やるしかないでしょ」

異口同音に同じ答え。きっぱりと返され、恩はホッとした。

「それがやるべきことならやればいいと思うよ」

「そうそう！ 自分にしかできないならなおさらね。だってそれって、すっごくカッコよくない？」

「かっこいい？」

恩が目を瞬かせると、まひろは立ち上がって要の腕に自分の腕を絡ませた。

「うん。やり遂げられたら、とっても素敵なことだと思う！ まひろを満足させられるのは要ちゃんだから、要ちゃんはカッコよくて素敵なのー？」

「ぼくを満足させられるのもまひろだけだから、まひろも素敵で可愛いよ」

「やーん、要ちゃん、大好きーっ？」

きゆうつと抱き合う二人に、恩は苦笑する。最後の方は脱線していたが、確かに話したことで少し気持ちが楽になった。恩はもう一度、心の中で二人にありがとうと言った。

宿命さだめを受け入れる覚悟はできた。だが、なんとなく此武とは顔が合わせづらかった。

此武からしてみれば、恩の補佐をするというのは、やりたくないのに無理やり子守フエイトスピナーをさせられるようなものだろう。

自分が宿命を紡ぐ者として生きると決めたなら、すべてが終わるまで此武は恩に付き合わされることになる。

（あの人間嫌いの此武が、好きであるなことしてるわけなかったん

だよな。俺をそばに置いてるのも、それが役目だからで……)

だからぞんざいに扱うのだ。玩具と称して見下し、いたぶって愉しむサディスト。

文句を言いつつも恩が彼のそばにいるのは、相手が神で逃げられないと本能的に悟っているから。そうでなかったらとつくに逃げ出している。

バイトは毎日なので、今日も行かなくてはならない。いつもより多少重い足取りで、時空の穴を抜けて高科FWに入ると、恩は硬直した。

「あら、恩さん。学校は終わったんですか？」

「カ、カーレン？　なんでここに？」

ソファアで紅茶を飲んでいたカーレンはにっこりと笑った。

「はい。今日からわたしもここで働くことになりました」

「！？　ちよっ、どういうことだよ此武！」

此武への罪悪感などどこへやら。恩はデスクに駆け寄った。優雅にカップを傾けている少年に詰め寄ると、此武はにたりと笑った。ああ、なんか嫌な予感がする。

「気に入ったのでな。人手は多い方がいいだろう？」

「ずがーん！」

恩は頭上に落石が落ちてきたようなショックを受けた。この傲岸不遜な神様の“気に入った”というのは、決していい意味ではない(自分への仕打ちから思うに)。

此武は子供だろうと女だろうと容赦しない。カーレンまで自分のような仕打ちを受けたら。恩は今度はカーレンに駆け寄る。

「ダダダ、ダメー！　カーレンまであいつの毒牙にかかっちゃいや、重労働をさせるなんてできない！　悪いことは言わないからここで働くなんてやめなよ！」

なんとか思いとどまらせようと説得を試みた恩だったが、此武の「その下種」という低音の囁きに、悪寒が背筋を駆け抜けた。

ギギギ、と此武を振り返ってみれば、怖いほどのダークオーラを

醸し出した此武が満面の笑みを浮かべていた。

「玩具の癖に主の決めたことに異を唱えるか。昨日言ったはずだなあ？ 今度ふざけた真似をしたら捻り潰すと。そんなに仕置きが喰らいたいのか」

「い、いや、あの…」

「ああ、貴様の頭には脳みそではなく綿が詰まっているのだな。だからもう忘れたか。ならばその体に刻みこんでやる。たっぷりとな」
いつの間にどこから出したのだろう、此武の手には鞭が握られていた。びしりと鞭を鳴らして笑う此武に、恩は顔を青ざめさせた。

その直後、恩の悲鳴が響いたのは言うまでもない。かくして高科FWに社員が一人増えたのであった。

第2話 宿命（さだめ）を紡ぐ者（後書き）

追伸列記簿

どうもこんにちは、梅雨に入って湿気にイラついている甲斐日向です。フェスピ第二話をお届けしました。

どうして日本には梅雨があるんでしょう。このジメジメ感、毎年嫌になります。恩たちが住んでいる藍泉国には梅雨がないので羨ましいです。その代わり、年間の雨量は多いんですが。

さてさて、今回は一話で出逢った少女の名前と正体が明らかになりました。彼女との出逢いが恩の宿命、そしてエデンシリーズの始まりです。

恩は他シリーズにも登場するんですが、他シリーズでは今のところ、たいして動きを見せてません。今後、徐々に動き出していきます。

今回でまたいろいろ難しいことが出てきましたね。六界やら十七属の神々やら：でも、ファンタジーにはこういった世界設定はつきもの！ 頑張って覚えて下さい！ まあ覚えなくてもいいですが、覚えていないと読む時苦労しそうですね。

そうそう、フェスピは月一更新の予定ですが、私情により来月以降の更新はしばらくお休みします。詳細はサイトの日記にて。

それでは次回の追伸列記簿でお会いしましょう。

第3話 時空（とき）の守人

小雨降る中、林をいくつかの黒い影が駆けていく。その後を追う小柄な少年。

地面がぬかるんでいて、泥が跳ねる。着てきたカップはすでに泥まみれだ。

「待てええええ！」

待てと言われて待つバカはいない。分かっているが、追いかける時はたいていこう叫んでしまう。

恩は確実に影との距離を縮めていたが、相手は人外だ。その速さは車並み。^{エアカー}…それに追いついている恩も相当な速さではあるが。

相手は鉄兎^{まがねず}という恠妖^{あやし}で、灰と黒のまだら模様の体毛、頭には三本の角があり、大きさは中型犬ほど。

今回の依頼は奴らの駆除だ。農作物を荒らされて困っている、とのことで、恩たちは奴らが出沒した村に赴いた。

村長から話を聞き、半日ほど畑を張っていたらようやく奴らが現れたので追いかけていたのだ。

「逃げるなあ！　ちよつとぐらい話を聞け！」

四匹の鉄兎は後ろを振り返りつつ林を疾走。だが、前方に生まれたい気配に、ハッと身を固くする。

雨でぬかるんだ地面の一部が盛り上がり、ズズズ…と人間の形を作る。鉄兎たちは警戒心を露にし、新たな敵に向かって威嚇の声を上げる。

「千咲さん！　足を狙って！」
チサキ

恩が叫ぶと、千咲は微笑をたたえたまま頷き、自身の両腕を土の鞭に変えて鉄兎たちの足元を薙ぐ。

鉄兎たちは足を払われ転倒。だが、一匹はその一撃をよけ、横の茂みへ飛び込んだ。

「しまった！」

一匹でも逃すと、あとあと面倒なことになる。恩が後を追おうとした時、空から羽根が舞い落ちてきた。

「ビフォー||ゴーゼエルク・フォカ||ムルガンレルク」

澄んだ声が頭上で歌うように紡がれる。すると風が渦を巻き、大きな細長い布のように鉄兎を優しく捕らえた。

「助かったよ、カーレン」

「お役に立ててよかったです」

背中^{はね}の翼をはばたかせて、カーレンが笑顔で空から降りてくる。

「じゃあ此武^{このむ}のところに戻ろうか、千咲さん…って、うわぁー!？」

千咲を振り返ると、体が半分溶けかかっていた。彼女は此武の作ったゴーレムで、体は土でできているため雨に弱いのだ。

「溶けてるっ、溶けてますうー!! あわわ、とりあえず木の下にでもっ」

「その程度でうろたえるな、バカモノ」

聞こえた声は子供の声。木陰から不機嫌そうな顔の此武が現れた。捕らわれた鉄兎たちを一瞥し、

「仕事は終えたようだな。来い、千咲」

「はい」

千咲が半分泥と化した体を引きずって此武のもとに行くと、此武は無造作に千咲の胸の真ん中に手を突っ込んだ。

本物の女性の体ではないとはいえ、恩がぎよっとする。

何かを探り出し、此武が手を引き抜くと千咲の体がざあっと砂のように崩れる。雨ですぐさま泥となり、地面に同化していく。

「これでいいだろう。本体^{こっち}の方が移動も楽だしな」

手を開くと、手のひらに濃い紫の石がある。これが千咲の本体だ。これを核にして土で体が創られている。

「はあ、何度見てもドキッとするよ…その核の出し方…」

「どこがだ。あんなことで揺れ動くとは、貴様の心臓はノミ以下だな」

「ノミと比べるなよっ」

ぶつぶつ言いながら、恩は風の鎖で捕らえた鉄単を他の鉄単のところに連れていく。

「さーてと。あのさ、君たち。なんで畑荒らすの？ 何か気に入くないことあるんだったら教えてよ。あ、というか人間の言葉分かる？」

木陰に移動して雨を凌ぎながら、恩はしゃがんで鉄単たちに問いかける。鉄単たちは顔を見合わせると戸惑いがちに頷いた。

「話聞いてあげるからさ、言いたいことあったら言つてよ。ね？」
にっこり笑うと、鉄単たちはポツリポツリと話し始めた。

「ふー、なんとか一仕事終わったなー」

雨上がりの帰り道、恩は頭の後ろで手を組んでため息をついた。
鉄単たちの話を聞き、事情を村長たちに話して事は一段落した。

鉄単が畑を荒らしたのは単に食べ物に飢えていたかららしい。

以前に住んでいた場所で食べ物が取れなくなり、村の近くに移り住んできたのだが食べ物を探しているうちに畑に迷い込み、つまみ食いをしていたら味を覚えてしまったのだそうだ。

食べ物さえあれば村に害を与えないということで、定期的に鉄単の住処に食べ物を届けるということで和解した。

人外との共存は相互の理解が必要だ。一方的な主張や拒絶は互いのためにならない。そのための橋渡しとなるのが恩たちだ。

恠妖も人間も話し合うことだってできるのに、互いを恐れたり自分より劣るものと認識して、そうした機会を持たない。

分かり合えない時もある。けれど、同じ命を持つ存在だ。分かり合えるチャンスがあるならそうするべきだ。

「村の方たちが解つて下さつてよかったですね。鉄単さんたちもよろこんでいましたし」

恩の隣を歩くカーレンがぽん、と手を合わせて微笑む。

「うん。大きな騒ぎにならなくてよかったよ。あ、初めての仕事は

「どうだった？」

「はい、とても楽しかったです」

「なかなかの業績だったぞ、カーレン。一匹逃しかけたどこぞのクソガキとは大違いだ」

「悪かったなー。：此武なんて何もしてないくせに」

小声でぼそつと呟いたが、しっかりと此武の耳には届いていたよう。此武は後ろを歩く恩の背後に瞬時に移動し、どげんつと尻を蹴飛ばす。

「下僕が口答えするな」

ずべしゃあつ

恩は地面に顔から突っ込んだ。泥だらけだったカッパがさらに汚れる。

その上、少しカッパの間から泥が入ったらしく、服にまで泥がついてしまった。

「ああーっ！！ 何するんだよ、服汚れちゃったじゃないかあ！」

「やかましい。換装すれば関係なくなるだろうが」

「それはそうだけどさ…」

ううう、と恩は涙目でカッパを脱ぐ。今の恩が着ているのはいつもの高校の制服ではない。フエイトスビナー宿命を紡ぐ者としての宿命を受け入れた時、此武がくれたものだ。

『恩、これから宿命を紡ぐ者として生きるならばこれを着ろ』フエイトスビナー

鞭で恩をがんじがらめにした此武が片手を中空に広げると、光で描かれた五芒星の魔法円が現れ、そこから衣服が出てくる。

『これは宿命を紡ぐ者である証だ。おい、聞いているのか』フエイトスビナー

『もめごまぶべ（これを外せ）——っ！！』

口まで鞭で塞がれ、恩はバタバタと足をばたつかせた。此武は舌打ちし、恩の体を起こすと鞭を力任せに引っ張った。

『ぶげええええっ！？』

引っ張られた勢いでギョルルル、と高速回転し、鞭が外れる。恩は目を回して床に尻もちをついた。

『はらほろひれはれ……』

『ちっ、軟弱者が。恩、“換装”と言ってみろ』

『うえゝ？ か、換装おゝ』

目を回しながら恩が言うのと、魔法円から出てきた衣服が光った。恩の着ていた服が消えて、代わりに魔法円から出てきた衣服がいつの間にか身についている。

勝手に服が変わり、恩は目をぱちくりさせた。

『わっ、なんだこれ！？』

緑色に縁取られたレモンイエローのTシャツ、灰色のフードがついた黒いノースリーブジャケット、淡い水色のカーゴパンツ、腕には緑のリストバンド。

『まあ、恩さん、素敵ですよ』

『ほ、本当？』

カーレンの賛辞に恩は頬を赤くした。

『この空間に入る時や、宿命を紡ぐ者としての仕事の時に着るがいい。換装と念じればいつでも着替えられる』

『へえー。便利だなあ』

普通の素材とは少し違うようだが、着心地がよい。それに、なんとなく体が軽くなったような気がして恩は上機嫌になった。

カップを脱ぐと、宿命を紡ぐ者^{フエイトスピナー}の証である服は泥で汚れてしまっていた。恩が「換装！」と言うと服が光り、バイトに来る前に着ていた高校の制服になった。

「やっぱりこっちの方が落ち着くなあ。なあ、此武。あの証の服って絶対着なくちゃいけないものなのか？」

「当然だ。あれは自由に時空^{とき}渡り^{わたり}をすることを許された者の証でもある。あれを着ている限りは時空^{とき}渡り^{わたり}をした先で何をしようが大半

は許される。

それにだ、あの服そのものに神の加護が与えられているからな、多少の防護服にもなる」

「そんなすごいものだったんだ…」

呟いて、恩はもう一度「換装」と言う。証の服についていた泥はきれいさっぱり消えていた。

改めて証の服を珍しそうに見回している恩を一瞥し、此武は中空に手を伸ばして時空廻廊じくうかいろうへの入り口を開いた。

「今日の仕事はこれで終わりだが、もう一つ行く場所がある」

「ああ、会社出る前にそんなこと言ってたっけ」

「そうだ。貴様と同じく時空渡りときの力を持つ人間——時空タイムプロテクタープロテクターの守人のもとへ」

雨の匂いの混じる風が強く吹き抜けた。恩は軽く目を瞠って、振り返る此武を見つめた。

「タイム…プロテクター……」

「奴は常に時空神ときがみの神殿にいる。とっとと行くぞ」

時空廻廊じくうかいろうへの入り口を開き、此武はスタスタと中に入っていく。

慌てて恩とカーレンも続いた。

いまだにこの不思議な空間は慣れずにいる恩。上下も前後も左右も判らない。もしもこんなところに一人放り出されたら、間違いく迷う。

だが、此武は道が見えているかのように躊躇ちゅうちういなく歩いている。

それにしても、何度も時空廻廊ときがみを使っているが時空神ときがみの神殿など見かけたことがない。一体どこにあるというのだろう。

神話の中にも出てくる時空神ときがみの神殿は時空を司る神、時空神じくうしんジルティリードが住んでいるという。

ただ、どういふところなのかは神話では語られておらず、詳しいことは誰も知らない。神族の一柱である此武ならば知っているだろうが。

だいぶ歩いてきたが、時空神ときがみの神殿らしき建物は一向に見当たら

ない。恩は前を歩く此武に尋ねた。

「なあ、此武。時空神の神殿ときがみについていつ着くんだ？」

「五月蠅い。黙ってついてこい」

ぴしゃりと言われ、恩は口をつぐむしかなかった。ひたすら無言で歩き続けてどれほど経ったか。唐突に、時空の狭間を出入りする時のような感覚が全身を駆け抜ける。

広がった光景に恩は目を見開いた。黒い壁に囲まれた円筒形の広い部屋。天井はステンドグラスで、そこから光が落ちてきているため明るい。

黒い床に白線で描かれた複雑な魔法陣。正面に見える巨大な三つの扉。

どれも銀色で、表面には太陽や月、星、雲、空や大地、山に海、草木や花、鳥、動物、人間や天使、悪魔、恠妖など、あらゆる生き物や自然物のレリーフが施されていて壮観だ。

「う…わあ…すっごく綺麗…」

三つの扉のレリーフは一続きになっていて、一つの絵になっているようだ。

レリーフの絵に見とれていた恩は、左手の黒いドアから誰かが出てきて驚いた。人の気配などまったく感じられなかったのに。

出てきたのは二人。一人は白いローブは足元まで覆うほど長く、顔はフードに隠されていて下半分しか見えない。

右手には灰色の杖。先端が鉤爪のようになっていて、その中央に細長い透明な六角水晶が浮かんでいる。

もう一人は――

「！！」

見ただけで分かった。紺色の長い髪は毛先が淡い浅葱色。そのグラデーションが光を弾き、まるでオーロラのように美しい。

伏し目がちなマリンブルーの瞳は角度によって様々な色に変化するプリズム。

典雅な身のこなし、整った顔立ち、何よりもその身が放つ清らか

な神気。

「……時空神、ジルティリード……」

声が震える。あまりの神気の清廉さに気圧された。此武——いや、戦神クロムとは全く質の違う澄んだ神気と存在感。これが、時空神なのか。

瞬きすらできない恩を救ったのは白いローブの人物だった。

「やっと会えたですね。あなたが宿命を紡ぐ者さんですか？」
フエイトスピナー

やわらかなかわいらしい声。恩は我に返って、白いローブの人物を見た。

「あ……はい」

「はじめましてですね。わたしは時空を守る者、時空の守人です」
タイムプロテクター
そう言ってフードを外し、ローブを脱いだ。姿が露になったその人物はかわいらしい少女だった。

中学生くらいだろうか。伽羅色のセミロングの髪、茶褐色の大きな瞳、恩よりも小柄な体。だが恩が一番驚いたのは、彼女の服だ。黒い長袖のタートルネックシャツ、緑で縁取りされたレモンイエローのノースリーブジャケット、胸元を飾る緑のロングリボン、淡いピンクのひざ丈のスカート。

多少、色の組み合わせは違えど、自分と似たような服。呆気にとられていると、少女はにっこり笑った。少しだけどきとする恩。

「わたしの名前は皇斐依織^{すめらいおり}。あなたの名前も教えてくださいです」

「お……俺は、穂積 恩」

「恩くんですね。それじゃあ、めーちゃんって呼んでいいですか？」

「め、めーちゃん？」

「ダメですか？」

まるで雨に濡れた小犬のような目で、小首を傾げる依織。どきゅーんっ、と恩の心臓が射抜かれた。恩はぶんぶん首を横に振って、「ううん！ いいよ、それで！」

「はいですっ。あのですね、イオはめーちゃんのパートナーになるです。同じ時空渡りの力を持つ者として。だからこれからよろしく

です！」

「う、うん。よろしく、依織ちゃん」

「呼び捨てで構わないですよ」

依織と握手を交わす恩。そのほのぼの空気を破ったのは時空神の単調な声だった。

「これで、時空の守人タイムプロテクターと宿命を紡ぐ者フエイトスピナーが揃った」

恩と依織はジルティリードを振り向いた。

「終焉しるべの刻ときへの導となる二人の人間よ。そなたらのすべきことは、宿命の鍵を持つ人間、“フエイトパス”を導き、終焉しるべの刻を見届けること。

時には時空を超え、歴史の一部となれ。そのために、我の加護をそなたらに授けよう」

神の言葉は口にするだけで力が宿る。二人は大きく頷いた。これでもう、本当に逃げられない。今、この瞬間から自分は宿命フエイトスピナーを紡ぐ者として生きるのだ。

此武は腕組みをして斜に構え、皆の様子を見ていた。

ちらりと横目でカーレンを見れば、改めて覚悟を決めた恩の背中を、わずかにさみしそうな表情で見守っている。

恩はまだ知らない。己の選んだ道が重く、困難で、つらい道であることを。

カーレンは気づいている。彼らの選んだ道が、永く、哀しい道であることを。

それは、永い時を生きる者だから解る寂しさ。此武はつまらなそうに小さく鼻を鳴らし、瞑目した。

「それでは、めーちゃん。今日は会えてうれしかったですよ。お仕事の時、また会いましょうです」

「はは、俺、まだ宿命を紡ぐ者フエイトスピナーのことよく解ってないから、いろいろ手助けしてくれると助かるなあ」

「おまかせです！　しばらくお別れですけど、イオはいつもこの神殿にいますので、いつでも遊びに来てくださいです」

「あー、此武が許してくれればね」

苦笑して此武を見れば、此武は不機嫌そうな顔をしていた。え、何か怒らせるようなこと言った？ 焦る恩。

「用件は済んだか。ならばとっと帰るぞ」

此武がイライラとした調子で言う、ジルティリードが抑揚に乏しい声で呟いた。

「相も変わらず短気であるな」

ぴく、と此武の片眉が上がる。途端に空気が張り詰めた。恩はたら：と冷や汗をかく。何やら危なげな雰囲気！

「貴様こそ、いつ見ても気の抜けた顔をしてやがる。珍しく起きているかと思えば、頭は眠っているんじゃないか？」

「減らず口も変わらぬ。その珍妙な姿は、幼稚なそなたにちょうど良いな」

「幼稚、だど？」

ぶわっ、と此武の全身から怒気が放たれる。殺気にも似たそれに、恩は慌てる。

「ちよっ、此武！ もう帰ろうよ！ な！？」

「オレ様が幼稚だと言うなら、貴様は腐った年寄りだ！！」

怒号とともに、此武は真の姿に戻る。黒いざんばらな髪、二メートルを超す長身、身にまとうのは民族衣装のサリーに似たものと古ぼけたズボン。

此武の真の姿——戦神クロム。狂神とも言われる異端の神。

「凶星を指されると激昂するところも変わらぬ」

「なんだと：っ」

此武の時と違い、低い大人の男性の声。今は怒りで一層凄みが増している。

恩は止めなければ、と思うのに体がすくんで動けずにいた。カーレンはぽやんとした表情で成り行きを見守っている。

クロムが今にもジルティリードに掴みかかろうとした時、依織が両手を広げてクロムの前に立ちはだかった。なぜかクロムに背を向

けて。

（い、依織ちゃん！？）

「ケンカしちゃダメなのです」

依織は困ったように眉を寄せて、諭すようにジルティリードを見上げた。

「みんな仲良くするですよ」

「……………」

無言のまま依織の目を見つめ返していたジルティリードは、ややあつて小さくため息をついた。

「……分かった」

頷くジルティリードにっこり笑い、依織はクロムを振り返った。

「あなたもです。ケンカはよくないですよ」

揺るぎないまっすぐな瞳。ジルティリードに似ているがそれとは少し違う静謐^{せいひつ}さをたたえたそのまなざしに、クロムは深く眉間にしわを寄せ、舌打ちをしてから仮の姿に戻った。

「今回は引いてやる。感謝しろ、時空神。行くぞ、二人とも」

くるりときびすを返す此武に、恩はあっけに取られた。あの此武を引きさがらせるとは。

（依織ちゃんってすごい！！）

感動で胸がいっぱいになった。ジルティリードたちに一礼して此武の後に続くカーレン。

恩は依織に「またね」と手を振って二人を追い、時空神の神殿を後にした。

恩に手を振り返して笑顔で見送った依織は、三人がいなくなると苦笑しながらジルティリードを振り向く。

「もう、からかったりしちゃダメなのですよ。ジルさまは年上なんですから」

「…あれとは反りが合わぬ」

「だからってああいう言い方はよくないです。あのですね、ジルさ

ま」

依織が背伸びをして両手を伸ばしてくる。ジルティリードはクロムほどではないが、人間よりかなり長身だ。小柄な依織はその胸ほどまでしかない。

なのでジルティリードは膝を折り、依織と視線を合わせてやった。依織の両手がそつとジルティリードの頬を包み込む。

「イオはジルさまが優しい方だって知ってるです。それを他の人にも分かってほしいのです。だからあんな神経を逆なでするような言い方はよくないですよ。」

みんなにジルさまのこと誤解されるのはいやですから、これから気をつけて下さいです」

慈しみに満ちた依織の笑顔。ジルティリードはゆっくりと目を伏せた。

「：今後は努力しよう」

「はいです」

にっこりと、依織はうれしそうに笑みを浮かべた。

第3話 時空（とき）の守人（後書き）

追伸列記簿

どうも皆様、こんにちは！ だいぶ日にちが空いてしまいましたが、すみません、甲斐日向です。無期限の更新停止期間を終え、復活致しました！

いやー、前回分と時間があいてしまったせいで自分でも内容忘れてました。

今回、千咲さんが初めてゴーレムっぽいところ見せましたね。千咲さんの体は土でできているので、水に弱いし地面と同化することができます。

そして今回はまた新キャラたちの登場です。彼女は今後、重要なキャラになってきます。もちろんジル様もね。

エデンシリーズ（特にマジラビ）を読了した方で勘のいい方、とか記憶力のいい方はイオの登場に「あっ」と思うかもしれませんね。

あ、マジラビと言えば、今回から文字数減らしました。なので一話分がマジラビ並みの文字数です。ちょっとは読みやすくなったでしょうか。

それでは次回の追伸列記簿でお会いしましょう！

二〇一〇年十一月九日（火）

番外編 今日から貴様はオレ様の玩具だ

秋休み初日。恩は友人の亜檜アズサ、玲汰れいたと一緒に宝生に遊びに来ていた。

中心部である九ブロックはビル街ばかりで少々煩わしいが、狩城市側のブロックにはよく遊びに出てくる。

今日の三人の目的地は四ブロックと五ブロックの境近くにある紅こう国街こくがだ。

紅国街は藍泉の隣国、曉篠あきしの大帝国の街をモデルに作られた料理店街である。紅国というのは、曉篠の古い呼び名だ。

「だいぶ涼しくなってきたよな。こういう時はあったかいもの食べたいな」

きよときよとと露店を見て回る恩。涼しくなってきた、と言いながらも半袖で上機嫌な恩の後ろを、亜檜と玲汰は苦笑交じりにのんびりといっていく。

「あんまりはしゃいでると転ぶぞ」

「恩くん、気をつけるんだな」

「転ぶか！ 子供じゃないんだぞ！」

ぶんぶんと手を振って抗議した恩は、直後に前を歩いていた人にぶつかった。ペコペコと謝っている恩に、二人はくすくすと笑った。

「子供だよな？」

「みたいなんだな」

「もうー！ 二人が早く来ないからっ」

恥ずかしそうに気まずい顔で駆け寄ってきた恩に、亜檜がデコピンをくらわした。

「いてっ」

「こーのじゃじゃ馬！ そのうち迷子になっちゃうぞ」

「じゃじゃ馬…って、女の子に対して言う言葉だろ！？」

「まあまあ。ほら、これでも食べるんだな」

「むぎゆ」

玲汰に肉まんを口に押し込まれ、恩は少々不満げながら肉まんを咀嚼する。

三人は紅国街に頻繁に来ているので、常連客として認知されている店も多く、この肉まんもいくらかまけてもらった。

「やっぱり万福茶房まんふくさぼうの肉まんはおいしんだな」

「まあ、まずまずかな」

「まーたまた！ 好物のくせに、穂積は素直じゃないなあ」

「べ、別に好物じゃ…」

「お。穂積、あそこ寄ってくか？ 新作出てるかもよ」

亜櫛が指差したのはショーウィンドウにパンダのぬいぐるみが置かれた店。看板もパンダの絵が描かれ、店名も『ぼんだの館』となっている。恩は内心ときめいていたが、表には出さないようそっぽを向いた。

「い、行かないよ！ 別にパンダ好きじゃないし…」

「じゃあ僕たちだけで行こうか。なー？ 井上」

「恩くんは行かなくていいんだな？」

「いいよ。行ってくれば？」

本当はすぐ行きたくてうずうずしている。だが、プライドが許さない。

恩には昔から心に決めた目標がある。それは“逞しく堂々としたカッコいい男になる”ということ。

今は縁を切り、離れたところに暮らしている兄に憧れていた恩は、いつしか『兄のようにかっこいい男になりたい！』と思うようになり、兄の真似をするようになった。

兄のように、冷静で力強く立派な男に。それが恩の目標ゆめだ。

兄はかわいいものに興味がなかった。女々しいことも嫌いで、ぬいぐるみなんて見向きもなかった。だから恩もかわいいものはなるべく避けるようにしている。

だが、恩はパンダに目がない。小さい頃はパンダグッズをたくさ

ん集めていた。いや、今でも密かにパンダグッズを集めている。

それを知っているから、二人は恩を誘っているのだ。恩は兄のような男になるという目標と大好きなパンダとの間で揺れ動いていた。うーうー唸りながら悩んでいると、玲汰がちよつと困ったように笑いながら視線を逸らしつつ言った。

「おれたち二人だけだとちよつと恥ずかしいんだな。でも、もう一人一緒に入ってくれたら入れそうな気がするんだな」

「！」

恩がぴくんと反応する。玲汰がちらつと恩を見ると、恩は腕組みをして「仕方ないなあ」と答えた。

「俺が一緒に入ってあげるよ。言っとくけど、入りたいからついてくんじゃないからなっ？　俺以外にいないから、仕方なく一緒に行くだけなんだからさ！」

ムキになって否定する恩の頭を亜櫛がわしゃわしゃと撫でる。

「わーかってるって。ありがとな、穂積。助かるわ」

「やめろよっ、髪がぐしゃぐしゃになるだろ！」

亜櫛が玲汰にウインクする。ああでも言わなければ恩は動かない。表情や態度に出やすいくせに素直じゃないというか、かっこいい男にこだわり過ぎているというか。

そんな天の邪鬼を装って葛藤しているところがかわいいのだが。

玲汰も笑みを返して店に入った。

店内を見て回り、他の店も満喫した三人はそろそろ帰ることにした。

「今日も歩いたなー。穂積、疲れてないか？」

「あー、あのさ、俺ちよつと寄ってるところあるから先帰ってて」

そわそわし始めた恩を二人は気づかないフリをする。

どうせパンダグッズを買いに行くのだろう。さっきの店ではプライドを守って何も買わずに出てきたのだから。

「うん。じゃあまた今度なんだな」

「気をつけて帰れよ。襲われたりしないようになく？」

「何バカなこと言ってんだよ！ さっさと帰れば！？」

ひらひらと手を振って帰っていく亜櫛の背に、恩はいっつと齒を剥き出した。

「もう、亜櫛はいつもからかってばかり。さて、と」

くるっと踵を返した恩は、うきうきと『ぼんだの館』への道を戻っていた。

パンダグッズを買い込み、ご満悦な恩は一人、帰路に就いた。

紅国街最寄り駅までは歩いて二十分ほど。バスも通っているが、この程度の距離でバスを使うのはお金がもったいない。

「えっへへ、新作ゲット♪ どこに飾ろうかな。あ、そうだ」

気分のよかった恩は何気なく、いつもと違う道を通ってみようと思った。

いつもはまっすぐ行く道を左に曲がる。狭いビルとビルの間の道。人がギリギリすれ違える程度の幅しかない。

それでも気にせず鼻歌交じりに恩は進む。十一歩、十二歩、十三歩――

ぬわぁん

「！？」

突如、空気が変わった気がした。一瞬、強い風に押し戻されるような感覚がしたのだが。

「なん、だ…？ なんか…やけに静かなような…」

ほんの一秒前まで、大通りの喧騒が聞こえていたはずなのに、今はしんと静まりかえっている。妙に思いながらも、恩は道を抜け――愕然とした。

広い通りには人が誰もいなかった。エアカーも走っていない。建物と街路樹だけがある。しかもそれらはすべて白。青い空も太陽も

雲もない。

「なんなんだ…ここ…え？ あのだの向こうってこんなんじゃないよな？ どうなってるんだよ。全然、なんの気配も——」

いや、一つだけある。生きているものの気配。

恩は首を巡らせ、気配を探す。そして見つけた。真っ白な建物の中に、一つだけ。灰色の建物を。気配はそこからだ。

恩は迷わずそこに足を向けた。人間か人外か分からないが、この空間から抜け出すすべを知っているかもしれない。

灰色の小さな雑居ビルの階段を上る。気配は手前の部屋からだった。なぜかドアノブが左右両方についている。

（なんでノブが二つ？ …まあいつか。どっちでも開くだろ。うーん、右のノブにしてみよっと）

右側のノブを回し、そおっと中を覗いてみる。

「あのー…すみませーん」

「おや、お客様ですか」

聞こえてきた声に、恩は目を瞬かせた。ほとんどモノクロ調の殺風景な部屋の奥、正面のデスクの脇に立っていた少年がこちらを振り向いた。

銀色にも見える灰白色の髪、シェーシア人特有の眼は綺麗なバイオレット。端正な顔立ちなのに、左側は長い前髪で隠れてしまっている。

「中へどうぞ。お話を伺いましょう」

少年はにっこりと朗らかに笑った。促されるまま恩は室内に入り、中央のソファ―に座った。

「お客様が直接こちらにいらっしゃることは珍しいんですが…あなたのご依頼は为什么呢？」

「は？ 依頼？」

目をぱちくりさせる恩に、恩の向かいに座った少年はきょとんと

して問いかける。

「ええ。こちらには依頼でいらしたのではないんですか？」

「あ、いや、ごめん。俺はその一、なんで分からないんだけどこの空間に迷い込んで、ここからの出方教えてもらおうかなーと思って」

苦笑する恩の言葉に、少年が一瞬警戒するように表情を変えたことに、恩は気づかなかった。

「そうだったんですか。失礼しました。依頼人以外でここに来る方は滅多にいないので。この空間からの出方は簡単ですが、それを教える前に、一つ頼まれてくれませんか？」

「え？ 何？」

「今、依頼が一件入っていて、依頼人がそろそろいらっしやると思うんです。それで、よければその仕事を手伝って頂きたいんですよ」

「仕事？ さっきも依頼とか言ってたけど、君は何かの仕事をしてるの？」

「はい。ここは高科フリーワークという、人外に関する悩みや事件のみを受け付けるなんでも屋なんですよ。僕は社長の此武^{コノム}Ⅱ高科です」

「き、君が社長！？」

どう見ても十歳前後の少年だ。こんな子供が社長って：

「もう一人助手がいるんですけれど、人手は多い方がいいですから。どうでしょう？」

正直なところ、こんな妙な空間からとっと出て、買ったばかりのパンダグッズを堪能したい。しかし、このまま立ち去るのもなんだか気が引ける。

「んー、分かった。手伝うよ」

「ありがとうございます。ところで、お名前は？」

「ああ、穂積 恩だよ」

「恩君、よろしくお願ひしますね。それでは助手を紹介します。チサキ！」

パンパンツ、と此武が両手を叩くと、入り口から美女が入ってきた。

紫紺色のストレートな長髪。シスターのような服と落ち着いた佇まい。美女は口元に微笑をたたえたまま、まっすぐに此武の傍らに歩いていく。

「これが助手のチサキです。チサキ、彼は恩君。今日、仕事を手伝ってくれることになったんだ」

「よろしく願います、恩さま」

「あ、はいっ、こ、こちらこそ」

深々と礼をするチサキに対して、恩は思わず立ち上がって頭を下げる。その時、入り口のドアがノックされた。

「どうぞお入り下さい」

此武が返すと、入ってきたのは数匹の小さな恠妖たちだった。

頭に三本の角が生えた猫のようなもの、ずんぐりむっくりなのっらべらぼう、サッカーボール大の玉に一つ目と小さな手足の生えたもの。

そして一番恩の目を引いたのは、白と黒の毛の割合が通常とは逆転したパンダのような生き物だった。

てけてけと歩いてきた恠妖たち——恩の場合はパンダみたいな恠妖にだけ視線が注がれている——は此武の横に立つと、ぺこりとお辞儀した。

「ボクたち、御井浪州みいろうノ塩根山しおねやまカラ来マシタ」

「悪い恠妖に住みかを取られそうなんだ」

「助けてくんさい！」

「どうだい」

恠妖たちが口々に言う。パンダのような恠妖が鳴くと、恩はキュン？ と胸をときめかせた。

「君たちが依頼人ですね。詳しく話を聞かせてくれますか」

「一カ月前：ボクたちが住ンデル山二、大キナ恠妖ガヤツテキタンデス」

三本角の猫がうなだれて話し始めた。

「ライオンミタイナ体デ、頭ガ馬ノ頭ノ奴デス」

「馬頭にライオンの体：ラジュメデスですね」

「ラジュメデス？」

恩が眉をひそめると、此武は微笑んで説明する。

「藍泉で言う馬獅子^{うましし}です。元は西洋の恠妖なんです、時代が進むにつれて東洋にも入ってきたんですよ。」

ラジュメデスは縄張り意識が強く、自らの縄張りを広げては、そこに侵入するものを容赦なく排除します」

「へえ、人外のなんでも屋をやってるだけあって詳しいね」

「まあ、当然です。今回の件も、ラジュメデスが縄張り拡大のために彼らの山にやってきたんでしょう」

「あいつはおいらたちに、たくさんのおいしい花の蜜を毎日捧げれば、山にいていいって言ったんだ。それができなければ山から出て行けって」

のっぺらぼうが悔しげに言う。目も鼻も口もない彼だが、しゃべる時だけ顔の中央辺りに黒い穴が開く。あれが口なのだろう。

「今までなんとかあいつの言うとおりにしてきたけど、おいらたちだって食べ物を集めるのは大変なんだ。」

あいつはおいらたちの何倍も食べるし、味や量に満足しないとすぐ乱暴する。もう限界だよ……」

「すでに何匹かの仲間があいつに食われてしまうたんですわ。自分らは平穩に過ごしたいんどす、あいつをこらしめてやってくんさい！」

一つ目の玉コロが悲痛に叫ぶと、同調するように白黒反転パンダが「だうだーう」と鳴く。恩が胸をときめかせるその向かいで、此武はこくと頷いた。

「その依頼、引き受けましょう。チサキ、あれを恩君に」

「はい」

「恩君、君にはこれをお貸しします」

チサキが持ってきた黒いカバンから、此武が出したのは『祓』と書かれた数枚のお札と棍だった。

「これは…」

「退魔の札と棍です。たぶん話し合いだけではすまないと思うので、戦闘になった場合はそれを使って下さい。棍の使い方は…君なら分かりますよね？」

「！」

なんだか見透かされているような気がする。恩は手にした棍を見つめ、複雑な表情を浮かべた。

一行は時空廻廊を渡り、塩根山に来た。恠妖たちの住処になっているという山奥のほら穴に向かうと、小さな恠妖たちがわらわらと出てきた。

「きゃー、このヒトたちがなんでも屋ねー」

「救世主、救世主！」

「どうかおたすけー！」

「さっきもあいつが来たんだっ。あと一時間以内に食べ物持ってかないと、また誰かが食べられちゃうよお」

様々な形の恠妖たちが恩たちに群がる。五十匹はいそうだ。小さな恠妖たちに恩は心を和ませた。

「みんな、ちっちゃくてかわいいなあ」

しゃがむと、近くにいた青い卵のような形をした恠妖に手を伸ばす。殻の間から三つの眼だけが見えているその恠妖は、一瞬びくりとして殻を閉じる。

周りの恠妖も人間である恩には多少なりとも警戒心を見せていた。が、恩が優しく撫でると、卵の恠妖はそろりと殻の間から目を覗かせた。

「わー、すべすべ。気持ちいいなあ」

「…ボクの体、気持ちいい？」

「うん。いいよね、このなめらかさ」

目を瞬かせた卵の恠妖はうれしくなって恩にすり寄った。他の恠妖たちも警戒心を解き、ぐわっと恩に飛びついた。

「僕らも僕らもー？」

「俺たちと遊んでくれよう！」

「わああっ、何々ー!？」

大量の恠妖たちにまとわりつかれ、恩は地面に尻もちをついた。その様子を見て此武はくすつと笑った。

「どうやら彼らに気に入られたようですな、恩君。しかし——まだ安心はできませんよ」

此武が呟くと、辺りの空気がざわめいた。風が唸り、動物たちが異変を感じて逃げていく。恠妖たちも身を寄せ合って震え上がった。

「あいつだ……あいつが来た！」

「ま、まだ食べ物の用意できてないわよ！」

「ギャワギャワッ」

「わーん、食われたくないー！」

しがみついてくる恠妖たちをかばうようにして、恩は周囲に視線を巡らし——木々の間からのそりと黒い影が出てきた。

ライオンのごとき体躯、だが頭部は馬のそれで、大きさは子供の象ほどもある。ラジュメデスは恩たち三人を睥睨する。

「オレの縄張りに勝手に入ってきたのは貴様らか……」

「ええ、君をなんとかしてほしいとの依頼を受けたもので。彼らは君の行為に迷惑しています。君にはこの山から出ていってもらいたいですよ。」

ただし、彼らに迷惑をかけず共存していくというのなら話は別です」

此武が言うと、ラジュメデスはぎろりと恠妖たちを睨みつけた。

恠妖たちはさっと恩の後ろに隠れる。

「雑魚恠妖どもが……このオレが優しくしていればつけあがりやがって。」

この山から出ていけだど？　ここはもはやオレの縄張りだ。誰がそんなことをするか！　そんなに痛い目を見たいなら思い知らせてやる！」

ラジュメデスが一步踏み出すと、妖気が広がる。恩は妖気の圧力に耐えながら立ち上がった。

「君たち、どこかに隠れてて。あれじゃあ、もう話しても無駄みたいだから」

「ど、どうするんだよ、人間じゃあいつに敵わないぞ」

「そうよ、殺されちゃうわ！」

心配して止めようとする恠妖たちに笑顔を見せて頭を撫でると、恩はキツ、とラジュメデスを凝視する。此武がやれやれと首を振り、肩をすくめた。

「やっぱりこうなりますか。仕方ありませんね。行きなさい、チサキ」

此武の言葉と同時に、チサキが人間とは思えないスピードで駆け出す。チサキは瞬く間にラジュメデスの手前まで迫ると、強烈なエルボーを首に叩き込んだ。

「があっ」

「うわっ、チサキさん、すごっ。もしや実は格闘技できる人！？」

よろめいたラジュメデスに、チサキは続いて横腹に回し蹴りを食らわせる。ラジュメデスの巨体が倒れた。

「…俺、いる意味あるのかな、これ…」

人手は多い方がいいと此武は言ったが、チサキだけでも十分な気がする。元々、自分は戦うのは好きじゃない。戦うための力なんてもう、手放してしまった。

小さく呻きながらラジュメデスは身を起こそうとする。しかし、かなりのダメージがあつたようで首を起こすのが精いっぱいだ。

「くそ…よくも…っ」

「マスターの命により、あなたを排除します」

平坦なチサキの声。ラジュメデスはちらりと視線をずらし、此武

を見る。奴は得体が知れない。幼い容姿をしているが隙がないし、やけにプレッシャーを感じる。

そしてもう一人、恩を見たラジュメデスは恩に狙いを定めた。あれならば倒せるかもしれない。今なら隙だらけだ。

首を起こしたラジュメデスは口からいくつもの光の棘を発射する。チサキの横をすり抜け、棘は恩に向かう。

「恩君！！」

「え？」

此武の声で恩は迫る棘に気づいたが、もう逃げられる距離ではない。恠妖たちが悲鳴を上げた。

バキィイーンッ

硬い音が辺りに響く。恩の前には土の壁で棘を防御し、背を向けた此武が立っていた。

「まったく、恠妖相手に油断し過ぎだ、能天気め」

発せられた声と言葉に恩は目を点にする。今のはどう考えても此武からだった。さっきまでの雰囲気と全然違う。冷たく見下げた低い声。

振り向いた此武に、恩はさらに絶句した。

「貴様の脳みそはとろけているのか。そんなクソチビどもと戯れている暇があるなら、そのとろけた脳みそを働かせろ。オレ様の手を煩わせるな、下等生物」

貴様？ オレ様？ 下等生物？ まるっきり人が変わってしまった。この此武に、恩はぽかんとした。

此武は土の壁を地面に戻し、ラジュメデスに歩み寄る。

「姑息な真似をしてくれる。悪あがきなどせずとっと消えればいいものを」

嘲笑を浮かべる此武。ラジュメデスは此武の発する異様な空気に怯んだ。なんなんだ、このガキは。体がすくんで動けない。

「これ以上時間をかけたくない。早急にカタをつけるとしよう」
そう言った此武の体が光に包まれる。眩しさに恠妖たちは目を

むり、恩は目の上に腕をかざした。光が収まっていくと、恩は此武の姿を見て目を瞠った。

身の丈は二メートル以上あろうか。ざんばらな肩までの黒い髪。上半身は裸で、裾が膨らんだひざ丈のズボン（？）に、民族衣装のサリーのような薄い布をまとっている。

明らかに此武とは別人だが、あの光の中に立っていたのだから、本人なのだろう。此武はにたりと嗤った。

「我が名は戦神・アスラオが一柱――クロム」

今までの子供のような高い声ではなく、大人の男性の低い声。そのため迫力も増している。「真の姿になったからには容赦しないぞ、屑虫」

ラジュメデスが出てきた時よりも震えている恠妖たちを、恩は心配そうに見やった。

「みんな…大丈夫？」

「…あのヒト…神族だ」

「ソレモ、十七属ノ…」

「あの神気…間違いないわ」

「みんな？」

訝しげに恩が首を傾げると、後方で轟音が響いた。

恩が此武の方を振り返ると、地面から出た土でできた鋭い槍のようなものが、ラジュメデスの体を貫いていた。

「!!」

「“破壊の帝王”…」

「…“異端の狂神”」

震える声で、恠妖たちがクロムの異名を呟く。ラジュメデスは体を貫かれても息絶えることなく、クロムを倒そうと口から光の棘を放つ。

だが、クロムはあっさりとそれを手ではたき落とし、うち一本をつかんで地面を蹴り、ラジュメデスの口に棘を突き刺した。

「ぎゃあああうっ」

「！」

恩は惨さに顔を背けた。

「氷と土を操る最凶の戦神…凍土のクロム」

「…最凶の、戦神？」

確かに、彼からは凄まじい闘気と殺気がひしひしと伝わってくる。

クロムはグリグリと刺をラジュメデスの口にねじり込み、哄笑する。

「ふはははは！！ これで棘は打ち出せまい！！ しかしさすがは頑丈なラジュメデス。しぶといな」

「がふっ…く、そ…っ」

「まだ死なんか。くくく、真の姿に戻るのは久々だからな、まだまだ遊ばせてもらうぞ！！」

クロムの頭上に、いくつもの薄い氷の刃が出現する。クロムが手を掲げ、振り下ろすと、氷の刃が一斉にラジュメデスの背に降り注いだ。

「……ッ！！」

血が噴き出し、地面や氷の刃が赤く染まる。飛び散った血をすくい取り、クロムは狂気に満ちた目で笑った。

「くくく…この血は不味いな」

ぞくつと恩の全身に悪寒が走る。神族の中でも十七属の神は他の神より神気が強く、神格が高い。

戦神は戦闘を司る神で、戦闘に長けているという。それゆえの強さ、狂気なのだろうか。それにしただって、あれはやり過ぎなのではないか。

ラジュメデスは虫の息だ。いくらこの恠妖たちを冷遇していたとはいえ、あれでは本当に死んでしまう。恩は震える腕を押さえ、駆け出した。

「もうやめろ！ それ以上やったら死んじゃうじゃないか！」

「それがどうした。邪魔なものは消す。それが一番いい方法だろうが」

鋭いバイオレットの瞳に睨まれ、恩は怯みかけたが反論する。

「そんなことない！ 確かにそいつは悪いことしたよ！ でも、何も命を奪うことないだろ！？ この山から追い出せばそれでいいじゃないか！！」

「甘いな、下等生物。それだけでは排除したことにならない」

頑として考えを変えようとしないうクロムに、恩はイラッとしてきた。

「あのなあっ、排除とかそういうことするほどじゃないだろうって言うてんの！！」

この子たちは今までどおりの生活がしたいってだけなんだからさ！
！ そいつがこの山から出て行きさえすれば問題は解決なんだって！
！

「だから消すんだろうが。殺してしまえばすべて終わる」

「あーもう、分らず屋だな！！ そもそも、依頼はラジュメデスを懲らしめてくれてことだろ！！？」

もう十分依頼は果たしたんだから、依頼以上のことをするのは規則違反！！ そっちの方が罪になるぞ！！？」

怒り任せに怒鳴る恩。クロムはぴくりと眉を動かし、ややあつて小さく舌打ちする。

「ふん：やかましい小蠅だ。羽音がうるさくて敵わんからな、今回はこの程度で終いにしてやる」

クロムはラジュメデスの口に刺した棘を引き抜き、地面に降りた。ラジュメデスの体が痙攣する。かろうじて生きている状態のラジュメデスに、クロムは冷淡に言葉を投げかける。

「屑虫、傷が癒えたら即刻この山から立ち去れ。そのままくたばっても、オレ様は一向に構わんが、あの雑魚どもが迷惑だろうからな、くたばるなら山を出てからにしろ」

それだけ言うと、クロムは仮の姿である此武の姿に戻る。それまで、彼の邪魔にならないところで待機していたチサキが、此武に歩み寄った。

此武は恠妖たちに近づき、腕組みをして見下ろす。恠妖たちは身

を寄せ合って震えた。

「依頼は果たした。あとの始末は貴様らでしろ」

「ア：アリガトウ、ゴザイマシタ」

冷めた表情で此武は恩を振り返る。

「帰るぞ、恩」

「……」

少々納得いかない顔で、恩は此武についていく。恠妖たちがこっそり「また遊びに来てくれるか？」と聞くと、恩は小さい声で「うん、またね」と微笑んだ。

高科FWに戻ってきた恩は、此武にジト目で訴える。

「俺のこと騙してたんだな」

「ふん、客相手には愛想をよくした方が都合がいいだろう」

最初とは打って変わって高飛車な態度の此武に、恩はむくれた。まさか本性がこんなだったなんて。すっかり素で話しているし、ならこっちも遠慮することないだろう。

人の好い少年の正体は神族で戦神。詐欺だ。

「あ、そういえばさっき、アスラオって言ってたけど、お前の名前クロムだよな？ 『此武』は仮名だろうけど：アスラオとクロム、どっちが本当の名前なわけ？」

問いかけると、此武は思い切り顔をしかめ、何言ってるんだこいつという目で恩を見る。

「貴様の耳には綿でも詰まっているのか。オレ様の名はクロムだと言ってやっただろうが」

「だって、アスラオって戦神の一根の名前だろ？ 他はクアトリとゼーヴァだったよな」

此武はあからさまに鼻で笑った。

「はっ。愚かな人間め。アスラオは一根の名前ではない。一族名だ」「一族名？」

ソファ―に座り、此武はチサキに茶を出すよう命じた。

「この惑星の人間は無知な者ばかりだな。貴様らが呼んでいる神々の名前は、一部を除いては一族そのものの名を表す」

「え！？ そうなのか！？」

「もつとも、神話学を研究している者は知っていることだろうがな。古い文献にはきちんと記されているが、多くの人間に知られていないのは文献が公表されないからだ」

「…なんで公表されないんだろう」

「さてな。人間どもの浅い考えなどオレ様が知るか」

しれっと言い放ち、此武はチサキの持ってきた茶を飲む。

「そんなことはどうでもいいとしてだ。貴様がこの空間に入ることができたのは偶然ではない。」

この空間に入ることができる人間は選ばれし者のみ。貴様にはそれだけの力があるということだ。故に、貴様はこれからここで働け」
「……………はあ！？」

思い切り顔をしかめる恩。働く！？ こんな奴の下で！？

「何勝手なこと…」

「命令だ。逆らうことは許さん。貴様にはすべきことがある。それを為すにはここで働くのが都合がいい」

「俺のすべきことって？」

「時が来れば話してやる。不本意だが、そうすることがオレ様と与えられた役目だからな。――それに」

「わっ」

唐突に腕を引っ張られ、恩は体勢を崩した。此武は恩の頭をわしつとつかみ、顔を近づけた。

「貴様が気に入った。このオレ様にあれだけの大口を叩いた者など他にいないからな。」

穂積 恩。今日から貴様はオレ様の玩具だ」

間近にある此武の顔が愉しそうに歪む。展開についていけず、放心状態の恩。

こうして恩は高科FWの社員にさせられた。恩が自身の宿命を知るのもう少し先のこと。

番外編 今日から貴様はオレ様の玩具だ（後書き）

追伸列記簿

どうもー！ 最近寝不足気味の甲斐日向ですこんにちは！ 今回は番外編、恩と此武の出会いです。

本当は第一話になる予定だったんですが…そうするとヒロインであるカーレンとの出逢いが二話以降になり、余計マジラビと似たような流れになるし、クラスメートが亜櫛と玲汰しか出なかったもので。

紅国街は横浜中華街をイメージしてます。つまり曉篠は中国がモデルです！ エデンシリーズで紅国がつくものはたいてい中国関連だと思って下さい。紅国語とか紅国料理とか。

それにしても、なんかこの話、やたらと恩がパンダに萌え萌えしてるシーンが多いな…

さすがに初対面なので、此武は恩に対して営業スマイル全開ですね。ほんと最初だけですけど。

クロムの残酷さも全開です。たまにしか登場しないですが、クロムを出すのは楽しいです。このヒトが戦闘に参加したら最強ですよ。ね。

さて、近況ですが、最近はちょっと仕事が少なくなってきました。なので残業も前よりは減りました。

だから今のうちに小説のストック作ったり、絵描いたりしようと思っただんですが…なぜだか急に落乱にハマりましてね、マンガも全巻揃えて、脳内にひしめいているのでなかなか我が子たちに手をつけられない状態です（笑）

このあとがき書いてる間も落乱の主題歌を流しまくってました。初期のやつばかりですが。もう少し早くハマっていればアニメをリアルタイムで見れたのになあ、と悔しい思いをしてたりします。

十一月ももうすぐ終わりに近づき、朝晩が冷え込むようになりました。ミカンもおいしくなってきたので、ミカンでも食べながら執筆頑張ります。

それでは次回の追伸列記簿でお会いしましょう！

二〇二〇年十一月二十七日（土）

第4話 最後の爽涼祭

十一月に入り、気温がぐっと下がってきた。そしてこの時期には藍あゐ泉国四大祭りの一つが行われる。

四節祭しせつさいと呼び、春の盛りを祝う芳桜祭ほうおうさい。夏の盛りを祝う陽香祭ようかさい。秋の豊作を願う爽涼祭そうりょうさい。越冬の無事を願う白霜祭はくそうさいがある。

それぞれ三日間行われ、特定の料理を食べたり、露店やパレード、祭り限定の催し、特別セールが始まる。。もちろん恩めぐみが住む、ここ狩城市かれぎでも日々準備が行われていた。

この期間中は学校が半日で終わるため、学生たちは浮足立っていた。恩も例にもれず、亜櫓アズサたちと爽涼祭の話題で盛り上がっていた。「いよいよ明日からだよな、爽涼祭！」

待ちきれないと言った顔で恩が言くと、玲汰れいたが賛同する。

「楽しみなんだな♪」

「今年も露店出すんでしょ？ 畔上あんだのとしの店」

幸緒ゆきおが亜櫓の肩に寄り掛かりながら問う。亜櫓は得意げに腕組みをして頷いた。

「もちろん。父さんが張り切ってるからな。新作も出すってさ」

「畔上君バンジョウの店のパン、おいしいよね。新作ってどんなの？」

亜櫓の家は隣町にあるパン屋だ。おいしいと評判で、恩たちもたまに買いに行く。

窓に背を預けて立っている要かなめが訊くと、亜櫓はちちちと指を振った。

「それ言っちゃあおもしろくないだろ？ 見てのお楽しみ！」

「まひろ買いに行くから、ちよっとおまけして☆」

「うーん、それは父さんたち次第かなあ」

要と腕を組んでいるまひろがウインクすると、亜櫓は楽しげに笑った。その傍らで、恩は窓の外に視線を移して思案する。

（天気もよさそうだし、今年はどこから回ろう。地元でもいいけど、

他の町に行ってもいいよなあ)

四節祭は藍泉国各地で行われるので、地元以外の街や州に出向く人もいる。ご当地料理や物産を安く手に入れるよい機会だし、期間中のみの特別サービスなどもある。

ただ、四節祭の時期は国内の観光客だけでなく、外国からの観光客も増えるので、あまり遠出をすると混雑などに巻き込まれる恐れがあるのだが。

(去年の白霜祭の時、北の金清州ごんしょうに行った時は日帰りのつもりが、吹雪でなかなか帰れなかったもんなあ)

「あ、そうだ。あたし、割引チケットもらったんだけど、みんないる?」

幸緒が自分の席に戻って、カバンから三枚のチケットを出して戻ってくる。

「ペア割引券だってさ。家族でも恋人でもOK。ただし、狩城市内のみ有効」

「へえ、もらってもいいのか?」

チケットを受け取る亜櫓に幸緒は苦笑する。

「いいのいいの。お母さんもお兄ちゃんももらったらしいから、これ以上あっても意味ないし」

「オイラは一枚持つてるからいいんだな」

「まひろはもうー♪ 恩ちゃんは?」

「んー、せっかくだしもらっとこうかな」

机に頬杖をつき、恩はチケットを見つめた。

(ペア割引：ってことは二人、だよな。：カーレンを誘ってみようかな)

カーレンは四節祭なんて初めてだろう。人間界に興味があるようだからきつとよろこんでくれるはず。カーレンのうれしそうな顔を想像し、恩は頬を緩めた。

幸い、今日はバイトが休みだ。此武コノムから、今日は特に依頼がないから来なくていい、と朝方にメールが来ていた。

家に帰ったら、カーレンに爽涼祭に一緒に行こうと言ってみよう。しかし、恩はとても大事なことを失念していたのだった。

帰宅した恩はさっそくカーレンに爽涼祭のことを話した。「それは楽しそうですね」と期待通り、カーレンはよろこんでくれた。

「じゃ、じゃあさ。明日：一緒に露店、見に行かない？」

「はい。ぜひ行きたいです」

微笑むカーレンに胸をときめかせ、恩は内心ガッツポーズを取るが。

「あら、でも：そのお祭りというものには、たくさんの人が集まるんですよね？」

「うん。場所によってはすごい人混みに：」

「でしたら、ちょっと困ることになりますね」

「え？」

カーレンは頬に手を当てて小首を傾げた。

「もしも男性の方に触れてしまったら、翼^{はね}が出てしまいますもの」

「！！！！」

そうだったーっ！　かくん、と恩のあごが落ちる。恩が失念していたこと、それはカーレンの体質だ。

フィリンは異性に触れると翼^{はね}が現れる。大勢の人間の前でそうなたら確実に騒ぎになる。

舞い上がっていた恩は一瞬で夢から現実に取り戻された。

「：ああ：そうだね、そうだったよね。忘れてたよ。一緒に祭りには行けないんだね」

「すみません、恩さん」

謝罪するカーレンに恩は慌てて横に首を振る。

「謝ることないよ！　カーレンは悪くないんだから。忘れてた俺が悪いんだ。一緒に行けないのは残念だけど、しかたないよね」

明らかに落胆する恩に、学校から帰ってきた織^{はとり}が駆け寄ってきた。

「めぐ兄ーっ、明日の爽涼祭一緒に行こー！」

蘇芳色すおうの尻尾を振りながらきゅうつと恩に抱きつく織。恩は肩を落としたまま生返事を返した。

「あー、うん。行こっか」

恩のテンションの低さの理由に気づいていながらも、色よい返事が織はうれしかった。抱きしめる腕に少し力を加えると、面の下で満面の笑みを浮かべた。

「やったあ！ めぐ兄と一緒に爽涼祭行けるの、今年で最後だもんね！」

言われてから恩はその事実を思い出した。

（あ…そっか。織とはあと少しでお別れなんだ）

天狗族は十歳になると、独り立ちのために親元を離れて暮らさなくてはいけない。織はもうすぐ誕生日を迎える。

そうしたら織はこの家を出て、一人暮らしをする。独り立ちをした天狗はよほどのこと以外では家族と会ってはいけない。

恩は滋生家しきようの居候で、織や織枝おりえとは血の繋がりは無いが家族も同然だ。あと二週間もすれば織とは会えなくなる。

（家族として過ごせるのは、あと少しだけなんだ…）

家族と別れるのはさびしいものだ。自分だって、いざその時が来たら寂しく、つらかった。自分で決めたこととはいえ。

織はなんでもないように振舞っているが、内心はやはり寂しいのだろう。今までは自分から一緒に行こうなどと誘ってきたことはない。

ここは家族として、兄として、妹の気持ちに応えてやらねば。恩は織の頭を軽く撫でた。

「そうだったね。じゃあ明日は思いっきり楽しまないと。遠慮しないでいいからね」

うれしそうに大きく頷く織と、柔和に微笑む恩を、カーレンは微笑ましく見つめた。

少し雲は厚いが、雨の心配はなさそうだ。翌日、午前の授業を終えて帰宅した恩は、私服に着替えて織と一緒に出かけた。

昨日、幸緒からもらったチケットは狩城市内の店しか使えないそうなので、恩はちよつとだけ遠出をして、二駅先の街の露店を楽しむことにした。

露店が出るのは最も人通りが多くなる駅周辺だ。特に本通りはパレードが通るので、期間中は歩行者天国になる。

初日は午前中に運営委員のみで行われる開催パレードがあり、夕方に一般参加の仮装パレード、夜に花火の打ち上げ。ただし、夕方の仮装パレードだけは三日間行われる。

本通り周辺にもちらほらと露店は出ているが、本通り内は人でごった返している。

露店は縁日で見かけるような簡素なものから、専用トラックやバスを屋台代わりに使ったもの、カフェテラスのようなものまで様々なものがある。

これだけ人がいたら、絶対にカーレンは来られないだろうな。人混みを見ながら、恩は家で織枝と待っているだろうカーレンを想った。

二人で露店を回れたらどんなに楽しかっただろう。けれど。

「めぐ兄ーっ、あれ、あれ食べよう！」

はしゃぐ織と二人で回るのだって楽しいはずだ。妹との最後のお祭りなのだから。恩は笑顔を返した。

「うん、好きな物食べていいよ。今日は俺のおごりだから」

「ホント！？ わーい！」

ああしてはしゃいでいるのを見ると、やっぱりまだまだ子供だと思ふ。習わしとはいえ、十歳で親元を離れるなんて少々、酷ではないだろうか。

織は天狗族といっても人間との混血。どちらかと言えば天狗の血が勝っているため、天狗の外見的特徴である犬耳や尻尾、鳥の翼は

あるものの、純血の天狗とは成長の仕方寿命も違う。

天狗の掟である面もつけているし、親元を離れることも承諾していたが：

（全部が全部、天狗に合わせることはないんじゃないかな。織は半分、人間なんだし）

人間社会の中で生きていくのだし、人間に合わせてもいいのではないだろうか。人外としてではなく、普通の人間として。

恩は表情を曇らせ、ふと、横にあるショーウィンドウを見た。透明なガラスには、行き交う人々と自分の姿が映っている。

行き交う人々はほとんどが黒髪、灰色の眼。時々、茶髪や茶眼、緑眼の人もいるが、藍泉人は生まれつき黒髪灰眼か茶髪緑眼が通常だ。

そんな中で恩は——恩だけは、深紅の髪に緋色の目。普通の藍泉人ならば持てない色だ。

絳髪緋眼は、世界でも数少ないある一族だけが持つ特徴。藍泉にこうはつひがんは一握りしかない、不老長寿の一族・白鳳——ハクオウ

恩は白鳳の人間なのだ。それも、この国にいる白鳳ではなく、他国の。本人はそれを隠しているが、外見の特徴は隠せなかった。

白鳳だと知られたくないなら、髪を染めるでも、目にカラーコンタクトを入れるでもすればよかった。

けれどそれは、一族を、自分の存在を、否定することだったから。出生を、名を偽ることはできても、自分に脈々と流れる血の意義を抹消することはできなかった。完全に、自分は白鳳と無関係だと割り切ることはできなかったのだ。

——否定し、逃げ出すことはしても。

そっと自分の髪の毛に触れ、一本だけ引き抜いてみる。染めていない生まれつきの色。恩のそれは純血の白鳳と違い、少し茶色がかっている。

それでも、紅いことに変わりはない。まるで血のような——

「めーぐ兄っつ、お金お金ー！」

織の呼び声に恩は我に返った。ぶんぶんと手を振っている織のもとに慌てて走っていく。「ごめんごめん」と織に謝り、露店の若い店員に代金を渡した。

「もう、どうしたの？　ぼーとしちゃって」

「あはは、ちよつと眩暈めまいがしてね。もう大丈夫だから」

「ホントに？」

織の蘇芳色の耳と尻尾が少しだけ垂れた。面で表情は見えないが、心配した顔をしているのだろう。

この耳と尻尾のおかげで、表情は見えなくとも感情は判る。恩は苦笑して、ポンポン、と織の頭を軽く叩いた。

「うん、ほんと。ごめんな、心配かけて」

「あたいが無理言って連れ出したんだし、具合が悪いならすぐ帰っても…」

「大丈夫だってば。それに遠慮しなくていいって言っただろ？」

織と二人で出掛けるのは嫌じゃないんだから、無理言ったとかそういうふうには考えなくていいの。たっぷりお兄ちゃんに甘えなさい！」

笑顔で胸を張る恩に、織はほっと笑みを零す。頷いて、恩の左手を握った。

「…あのね、めぐ兄。あたい…めぐ兄のこと好きだよ」

恩は歩きながら目を瞬かせた。

「めぐ兄の、髪や眼の色も」

目を瞠る恩。無意識に歩調が遅くなった。気づいた織は自分も歩調を緩める。

いつでも、織は恩の些細な変化に気づく。恩が意識しているものでも、無意識のものでも。

さつき、恩がぼーとしていたのも、自分と周りの人間の違いを――髪や眼の色を気にしているからだとすぐ分かった。

あえて理由を訊いたが、本当は気づいていた。それは自分の直感が鋭いからなのか、それとも、同じだからなのか。

「綺麗な紅い色。あたいの知ってる“紅い髪と眼”とは少し違うけど…それは、あたいと同じだからでしょ？」

「…！」

同じなのだ。自分も、彼女と。自分も——混血。彼女とは意味が少し違うけれど。

白鳳と藍泉の混血。髪は多少藍泉の血の影響か、純血の白鳳ほど紅くはなかったけれど、眼は純血の白鳳と変わらぬ緋色。

普段はさほど気にしていない。でもたまに、ひどくそれが気になる時がある。こうして藍泉人に囲まれている時だ。

ほんの一握りではあるけれど、藍泉にも白鳳一族はいる。白鳳かと問われると、いつも藍泉の白鳳だと偽っていた。

他国の、あの国の白鳳だと知られたくない。あの国の白鳳と言ったら一つしかないから。

それを知られたくなくて、藍泉人だと偽った。自分は白鳳ではあるけれど、藍泉の白鳳だと。

本物の藍泉人に囲まれると、ひどく不安になる。怖くなる。

自分はこの人たちとは違う。どう言い繕っても、自分はこの国の、あの一族の人間。自分は“半分”しか——

「“半分”だから、少し違うけど…でも、やさしい色だよ。だからね、気に病んだりしないで。周りとは違って、”半分”でも、めぐ兄はめぐ兄だから」

織の言葉が、恩の胸に広がっていく。“半分”でもいいのだと、“半分”でも、仲間外れではないのだと、彼女は言ってくれている。「だからさ、めぐ兄。あたいは家を出るの苦痛じゃないよ。掟に従うのは嫌なことじゃない。だってそれに従っていいってことは、あたいは天狗として、仲間に認められてることだから」

混血はたいてい忌み嫌われる。特に人外と人間の混血は、種族の違いから拒絶される。だから天狗の掟に従うことを許されるなら、それは仲間だからでしょう？

恩は情けない気持ちになった。恥ずかしいことだ。

見抜かれていた。天狗の掟に縛られている織をかわいそうに思っていることを。

兄貴風を吹かせて、甘えていいよなんて言ったのに、慰められてしまった。これではどっちが年上だか分かりゃあしない。

「ありがとね、めぐ兄。あたいのこと心配してくれて」

さっき自分が言ったのと似たことを言われる。自分と違うのは、『ごめん』じゃなく『ありがとう』ということ。

なぜだか泣きたくなって、恩は顔をゆがませた。顔を逸らし、「うん」とだけ返した。

まだまだ子供だと思っていたけど、充分大人だ。苦しいことから目を背けて、逃げ出した自分なんかよりも、ずっと。

第4話 最後の爽涼祭（後書き）

エデンクロスに第4話の番外編があります。作品一覧もしくはエデンシリーズから飛んで下さい。

第5話 妖しい生徒会長

男は吹きつけてくる風にその気配を感じ取り、腕組みをして曇天を見上げた。

「父上、風が強くなってきました。体に障ります、中に入って下さい」

さほど真剣みのない青年の声が背中に投げかけられる。男は微笑して振り返る。

「おやおや、もう年寄り扱いかい？ 私はまだ、お前に心配されるほど年はとっていないよ？」

「年齢のことなんて危惧していませんよ。私が気がかりなのはこの“風”です」

「ああ、そうだな」

この“風”にはよくないものが紛れ込んでいる。悪しき“気”を感じるのだ。息子が指しているのもそのことだろう。

「けれど、これしきの邪気なら私にはたいしたことないよ。まあ、あまり気分の良いものではないことも確かだしね」

組んでいた腕を解いて、男は屋内に戻るため身を翻した。そろそろ時が来たようだ。私もぼちぼち動くかしょうか。

——嵐がやってくる。宿命を乱す者とともに。

* * *

ばしばしと強風が窓を叩く。雨は降っていないのが不幸中の幸い

だが、この分だと強風は朝方まで続きそうだ。

とつぷりと日も暮れた今、外に出る用事は何もないが、バイト先から帰る時は苦勞した。

夕方から風が強くなり始め、バイトを終えて帰る頃には嵐になっていた。

「すごい風：明日は大変そうだなあ」

部屋でくつろいでいた恩は、ガタガタと軋む窓を一瞥し、一人ごちた。ちょうどその時、空が光る。雷のようだ。少し遅れてゴロゴロと音が鳴る。

「うあ、雷まで鳴り始めた。雨は降ってないけど…」

カーテンを閉めようと窓に歩み寄る。空がいつそうまばゆく光った。途端に轟音が鳴り響く。結構近い。

「…どこかに落ちたのかな？」

外を見やるがよく分からない。窓に手をついて黒雲に覆われた空を見上げた恩はわずかに眉を曇らせた。

(雷：か)

雷は嫌いではない。むしろ好きだ。けれど、恐ろしいものだということも知っている。空を駆ける電光はまるで龍のようで。

小さい頃は、雷が鳴るたび、稲光を見るたびにはしゃいだものだ。怖くなどなかった。あれはとても自分に近いものだから。

昔、実家の縁側に座って空を見ながらよく雷電を見ていた。その傍らには、いつも寄り添ってくれる存在があつて。

きれいだね、と疾る稲妻を指差して笑顔を向ければ、その存在は無言で微笑みを落としてくれた。

最も自分に近い、大切な――

突如、轟音とともに視界が暗くなった。どうやら停電したらしい。「わっ、やっぱどこかに落ちたんだ」

しばらくすれば復旧するだろう。でも、この停電で織枝さんたちが不安になっているかもしれない。この家に男は自分一人。しっかりしなくては。

雷で思い出した過去に少し気持ちを引きずられながらも、恩は過去を振り払うようにかぶりを振り、カーテンを閉めた。

学校に行くと、昨夜の雷や停電の話で持ちきりだった。停電は三十分ほど続いたので困った人も多いのだろう。あの後、恩が織枝のところに行くところ、案の定おろおろしていたし。

一限目は体育だ。更衣室で着替え、外のグラウンドに向かう。

「雷鳴ってる時にヘソ出していると、鳴神にヘソ取られるんだぜ」

「畔上君、それは古い迷信だよ」

「鳴神様はそんなことしないんだな」

「むむ、みんなして否定するとは…そりゃあ近所のじいちゃんから聞いた話だけどさ。でも、穂積だったらヘソ出して寝てそうだよな」。ちっちゃい子供みたいに」

「ちっちゃい言うなー！」

手を振り上げて怒鳴った恩は、廊下の曲がり角から人が歩いてきていたことに気づかず、ぶつかってしまった。

「わわっ」

「おっと」

「ごめんなさ…うげ！」

よろめいた恩は相手の顔を見て顔を引きつらせた。一方、恩の腕をつかんで支えた男子生徒は、恩を見て顔を綻ばせた。

「大丈夫ですか？ …と、恩くんじゃないですか」

「い、稜雲会長！」

さらりとしたパールブラウンのセミショートと髪と眼。すらりとしていて恩より頭二つ分も高い。ノンフレームの眼鏡を掛けていて、知性的な雰囲気を出している。

彼は榊原稜雲。この慶星高校の生徒会長だ。そして……

「朝からいとしい君に会えるなんて幸先いいですね！」

「ぎゃあああっ、抱きつくなあああっ！」

恩にホの字だったりする。バタバタと暴れる恩を後ろからがっちり抱きしめ、稜雲は恩の頬を撫でる。

「皆さん、これから外で体育の授業ですか？」

「え、は、はい」

問われて、亜^{アズサ}櫛が遠慮気味に答える。稜雲はにっこりと笑った。

「今朝、ある程度グラウンドの整理はしましたが、まだ少し風が強いですからね。怪我をしないよう気をつけて下さい」

「は、はい」

「恩くんの体に傷でもついたら大変ですからね」

（そっちか——っ！！）

気をつけろ、というのは亜櫛たち自身に対してではなく、恩に対してらしい。恩が怪我をしないように気をつけろということか。亜櫛たちはげんなりとした。

「会長！ 分かっているんなら早く放せよ！ 授業に遅刻しちゃうだろ！？」

「おや、それは大変。でも、遅刻したら私が先生に取りなしてあげますよ。それとも、このまま二人でサボっちゃいます？」

「生徒会長がそんなこと言ってどうするんだ！！」

グイッと稜雲の顔を押しつけ、恩はなんとか稜雲の拘束から逃れた。

「この不真面目生徒会長ー！」

それだけ言い残し、恩は亜櫛たちの背中を押して昇降口へと走っていった。

「ふふふ、照れている顔も愛らしい」

廊下は走っちゃいけませんよ、とくすくす笑いながら、稜雲はその場を後にした。

「相変わらず榊^{さかきばる}原会長は恩くんに懐いているね」

準備運動をしながら言った要^{かなめ}に、恩は目を半眼にした。あの彼が

啓也^{けいや}に並ぶスキンスリップの激しい奴だ。

いちいち抱きつかなければ話せないのか、と思うくらい、常に抱きついてくる。その上、あちこち触ってくるし。

（セクハラで訴えるぞ！）

本気でそう思ったことが何度あったか。恩が答えない代わりに、玲汰^{れいた}が困ったように笑いながら言葉を返す。

「うーん、でもあれは懷いてるって言うよりは…」

「メロメロだよな！ 実際のところ、どうなんだよ、穂積」

「どうって？」

からかいモードで笑みを浮かべる亜櫛に、恩は怪訝な顔を向ける。
「会長と付き合ってるの？」

ずべしゃああっ

恩は思い切り地面に突っ伏した。何事かと周りの生徒たちが注目してくる。体を起こした恩は叫んだ。

「そんなわけあるか！！　というか、ただの先輩だって知ってるだろ！？　知ってて言ってるよな、バカ亜櫛！？」

「いやあ、もしかしたら心変わりでもしてるんじゃないかと」

「するか！！！！」

くわっと目を剥いて否定する恩。亜櫛も分かっているってそう言っているのだ。要と玲汰はやや呆れ気味にため息をついた。

「俺は迷惑してるんだ！　あいつのせいで俺がどれだけ恥ずかしい思いをさせられていることかあああっ！」

固く拳を握りしめて熱弁しかける恩の背後で、体育教諭が「授業妨害だぞ、お前ら…」と怒りに震えていた。

今思い出しても腹が立つ。あの男と会ったのは入学式の日だ。生徒会長の祝辞で出てきたあの男と目が合った。

硬直したようにきょとんとした顔でずっと見つめてくるから、なんだらうと思った。

《その赤髪の新入生男子君》

壇上のマイクであいつが言うと、一斉に生徒たちが俺を見た。赤い髪の男なんて俺しかいなかったから、すぐに見つかった。

（ただでさえ、この髪と眼の色のおかげで目立ってたのに悪化したじゃないか！俺になんの用だ、あの男！）

なるべく平静を装ったけど、次に出てきたあいつの言葉で頭が真っ白になった。

《気に入りました。私の恋人になりませんか？》

満面の笑みで、あいつはそう言ったんだ。体育館中がざわついた。あいつが教師たちに怒られながら壇上から消えて、式が終わるまで俺の思考は停止したままだった。

……………。……………。！！？

式が終わって思考が回復した途端、混乱と羞恥心と怒りに染まった俺は、生徒会室に直行したんだ。

うれしそうに破顔して出迎えたあいつに、とりあえず俺は平手を食らわせてやった。

『さっきのはなんなんだーっ！！あんたのせいで余計に目立つちやったじゃないか！』

あらかた文句を並べると、あいつは全然堪えてない笑顔で近づいてきた。

『仕方ないでしょう。君と目が合った瞬間にビビッときたんです。つまりは一目惚れですね？』

『ふざけるなー！だいたいっ、俺は男だぞ！』

『私も男ですよ』

『そうだよ！男同士で…こ、恋人なんて…』

『性別なんて関係ありません。好きになってしまったものは仕方がないのですから。私は気にしませんよ』

『俺が気にするの！』
『というか嫌だ！』

『はっきり言いますねえ。そこがまたいいです』

いくら言ってもあいつは食えない笑顔でさらりとかわす。それが

また癪に障った。

『分かりました。ではこうしましょう。お互い初対面で知らないことばかりですから、互いのことを知るためにまずはお友達になりましょう。それとも、友達でも許してもらえませんか？』

諭すように言われて、まだ納得はいかなかったけど、友達くらいならいいかな、とこの時は思ってしまった。

『う……まあ……友達、だったら』

『よかった。これからよろしくお願いしますね』

「そうだよ、あの時から俺の高校生活は晒し者状態になったんだあーっ！！」

ごすうっ

頭を抱えて絶叫した恩の腹に、容赦ない蹴りが入れられた。カーレンが慌てて恩に駆け寄る。

「大丈夫ですか？ 恩さんっ」

床を転がった恩は、今度は腹を押さえて蹴った張本人に涙目で怒鳴った。

「お腹蹴るなよ、此武！^{コノム} 内臓出るかと思った！」

「ふん、むしろ臓腑をすべて抉り出してやりたいぐらいだ。喧しいぞ、虫ケラめ」

侮蔑の目で恩を見下ろす此武。いつにも増してその色が濃い。何やら不機嫌のようだ。

いつもならここでもっと文句を言うが、触らぬ神に祟りなし、の言葉通り、これ以上反抗しない方がいいだろうと判断し、恩はおとなしく引き下がることにする。

「恩さん」

「ものすごく痛いけど大丈夫……」

学校を終えた恩はいつも通りバイトに来ていた。

久し振りに稜雲に会い、稜雲との関係をからかわれたことで、出

会った頃を思い出してしまった。

公衆の面前で同性に、しかも生徒会長から告白されたとあって、誰もが恩に興味を持った。

よからぬ噂を立てられたり、髪と眼のことで白鳳じゃないかと敬遠されたり、いつでも噂と注目の的だった。しかし、稜雲とは友人関係だとはっきりさせてからは、なぜかやたらと人気者になった。

学校に早く馴染めたのはいいが、結局のところ、注目の的であることに変わりはないたりする。

(まったく、稜雲が人目もはばからずベタベタしてくるから。だいたい、男に対して好きだとか…)

声には出さず、心中でぶつぶつと呟きながら、ノートパソコンで依頼のチェックをする。掲示板には三件、書き込みが入っていた。

「あ、依頼来てるよ、此武。えーと、一件目は…差し出し人が『ヒムカ』って人」

ぴくん、と此武の片眉が跳ね上がる。恩が気づかず、内容を読み上げようとした時、瞬時に移動した此武がノートパソコンをひったくる。

「わっ、なんだよ此武」

無言で依頼内容を読んだ此武は眉間に深くしわを刻み込んだ。小さく舌打ちをし、パソコンを操作して電源を落とす。

「今週の日曜日に子守の依頼だ。今日はこれ以外受けん。他の依頼はすべてパスする」

「子守？ 相手は人外…だよな？ 人外でも子守を頼んだりするんだ」

「ただの人外ではないぞ。相手は神狐しんこ——神族だ」
「へ？」

目を点にする恩。神狐は字のごとく、狐の神様のこと。火炎を操る炎神の属であり、東洋ではポピュラーな神様だ。特にこの藍泉国で神狐は特別な存在である。

古くは蒼泉美国あおいずみという名だったこの国を建国した初代王に力を貸

したのが、神狐オミリアだという。今は、元々この地を守護していた水神サヲギラとともに、藍泉の守護神として祀られている。

これまで数々の依頼を受けてきたが、神族からの依頼は初めてだ。それにつけても、神狐というと思は嫌な予感がした。

（神狐って：確か稜雲会長も神狐だったよな）

ぼわん、と稜雲の笑顔が浮かび上がる。外見の年齢はさほど変わらないというのに、あれで数百年生きているのだ。初めて知った時は驚いたものだ。

慶星高校は人外の入学を許可している数少ない学校だ。入学試験の際、人外は身分を証明すれば入学していいことになっている。

慶星高校には、稜雲以外にも何人か人外の生徒や教師がいる。担任であるちろる先生はフェウパというリスに似た恠妖^{あやし}で、実は玲汰も狸の恠妖^{ようり}、妖狸族なのだ。

（でもまさか、同じ神狐だからって会長がいたりするわけないか）

「神狐かあ。狐だから子供多いのかな。じゃあ、依頼承諾の返事するからパソコン貸して」

神様の子供ならそんなに手はかからないだろう、とこの時の恩は軽い気持ちでいた。

そして日曜日、恩は此武^{チサキ}、千咲、カーレンとともに依頼主のもと——北方の天嶮州^{てんけん}を訪れた。

天嶮州には藍泉一の山脈・天嶮山脈があり、依頼主はそこに住んでいるという。

名の通り、天嶮山脈は険しい山が天高くそびえ立ち連なっている。そのうちの一つ、佐原岳の中腹。時空廻廊を渡り、あつという間に辿り着いた。

「うわあゝ、やっぱり北国は寒いなあ！ 山の上だし：カーレンは大丈夫？」

「そうですね、少し肌寒いです」

念のため厚着はして来たが、風が吹くたびに冷気が足元から這い上がってくる。腕をこすりながら恩が問うと、カーレンは笑顔で答えた。

「夜になったらもっと冷えるんだろうなあ。あ、あそこ雪が積もってる」

「雪？ 雪とはあの、人間界で寒い季節になると空から落ちる白いものですよね？」

目をキラキラさせて、カーレンが詰め寄ってくる。恩はわずかに頬を紅潮させた。

「う、うん。場所によっては季節関係なく、気温が一定まで下がると降るけど」

「まあ。一度本物を見てみたいと思っていたんです。天界に雪はありませんか」

「天界は雪降らないんだ。そう言えば、天界ってどんなところ？」
依頼主の住処へ向かう道すがら、恩は前々からなんとなく気になることを尋ねた。カーレンは頬に人差し指を当てて「そうですね…」と小首を傾げる。

「清浄な空気に包まれたあたたかい世界です。昼間は光があふれ、心地よい風が吹きます。夜は光の帯が空を駆け、時にはその光の下で歌や舞を楽しむことがあります」

「へえ、なんだか素敵なのだね。カーレンの他にも、神様とか天使がいるんだよね？」

「はい。わたしの父や兄、姉、それから前天帝のフィリンたちと…お父様がお創りになった天使たちがいます」

「ふうん。ねえ、神様…というか、フィリンだけ。フィリンとか天使っていつも何をしてるの？」

「フィリンは仲のいい方とお茶会をしたり、音楽を奏でたり、服を作る方もいます。花を育てたり、天使たちに指導をしたりもしますね。たまに人間界を覗くこともありますよ。」

天使はこれから産まれてくる人間の魂を運ぶのが役目なので、指

定された日時に人間界と冥界を行き来しています。それ以外はフィリンとほとんど同じだと思いますよ」

話を聞く限り、天界というのは人間界とはだいぶ違うようだ。暮らしている存在からして違うのだから当然と言えば当然かもしれないが。

これまで異界と呼ばれる世界の話は、神話やおとぎ話の中でしか知らなかった。世界中には神や悪魔、恠妖^{あやし}などの様々な人外がいるが、一般の人々が知るそれらが、どこに存在し、どんな生活をしたか、思想を持っているのかなどはあくまでも空想であり、事実ではない。

実際、恩が幼い頃に語り聞かされた神話や古い文献などで得た知識と、カーレンが話してくれた天界や他の異界の話は異なっている。魔法界や冥界といった、知らない異界もあったし。

そういえば、カーレンはなぜ人間界に來たのだろう。何か特別な理由があるのではないかと以前にも思ったのだが、訊く機会がなかった。今なら訊いても問題ないだろうか。

「あ、あのさ、カーレン……」

「見えたぞ。あれが依頼主の住処だ」

淡々とした此武の言葉に、恩はがくつと脱力した。せっかく訊けるチャンスだったのに……。此武の声でそちらに意識を向けたカーレンは笑顔で、ぽん、と手を合わせた。

「まあ、素敵なおうち。あら、恩さん、何か言いました？」

「……いや、なんでもない……」

恩はやるせない気持ちでぱたぱたと手を振るしかなかった。

第6話 神狐の子守はツライよ

気を取り直して恩は進行方向に顔を向ける。おうち、とカーレンは言ったが、家らしきものはない。

ただ、茂った木々の間に見える土の壁に、大きな穴がいくつかぽっかりと開いている。

一番大きな穴の前には、五匹ほどの子狐たちがじゃれて遊んでいた。

どの子も体毛が白色で、毛先だけが黄金色。これは神狐の特徴だ。まぎれもなく神狐の住処なのだ、ここは。

遊んでいた子狐のうちの一匹が彼らに気づいた。「人間だ。人間が来るよ」とわずかに警戒しながら子狐たちは囁き合う。

「すみません、高科F Wの者です。依頼を受けてこちらに伺いました」

此武が客向けの声音とスマイルで言うと、子狐たちは目を瞬かせた。

「「高科」」

「「フリーワーク？」」

揃って小首を傾げる様子がなんとも愛らしい。恩がにへらへらと笑み崩れ、頬を朱く染める。

「あ、そーだ。ママがいったおてつだいさんだ」

「パパとママが出かけてる間お世話してくれるんだって」

「でも人間がいるぜ」

「ニンゲンでもわるいやつじゃないのよ」

「いっぱい遊んでもらいなさいってお母さん言ってたね」

こそそと話し合った子狐たちは、くるっとこちらを振り向くと、嬉々として駆け寄ってきた。

「遊んで遊んでっっ！」

「わあああ！」

駆け寄ってきた子狐たちは全員、恩に飛びついた。獣の勘かはたまた子供の勘か、最も遊びやすいのは彼だと判断したのだろう。

受け止めきれずに恩は仰向けに倒れた。子狐たちの声を聞きつけ、洞窟の奥から人影が姿を現した。

「みんな、何を騒いでいるんですか？」

よく聞き知った声に、恩はぎくりと硬直する。まさか、本当に！？

「…おや」

初めて見る私服姿で出てきた稜雲^{いずも}は、子狐たちにまわりつかれている恩を見ると口元を綻ばせた。

「いい匂いがすると思ったら恩くんではありませんか。君のバイト先は高科FWだったんですね」

「なんで稜雲会長がここに…はっ、もしかして依頼主の『ヒムカ』って会長のこと！？」

「ヒムカ？ ああ、いいえ、陽向^{ひむか}は私の父です」

稜雲は「みんな、離れて下さい」と恩から子狐たちを器用にはがしていき、恩に手を差し出した。その手を取って恩は立ち上がる。

「ここは父の妹…私の叔母の家なんです、叔母が夫婦で旅行に出かけている間、この子たちの面倒を見てほしい、とそちらに依頼したのでしょう？」

「ええ、そうです。僕が総責任者の此武Ⅱ高科。こっちが助手の千咲です。今日一日、よろしくお願いします。恩君とは面識がおりそうですね」

此武が握手を求めると、稜雲は一瞬意外そうな顔をしたが、すぐさま笑顔を作り、「こちらこそ」と軽くその手を握り返した。

「恩くんとは高校の先輩後輩の間柄なので。まあ、私自身はそれ以上の関係になることを求めています」

「会長！ 余計なこと言っていないで依頼主に会わせてくれよ」

半眼で尋ねると、稜雲は困ったように微笑した。

「残念ですが、父は急な仕事でこちらに来られなくなりました。」

なので私はその旨を伝えるためと、依頼主である父の代理として来たんですよ」

「そうですか、分かりました。では報酬などの交渉はのちほど。お子様方も恩君と遊びたいようですよ」

遊びたくてうずうずしながら恩をじーっと見上げている子狐たちに、稜雲は微笑笑して頷いた。

「そのようですね。もう遊んできていいですよ。けれどほどほどにね」

「わーい！」

「みんなも出てこいよー！」

一匹の子狐が呼びかけると、穴の奥からわらわらと十数匹の子狐たちが出てきた。多すぎっ。

「この兄ちゃんが遊んでくれるんだって」

「つれてけつれてけー♪」

「運べ運べー！」

集まってきた子狐たちは一斉に恩に飛びつき、横倒しにしてどこかへと運んでいく。

「わああっ、ちよっ、どこ連れてくつもりー!？」

恩を担ぎ上げたまま、子狐たちはぴゅーっと走り去る。といってもさほど遠くはなく、目の届く範囲内だ。

「此武さま、わたしも行ってきます」

カーレンがのほほんと子狐たちの後を追う。千咲が目でどうしますかと問いかけるので、お前も行ってこい、とひらひら手を振る。

千咲は無言で軽く一礼し、ゆっくりと歩き出した。二人きりになると、稜雲はくすりと笑みを零した。

「そのお姿もなかなか様になっていらっしやいますね。見事な外面の良さです」

「ふん。曲がりなりにも初対面の客だからな、貴様は。それなりの対応はしてやったぞ」

腕組みをし、素に戻った此武に稜雲は微笑笑する。

「お氣遣いありがとうございます。ですが、天下の戦神クロム様が人間界でこのようなことをなさっているとは」

「あの方々の命令だからな。逆らうわけにいかん。

それより、ヒムカの阿呆め。わざわざオレ様をこんなところに呼び出しておきながら顔も見せんとは。あんな腑抜け顔を見てもなんの感慨もわかんが」

「一応、警吏隊総本部の総隊長ですから、何かと忙しいのですよ」

神族でありながら、まるで庶民のように国仕えをするなど、ヒムカも相当おかしい生き方をしている。自分は上の命令だから仕方なしだが、奴は自らの意思だ。

神は基本的に人間たちと関わりを持とうとしない。ただ人間というものに興味を持ち、生きているその様を眺めて楽しむだけだ。

此武も陽向も天津神。あまつかみ神界にいる神もしくは人間界から降りてきた神を指す。天降り、国土の守護のため住みついたものは国津神とくにづかみ呼ぶ。

陽向は此武と違い、数千年前からこの国に住みついているので現在には国津神といった方が正しいか。陽向が人間と同じように生活するのは国津神だからではなく、人間を——この世界を好きになったからだという。

人間を下等生物としか捉えていない此武には理解しがたい感情だ。眉根を寄せて、不快そうに吐き捨てる。

「だいたい、なぜ自分のところに呼び出さん。用があるならこんな山奥でなくともいいだろうに」

「あの子たちの面倒を見てほしいと叔母上から連絡があったのは事実でしたし、ちょうどよい機会だと言っていましたよ」

「ちょうどよい機会？ なんのだ」
フエイトスピナー

「噂の宿命を紡ぐ者に会う、よい機会だと」

此武はすうっと目を細めた。稜雲はクス、と薄く笑う。
フエイトスピナー

「宿命を紡ぐ者のことは神族でも限られた者しか知らんはずだが」

「ええ。でも父上が話してくれました。それはもう楽しそうに」

「ちっ、あの腐れ頭め。いくら息子とはいえ、無関係の者にべらべらと話しおって」

「別段隠しておくほどのことではないでしょう？」

「軽々しく話すことでもない」

「ふふ、ご安心を。私は他の人には話していませんから。それに、完全に無関係というわけではないかもしれないよ？」

怪訝な顔を向けると、稜雲は遠くで子狐たちに押しつぶされている恩を見る。

「彼と初めて会った時、とても心惹かれました。それは予感のようにも感じられたのです。彼とは出会うべくして出会った。この先、私は彼と深く関わることになる、そんな素敵な予感を」

「人間と深く関わる予感など、不快なことこの上ないな」

きっぱりと言う此武に、稜雲は苦笑しながら小さくため息をついた。

（父上の言っていた通り、激しく人間嫌いな方ですね）

そんなヒトがなぜ、宿命を紡ぐ者の補佐役に選ばれたのだろう。

だが、それを追求することなく、稜雲は「そろそろお昼にしましう」と穴の方へと足を向けた。

かぐわしい香りに誘われ、子狐たちは洞窟に飛び込んできた。その後からぐったりとした恩と、疲れた様子のないカーレン、千咲が続く。

「おかえりなさい、恩くん。お疲れさまでした。この子たちの相手は大変だったでしょう」

「……ほとんどの気力を使い果たした……」

木で作られた椅子に腰かけ、テーブルに突っ伏す。声にも覇気がない。

「ご飯でも食べて気力を養って下さい。今日はまだ長いんですからね」

「つて、午後もまた相手しろってことかそれ!？」

「いいじゃないですか。この子たちも君を気に入ったようですし」
皿にスープをよそいながら稜雲はにっこり笑う。シンプルなエプロンが意外と似合っている。子狐たちは「いただきまーす」とスープにかぶりつく。

遊んでいて分かったが、ここの子供たちは大きい子から小さい子まで総勢二十一匹。オスが十三匹、メスが八匹だ。神族と言ってもさすがは狐。子だくさんだ。

「会長もちょっとは手伝えよ」

「この子たちの面倒をみるのが今日のお仕事でしょう？ 頑張って下さい」

「うえ」

自分も兄弟が多い方だったが、遊んでもらう側だったし、弟も妹も聞きわけがよかった。こんなふうにまわりつかれるのは慣れていないのでかなり疲れる。

「会長はいつもこの子たちの相手してるのか？」

「そんなことはありませんよ。叔母上の家に来るのも久し振りですし」

「え、じゃあここに住んでるわけじゃないのか」

「恩くん、ここと狩城市かれぎしがどれだけ離れていると思ってるんですか」
ここから毎日学校に通うのはいくら神狐でもやや疲れる。

「私は宝生市の自宅から通っているんです。ああ、そう言えば君を家に招待したことはありませんでしたね。どうです、今度遊びに来ませんか？ 父にも紹介したいですし」

「別に興味ない。紹介もされなくたっていい。」
すぱっと切り捨てると、稜雲は「つれないですね」といつもと変わらぬ笑みを浮かべる。そう返されることが当たり前で、もう慣れているのだ。

昼食を終えた後は、やはり子狐たちの遊びに付き合わされた。カレーレンと千咲はメスの子狐たちと人形遊びをしたり花摘みをしたり

しているが、恩はオスの子狐たちとボール遊びをしたり、木登りをしたり、追いかけてっこをしたりと、運動量が激しい。

午前と合わせてこれだけ運動をしてもけろっとしている子狐たちに、人間と神狐では体力が違うと思いい知らされた。へたり込む恩のそばで子狐たちは次の遊びの相談をする。

「次はなにをして遊ぼうかー」

「かくれんぼする？」

「えー？ それ、さっきやったじゃんかあ」

「ねーねー、格闘ごっこやろうよ！」

「あ、いいねー。じゃあ人間に変化しなきゃ」

そう言っ子狐たちはぽぽん、と人間に変化した。けれど不完全で、耳と尻尾が出たままだ。

さすがに人間に変化すると顔つきや体格などが違うので見分けがつく。だが、恩は格闘ごっこ聞いて渋い顔をする。

「兄ちゃん、相手してよ！」

「…他の遊びにしない？ 格闘ごっこなんて危ないし。ね？」

「だいじょーぶだよ、本気出さないもん！」

「いや、そうじゃなく…」

「兄ちゃん、弱いのか？」

何気ない子狐の言葉に、恩の胸がチクリと痛んだ。

不意に頭をかすめる光景があった。それは己の未熟さが招いた事故。そして、己の弱さで離れざるを得なかった誰かの面影。

昨日の雷といい、なんだってここ最近、昔のことを思い出すのか。ふと沸き起こった嫌な予感に胸が締めつけられた。

「お兄ちゃん？ どうしたの？」

きょとんとして問いかけてくる子狐の声に、恩は我に返った。

「…あ、ごめん、なんでもないんだ」

「そっか。じゃあいつくぞー」

ぐるぐる腕を回してから、五歳ほどの人間に変化した子狐の一匹——いや、一人が突進してくる。

繰り出してきた拳を、恩は反射的に右手で受け止めた。そのままくいつと腕を引っ張り、体を反転させて地面に転がした。

こてん、と地面に尻もちをついた子狐は、耳をぴくぴくつと動かした。

「やるねー、兄ちゃん。少しはできるみたいだね」

人間の五歳児にしては速い拳を難なく受け止めた恩に、子狐はうれしそうに笑う。立ち上がるとすぐさま、たんつ、と地面を蹴る。

「わわっ、ちょっと待って……」

普通の人間では出せないだろうスピードで恩に肉薄し、回し蹴りをする。

しかしそれも恩は戸惑い顔ながら軽くよける。子狐は続けて拳や蹴りを繰り出すが、受け止められたりよけられたりして、一つも当たらない。

ギャラリーとしてその様子を見ていた稜雲は感心する。

「おや、すごいですねえ、恩くん。手加減しているとはいえ、素晴らしい反射神経とキレのいい動きです。何か武術でもやっていたんでしょうか」

切り株に座ってつまらなそうに、同じく恩を見ていた此武はどうでもよさそうに呟いた。

「あのアホが武に秀でているのは当然だ。そういう家系だからな」

「クロム様——いえ、此武様は恩くんの出自を御存じなのですか？」

恩についてあらゆることを調べた。誕生日、趣味、家の住所、休日過ごし方、他にもいろいろと。

さっきはバイト先を知らないような言い方をしたが、実は知っていた。

恩がパンダ好きで、パンダの着ぐるみパジャマを着ていたり、毎日お気に入りのパンダのぬいぐるみと一緒に寝ていることももちろん知っている。

惚れた相手のことを知ろうと努力するのは当然のことだろう。たとえそれがストーリーカーまがいな行動だとしても、そうするのが普通

だと稜雲は思っている。

あらゆることを調べた稜雲だが、恩の本当の経歴は分からなかった。恩の過去は一切調べられなかったのだ。

滋生家に居候する前はどこに住んでいたのか。本当の家族は？

彼が滋生家しきやうに住むようになった四年前より以前のことは、すっぱり経歴が途切れている。まるで過去を断ち切るかのように。

ただ、ある程度の予想はついている。絳髮こうはつ緋眼ひがんは白鳳ハクオウの証。白鳳は東洋を中心に万国に点在している異能一族。

藍泉あいずみにもいることにはいるが、藍泉の白鳳は王家を毛嫌いしているから、王都に近い狩城市にはよほどのことがない限り来ることはないだろう。

白鳳の七割は藍泉の隣国・暁篠あきしの大帝国出身だ。顔立ちからして恩が暁篠の白鳳であることは大いに考えられる。その上、武に秀でた家系となると思い当たるのはたった一つ。

此武は瞑目し、どこか投げやりな口調で答えた。

「さあな。知りたければ本人に訊けばいいだろう」

「…まあ、それもそうですけれどね」

訊いてもあの恩が正直に答えてくれるかどうか。微苦笑し、稜雲は風で目にかかった前髪を掻き上げた。

バテて地面に大の字に転がっている恩を、此武があきれ顔で見下ろす。

「ハッ、情けない。この程度で参るとはな。根性無しの体力無しが」

「…う、うるさい……」

とつぷりと日が暮れた頃、子狐たちの両親が帰ってきたので、ようやく子狐たちから解放された。あれからほとんどぶっ通しで、子狐たちと格闘ごっこを強いられたのだ。これ以上はさすがに体が持たない。

此武が両親と報酬の交渉をしている間、恩は地べたで体を休めて

いた。

「ふふ、お疲れ様でした、恩くん」

「会長」

ひょこつと稜雲が恩の顔を覗き込んだ。恩はのろのろと上半身を起こそうとする。稜雲は恩の肩を支えてやりながらくすくすと笑う。「嫌ですねえ、学校内ならともかく、プライベートでも会長なんて呼ばないで下さいよ。稜雲、と呼んで下さい」

「えー…?」

疲れもあって、ぼんやりした顔で稜雲を見上げる恩。しばし考え、ためらいがちに呼んでみる。

「んー…稜雲??」

かなり疑問口調だったが、稜雲はうれしそうに破顔した。

「はい。それでは今日のお礼です」

そう言うのと、稜雲は恩の顔を引き寄せ、ちう、とキスをした。あまりに一瞬の出来事に、恩は事態を理解できなかった。

「恩くんの唇は柔らかいですねえ」

につこり笑った稜雲の言葉でようやく理解する。かぁーっと赤面し、どかんと怒りを爆発させた。

「なんってことするんだぁー!! 俺のっ、俺のおーっ」

「おいしく頂きました?」

がくうつと地面に両手をつき、恩は涙した。

「うええ、俺の…俺のファーストキスがぁぁ。男に、しかも会長にいいい……」

「今日は最高の日ですね?」

「最悪だぁぁぁ (泣)」

涙の海に浸かっている恩のもとに、たたたとカーレンが駆け寄ってくる。

「恩さーん。これ、子狐さんたちから頂いた薬草で作った、滋養強壮のスープなんですけど…あら? どうかしましたか?」

「うう、カーレン…」

「恩くんは感激に打ち震えているんですよ。私との口づ…」

「わーっ！　言うなバカ！　なんでもないからカーレン！」

慌てて恩は立ち上がり、カーレンに詰め寄った。

「えっとスープだっけ？　ありがとう、カーレン」

ひったくるようにしてスープを受け取り、ごくつと一口飲んでみる。

「うっ。苦…」

「おいしくなかったですか？」

「や。良薬口に苦しっていうし、このくらいの苦さなら平気だよ。

昔、もっと苦い薬飲んだことあるし」

じんわりと口の中に広がるあたたかい苦味。けれど、神狐の薬草だけあって、もう体のだるさがなくなってきた。

「よく効くなあ。もしかして、子狐たちはこういうのよく飲んでるから、あんなに体力あるのかな」

「そうかもしれないね。恩さんも毎日飲んでいれば、ずっと元気でいられるようになるかもしれませんよ」

「そうかなあ」

無邪気に言うカーレンに笑顔を見せる恩だったが、内心では、これを毎日少しつらいな…と思っていた。

しかし、にこにこ笑っているカーレンの笑顔につられてうっかり口を滑らせた。

「じゃあ、これ少しもらって帰ろうかな」

「はい。わたしもそう思ってたくさん頂いてきました」
「え。」

恩の笑顔が凍りつく。カーレンは両手を合わせてにっこり微笑む。
「千咲さんに運んでもらうことになっていますので、帰ったら飲んで下さいね。今日から毎日、朝晩しっかり飲めば丈夫な体になると思います！」

「……………」

今さら前言撤回などできない。純粋な厚意だと解っているから余

計に。

この、正直メチャクチャ苦いスープを毎日！ しかも朝晩飲めと。なんの罰だ。

「おい、カーレンとそこの魂抜けかかってるクズ赤毛。依頼は完了した。とつとと帰るぞ」

此武の冷ややかな声にも、恩はしばらく反応できなかった。

第7話 明かされる恩の素性

今日もまた、雷が鳴っている。まるで何かの予兆のように。
やはり雨は降らなくて、雷と風が競い合うように猛威をふるっている。

「風神と雷神が争ってるみたいだなー」

風に飛ばされないように、買い物袋を両手で抱え込んだ恩は一人ごちた。隣を歩くカーレンが、ツインテールにした髪を押さえながら不思議そうに小首を傾げた。

「二つの一族は仲が良いことで有名ですよ？」

「神族の常識だとそうなの？ おとぎ話では、風神と雷神は仲が悪くて、風神と雷神がケンカしてそれを仲裁する水神が加わると嵐になるんだって」

「まあ、そうなんですか？」

「いや、おとぎ話でそう言われてるってだけで事実是不知、けど」

どこからかチラシが飛んでくる。恩は見事な反射神経でそれをよけた。

「風神は風、雷神は雷、水神は雨を司るでしょ？ 昔の人は天災を神様の怒りや恠妖あやしのいたずらって思ってたみたいだから、そういうふう考えたんじゃないかな」

「確かに、風神は風を操りますし、雷神も水神も雷や雨を操りますけど：人間界に影響を及ぼすような力の使い方はしないと思います。皆さん、こことは違う時空にある神界にいますし、基本的に人間界で力を使っているのは、国津神くにづかみと生命神、時空神くらいですから」
創造神様は別ですけど。カーレンの説明に恩は半ば感心しながら相槌を打つ。

カーレンに会ってから、神族の本来の役割や性質を知ることになってきたと思う。それで明らかになった事実は、いい意味でも悪い

意味でも少なからず衝撃を与えた。

まず、神様はほとんど人間界に存在していないこと。

古くから語り継がれている十七属の神々以外にも神はいること。

天——正確には神界——にいる神もしくは天から降りてきた神を
あまつかみ

天津神、地上——つまり人間界に住みついた神を国津神ということ。

天にいる神も地上にいる神も全部いっしょくたにして考えていたが、本当のところは別物らしい。神狐である稜雲いずもは地上で生まれ育ったそうなので、国津神に分類される。

よく神社や寺、祠ほくらには神様が宿っている、もしくは訪れると信じられているが、そういうことは国津神でない限り滅多にないのとこと。

じゃあ、神社とかにお参りしても意味がないんじゃない？ 神頼み、なんていうけれど神様は実際は何もしてくれないわけだ。よし、これからはお参りに行かないことにしよう、と恩は決めた。

自然や物に神様が宿っている、という考えも間違いだと知った。あくまでも操ったり司っているだけで、神は個体で存在しているとのこと。だから嵐はまったくの自然現象で、風神たちは無関係なのだ。

しかし、これらは事実でも人間たちが知ることはない。きっとこれからも。神族たちが明かさない限り。

真実を誰かに伝えても、信用されないだろう。だから知ったところで得をしたかどうか定かでないが。

「なんかさ、カーレンといると神様が遠い存在なのか近い存在なのか分からなくなるよ」

苦笑する恩にカーレンはきよんとする。

「神話やおとぎ話では、神様って言うのはこの世界を創造して万物に宿る尊い存在ってことになってさ。」

実在はしてもほとんど人間の前に姿を現さない不思議生命体——ってというのが、普通の人間の常識なんだよ。

まあ、中には例外もいるけどね。オミリア様とか琅ロウライ？とかはたま

ーにテレビ出てるから」

リーフェには、実在してなおかつ、人間たちの目に多く姿をさらしている、世界的に有名な神がいる。

ここ、藍泉あいずみの守護神、神狐・オミリア。

同じく藍泉の守護神、水神・サヲギラ。

暁篠あきしのの守護神、雷龍・琅？。

バステルクの守護神、岩神・ゴボルデン。

ソテルーウエの守護神、氷神・サカ。

彼らは五大守護神と称され、信仰されている。

逆に、それ以外の神々はたとえ事実を含んでいる神話に登場していても、深く信仰されていない。

“神”は存在すると理解していても、五大守護神以外は虚構と思われるのだ。

「神様を信じてない人ってたくさんいるよ。むしろ信じてない人の方が多くくらい。同じ人外でも恠妖あやしは身近で、神や悪魔は存在が希薄なんだ。

なんでそんな風に差がついちゃってるのか知らないけどさ…俺はちゃんと神様がいてって解ってる。実際に目の前にいるし、冗談じゃなくてたくさんのお神様に会ってるしね。

だから、ちゃんと存在しているのにその存在を認められないのは、少し哀しいなって思うんだ」

そんなことを言われたのは初めてだったので、さみしげに笑う恩を、カーレンは不思議な思いで見つめた。人間が自分たちの存在を否定しようとも、それで心を痛めることはないし、存在が危うくなるわけでもない。

存在を認められないのは哀しい、と感じることが理解できない。人間に認められようが認められまいが、自分が今生きていることはまぎれもない事実だと理解しているから。

——けれど。そんなふうに、誰かの痛みを感じることで恩の優しさが、ほんの少しこそばゆく、心地よかった。

くすぐったい気持ちで、カーレンは微笑んだ。

「恩さんは優しいんですね。わたしのことを気遣ってくれて、ありがとうございます」

恩は赤面し、照れ臭そうに顔を逸らした。そこでふと、通りを歩いていた女の人と目が合った。紅い髪、朱い瞳。年の頃は二十歳くらいだろうか。

その女性は恩を見て息を呑む。恩も目を瞠り、硬直した。

「……天……？」

女性が微かに震える声で呼びかけた。恩はぎくつ、と小さく肩を震わせる。女性は目に涙を浮かべ、恩に駆け寄り、抱きついた。

「天！ 天雨！！」

目をぱちくりさせるカーレン。この女性は恩の知り合いのようだが、天雨とは？ 女性は恩に抱きついたまま、涙声で言う。

「うそでしょ。天：ホントにあなたなの？ こんなところで会えるなんて思わなかったわ」

「…黎、姉上…」

戸惑うように恩が言うと、女性は腕を恩の首に絡ませたまま体を離す。

「今までどこにいたの！？」 この四年間、ずっと家に連絡もしないで…っ」

「……………」

無言のまま、恩は俯いた。頭上でゴロゴロと雷鳴が響く。

「父上も母上も一族のみんなも心配してたのよ。あなたが突然、縁を切るなんて言って行方不明になったって！」

そばで聞いていたカーレンは驚いた。話の流れで、この女性が恩の姉：家族だと分かった。織枝や織が本当の家族でないことは聞いていたけれど、行方不明になっていたなんて。

（行方不明：というのは所在が分からないこと、ですよ？ ええと、恩さんには本当の家族さんと住んでいた場所があって、でも、今、恩さんは本当の家族さんとは別々に暮らしていて、家族さんは

恩さんの所在を今まで知らずにいた…ということ、でしょうか)

一つ一つ整理し、カーレンはあら? と思った。

家族が別々に暮らすことはおかしいことではない。織もいつか家を出て独り暮らしをしようとっていたし、人間は結婚というものをする、特に女の人は本来の家族とは別々に暮らすことが多いという。

けれど、恩は一人暮らしをしているわけでもないし、結婚をしているわけでもない。なのになぜ、本当の家族と一緒に暮らしていないのだろう?

困惑していると、女性がカーレンに気づいて視線を向けてきた。

「この子は?」

肩を震わせた恩は、顔を上げないまま、口ごもりながらも告げた。

「…彼女は…その、今住んでる家に…一緒に、住んでて…」

「今住んでる家? って、今はどこに住んでるの? 高天のお祖父様のところじゃないでしょ? お祖父様は来てないって言ってたもの。ねえ、天、縁を切るなんて家で何があったの? 音信不通になってたのは…」

「…がう」

「?」

「俺は…もう、天雨じゃない」

グイッと女性の体を押しつけ、恩は何かを堪えるように顔を歪め、女性をまっすぐに見つめた。

「言っただろ? 黎姉上。俺はあの家とは縁を切った。だからもう

『天雨』じゃない。ただの『恩』なんだ。今の俺の名前は、穂積恩だよ」

「…穂積…? 何、それ。どういうこと? 藍泉名である『恩』を名乗るのは分かるわ。でも、穂積って? 藍泉名での姓は『高天』でしょ?」

怪訝な顔で問う姉に恩は背を向けた。

「あの家も高天家も、俺にはもう関係ない。黎姉上には悪いけど、

これからは“赤の他人”だよ。だからこれからは、俺に関わらないで」

「！ 待って、天！」

引き止める姉の声に耳を貸さず、恩はカーレンを促して雑踏の中に消えていった。雷光

が閃き、ひととき強い風が吹いた。

買い物から帰宅してから部屋に閉じこもってしまった恩を、織枝と織は心配していた。

あんなに意気消沈している恩は初めてだ。カーレンに理由を訊いても、口止めをされているから、と教えてくれなかった。

「母^{かか}さま：あたい、なんとなく分かるんだ。めぐ兄の元気がないのは：本当の家族のことでじゃないかって」

ソファーに並んで座り、織は手を組んでうなだれていた。織の勘のよさは亡き夫譲りでかなり鋭い。その織が言うのだからそうと考えてよいのだろう。

あと数日もすれば、この子は天狗族の掟に従い家を出ていく。

血の繋がりはなくとも、織は恩を本当の兄同様慕っていたし、織枝も恩を息子同然に思っていた。それでも、これは恩と家族の問題だ。あくまでも他人である自分たちは口出しすることではない。

もし、恩の本当の家族が関わっているのなら、かりそめの家族である自分たちに何ができるだろう。

「恩くんとは、もう四年も一緒に暮らしているのよね。でも：私たちは恩くんのことを、何も知らないわ」

さみしそうに、織枝は手元に視線を落とす。これから冬になる。家を出ていく娘のためにマフラーを編んでいる途中だった。

これまで、子供たちには何度か手編みのマフラーを贈っていた。もちろん、恩を拾ってから恩にも。

織枝が恩を拾ったのは四年前。息子が掟で家を出てから一年後の

ことだった。散歩をしていたら荷物をひったくられ、通りがかった恩がひったくりを捕まえてくれたのだ。

そのお礼をしたくて家に招いたところ、住むところを探しているというので、この家に住めばいいと勧めた。

その後いろいろ話を聞いたが、名前と年齢しか教えてくれなかった。どこに住んでいたのかも、家族のことも。何か言えない事情があるのだと察して、あれから何も訊かずにはいたけれど。

「もう少し…話し合ってみてもよかったかもしれないわね。傷つけてしまうんじゃないかと思って触れずにいたけれど、それがかえってよくなかったのかもしれないわ」

近くにいても、心は近づいていなかったのかもしれない。悩みを打ち明けるほど心を許してもらえていないのは、距離を取ってしまったのは自分たちの方だったのだ。それなのに、家族として認められたいと、甘えてほしいと願うなんて。

「わがまま…かしらね。あの子に家族として愛してほしいと思うのは」

愛する夫を亡くし、娘と息子を女手一つで育ててきた。大切な息子だけれど、十の歳に家を出てしまった。掟だから仕方なかったけれど、とても寂しかった。

織も大好きな兄と離れ離れになって悲しんでいた。そんな織も、兄と同じ年になれば家を出る。そうしたら自分は一人ぼっちだ。

だからかもしれない。あの時、恩を引き止めたのは。少しでも、長く一緒にいてくれる人を欲した。離れていく家族があるから、共にいてくれる家族を求めたのだ。

それなのに、心を許し合える家族になりたいと願いながら、恩の心に踏み込まずにいた。歩み寄ることをしなくせに、あちらからは頼られたいなんて。わがまま以外のなんでもない。

「そんなことないよ、母さま。あたいだって、めぐ兄には本当の妹みたいにかわいがってもらいたいもん。…でも、今さらめぐ兄の心に触れるのは…怖いんだよ」

どう接すればいいのか分からない。織は膝を抱え、頭を膝に押しつけた。織枝も口をつぐみ、沈黙が落ちる。

二人の様子を、カーレンはドアの陰に立って見ていた。数年間、共に暮らしていたあの二人でさえ、今の恩への接し方が分からずにいる。出会ってさほどの月日を経ている自分、それこそどうすればいいのだろう。

（皆さん落ち込んでいます。こんな時、わたしはどうすればいいんでしょうか。……………）

とりあえず事情を少し知っている恩の方に行ってみる。恩の部屋のドアをノックしてみたが返事がない。しばらく待ってみたが無反応なので、いけないだろうかと思いつつドアを開けてみた。

「恩さん……？」

恩は布団の上でパンダぬいぐるみを抱きながら丸くなっていた。背中を見るだけで落ち込んでるのが丸わかりだ。

「あの……お尋ねしたいことがあるんです」

声をかけると、恩は無言ながらも振り向いた。表情は暗いままだが、話を聞いてくれるようだ。

「わたしはまだ、人間界に来て日が浅いです。人間界のことをよく知りません。なので、わたしはこういう時どうすればいいのか分からないんですけれど、それでも何かしたいんです。わたしは何をすればいいのでしょうか？」

正直に尋ねてみると、恩の方がぶるぶる震え出した。きょとんと小首を傾げると、恩はぷふーと吹き出した。

「あはは！ カーレンって……本当になんにも知らないんだなあ」

落ち込んでいる相手に何をすればいいか訊くなんて、全然慰めになっていない。けれど、逆に緊張が緩んだ。さっきまで胸に凝（こも）っていた焦り、不安、恐怖、罪悪感が……緩やかに溶けていく。

笑い過ぎて涙が出てきた。目元をこすりながら、恩はいつも通りの笑顔を見せた。

「カーレンには敵わないや。普通は落ち込んでる人にそういうこと

訊いちゃダメだよ？」

「まあ、そうなんですか？ ではどうすればいいのか教えて下さい」
「んー、相手とか状況にもよるけどさ。大丈夫って言ってあげるとか、悩みを聞いてあげるとか…」

「分かりました。では恩さん、『大丈夫』です！ それから悩みを聞きます！」

眩しいほどの笑顔でカーレンは恩の前にちょこんと正座する。さあ話せ、と目を輝かせている。実行が早いというか、言われたことを鵜呑みにするというか…

（…なんか、カーレンってすぐ騙されそう。疑わないんだなー。間違ったことは言っていないけど）

ちよっと心配になってきた。詐欺師とか悪徳商人とかにころっと騙されても不思議じゃない。というか絶対あり得る。

（うわ、どうしよう、セールスマン来たら断れないよきつと。通販でもお得だって言われたら二つ返事で買っちゃうよ！）

それに悩みを聞く気満々の顔をしている。打ち明けなかったらカーレンの方が落ち込みそうだ。

「…うん、話すから少し落ち着いてね。と言ってもどこからどう話せばいいんだろ」

カーレンのずれた慰めのおかげで、だいぶ平静を取り戻しつつある。無意識であれ、彼女には救われた。今なら話してもいいだろうか。自分のことを。

深呼吸をし、カーレンと正面から向き合って少しずつ語り始める。

「まず、さっきの女の人は黎明^{レイミン}って言って、俺の姉だよ」

「恩さんにはお姉様がいたんですね」

「うん。あと二人姉がいて、兄が五人、弟が二人、妹が一人の十二人兄弟。俺は九番目なんだよ」

家を出てから増えてさえないなければ。四年の月日は短いようで長い。もしかしたらひとりくらい弟か妹が増えているかもしれない。

「姉上は十年くらい前に藍泉に留学に来ててね、それ以来ずっとこ

つちで暮らしてる。姉上が言ってた『天雨』っていうのは俺のもう一つの名前」

「もう一つの名前、ですか？」

「うん…えっと、その…」

ここまで言うと思は少し口ごもった。名前のことを話すとすると、どうしても実家の名を出さなくてはいけなくなる。さすがにそれは気が重い。

なぜだか胸騒ぎがするのだ。その名を口にしてしまったら、何かが壊れていくような。

(でも、話すって言っちゃったしな。それに、姉上に見つかったからあの家に俺が藍泉にいることは知られるだろうし)

そうしたらきつと、両親が一族の誰かが捜しに来る。あの家に戻る気はない。けれど、黎明に見つかった時、実家のことを話すというのは決まってしまったのだ。今さら後には引けない。

「俺の実家は…藍泉の隣国で、このフィグ大陸一の大国、暁篠にある。異能一族・白鳳^{ハクオウ}の血統、鋒家^{フォン}」

暁篠——正式名は暁篠大帝国。藍泉を含む五つの国が存在するフィグ大陸の中で、最も大きな国だ。その暁篠の中で皇族に並ぶ権力を持つのが鋒家である。

「異能一族っていうのは知ってる？ 代々、異能を持って生まれる一族のこと」

「あ、はい。聞いたことはあります。人間の中には、異能と呼ばれる特殊な能力を持つ者がいると」

「白鳳は不老長寿の異能でね。成人すると成長が止まる。姉上も下手すれば十代に見えるけど、あれでも二十代半ばなんだよ」

姉だけでなく、母も祖父母も親戚も、何十年経とうと白鳳の人間は、みんな若いままの姿を保っている。もちろん自分もそうなるだろう。

「それで名前のことなんだけど、鋒家ではなぜだか昔からの決まりで、赤ん坊が生まれた時、両親のどちらかが他国の人間だったら、

その母国で通用する名前と一族の中で通用する名前の二つを赤ん坊につけるんだ。

俺の父親はこの藍泉出身で、母親が鋒家の人なんだ。だから俺には二つの名前がある。鋒家…暁篠で通用する『鋒 天雨』っていう名前、それから藍泉で通用する『高天 恩』っていう二つの名前が」

「高天：先ほどお姉様もおっしゃってましたね。藍泉名の姓は『高天』だと」

「うん。俺の本当の藍泉名は高天 恩。穂積っていうのは素性を隠すために適当につけた名字だからさ」

高天と名乗れば、確実に鋒家にばれてしまう。だから性を偽り、父方の祖父の家にも身を寄せなかった。全て、鋒家から逃れるためにしたこと。恩は言葉を切り、瞑目した。

「俺が…藍泉に來たのは、鋒家から…鋒家の闇から逃げるため」

「鋒家の、闇？」

うっすらと思い瞼を開き、恩は静かな声で告げた。

「鋒家は…何十年前前から、ある男と戦い続けているんだ。奴は鋒家を憎み、鋒家を滅ぼそうとしている。そいつの名は——？？」レイウエン。俺はそいつと鋒家の因縁という闇が怖くて、逃げ出したんだ…っ」

苦悩の表情で恩は叫ぶように言った。そのままうなだれ、両拳をひざの上で強く握りしめる。カーレンは小刻みに震える恩を痛ましげに見つめた。

恩が藍泉に來たのは四年前。この四年間、恩は一人怯え続けているのだらう。

肉親と離れ、家族に会うことを拒み、名も偽り、誰にも相談することなく、恐怖を抱え込んできた。たった独りで。

「あいつは鋒家の血筋を絶やそうとしている。鋒家の人間を皆殺しにしよう…っ。鋒家の人間である限り、誰であらうと、どこまでも追いかけてくる。」

あの家に居続けたら、いつか狙われるかもしれない…だから、素性を隠してこの国に來た。でもっ、いつ、あいつに見つかると…

いつも不安で、怖くてたまらなかった！」

それほどその闇は恩にとって怖ろしいものなのか。??という男を知らないカーレンには理解できない苦しみ。

そつと恩の両手にぬくもりが降りる。顔を上げると、カーレンがやわらかく微笑んでいた。

「つらかったんですね。大切な人たちと別れて…孤独な日々を過ごして。いつ訪れるかもしれない恐怖と戦い続けて」

ふわ…とカーレンの背中から白い翼が現れる。はらはらと羽根が舞い落ち、恩の頬をかすめた。

「頑張りましたね」

恩の目が徐々に見開かれる。

「ずっとひとりで、頑張ってきましたね。もう、肩の力を抜いてもいいですよ」

見開かれた目から涙が零れた。握りしめた手をゆるめ、添えられていたカーレンの手に触れる。

「…うん…っ。ありが、とう…っ」

四年の間、自分のしたことを悔やんだこともあった。本当にこれでよかったのか、間違つてやいないかと何度も自問した。

そのたびに、あいつの影がちらついて目を背けた。後戻りすることも、進むこともできず、立ち止まったまま。

褒められなくてしていたことじゃない。褒められることでもない。己の弱さゆえに、過去を捨て、家族を捨てた。

——それでも。

頑張ったねと言われたこと。少しでも、四年間の自分を許してもらえたようで、心が軽くなった。

ほんの少しの間だけでいい。今は、この喜びのためだけに涙を流させて。

恩は家を出て以来一度も流さなかった涙を、思い切りあふれさせた。

第8話 雷雲を呼ぶ男

黒き天を稲妻が駆け抜ける。少し遅れて雷鳴が轟いた。

風が強く吹き荒れ、道を行くものはほとんどいないというのに、一人の男が暴風の中に佇み、小高い丘から町を見下ろしていた。

鋭い眼光には感情が浮かんでおらず、冷然としている。

「ここに…奴が」

そう呟くと、にいいと口元を吊り上げる。その時初めて、男の顔に感情が浮かんた。愉悦と、狂気が。

カッ、と雷光が閃き、男の全身を照らした。風になぶられる長い髪は、鮮血で染めたような深紅だった。

* * *

気持ちが悪く落ちてから、恩は織枝と織に自分の素姓を打ち明けることにした。カーレンは「水入らずで話してきて下さい」と席を外している。

白鳳であること、鋒家の血族であること、藍泉に來た理由。二人は驚いていたけれど、笑って受け入れてくれた。

「ごめん、もうすぐお別れだって言うのに、直前にこんなこと話して」

「ううん、話してくれてうれしいよ、めぐ兄。この家にいる時に話してくれてよかった」

ふるふると首を横に振り、織は恩に抱きついた。

「それに謝るのはあたいたちもだよ。血が繋がってなくても家族だ

よって言いながら、境界線を引いてた。だからめぐ兄のことを訊けずにいたし、めぐ兄もあたいたちに何も言えなかったんだよね」

「織、俺は…」

「わかってる。めぐ兄が何も言わなかったのは、あたいたちを巻き込みたくなかったからだよね。でもね、悩みぐらい言っただけで済んだ。た。た。」

言ってもらえるほど家族としてめぐ兄に信頼されなかったのは、あたいたちにも原因がある。だからね、めぐ兄。おあいこ。もう何も言わないで」

ぎゅうつとスがるようにしがみついた織に、恩はもう一度口を開きかけてやめた。

これでおしまい。今までのことは全部、水に流そう。

そう言われているようで、一瞬ためらってから、恩は織の頭を撫でた。犬耳がびこびこ揺れる。

「それでね、めぐ兄。これからはホントにホントに家族だから、めぐ兄にも隠したままじゃいけないよね」

「え？」

恩から離れた織は織枝を一度振り向く。織枝は微笑んだままこくりと頷いた。織は恩に向き直り、素顔を隠してきた面に手をかけた。何をするのか察した恩は慌てて止めに入る。

「ちよっ、ちよっ待って、まさか！」

織の顔を覆っていた面が外され、素顔があらわになる。天狗族は血縁以外に素顔をさらしてはいけないのが掟。恩はさっと顔を逸らした。

「いいんだよ、めぐ兄。めぐ兄は家族だもん。だから面を取ってもいいの。顔を見せてもいいんだよ」

「で、でも…」

「恩くん。今まで、こうして私たちはあなたと壁を作ってしまった。けれどもう、そんな壁は壊すわ。だって家族なんですもの」
穏やかな織枝の声に、恩はおもむろに織を見る。

黄緑色の大きな瞳。頬にはわずかにそばかすがあって、決して美少女とは言えないけれど、年相応の愛らしさのある顔立ち。

はにかむように笑う織は手を後ろで組んで、恩を覗き込むように体を傾けた。

「どーお？ めぐ兄。これがあたいの顔。びっくりした？」

「う、うん。でも…かわいいよ」

「ほんとっ？ えへへ、うれしいな♪」

にっこり笑って、織はぱたぱたと尻尾を振った。織たちが歩み寄ってくれたのだ。なら、自分もそうしなくては。カーレンから勇気はもらった。前に進む勇気を。

「織、織枝さん。さっきも言った通り、『穂積 恩』は偽名だ。鋒家に悟られないようにその名前を使っていたけど…これからはちゃんと、本当の名前を使うよ。俺は、高天 恩だ」

きゆうっと強く手を握りしめて宣言した恩は、晴れ晴れとした笑顔だった。

「ええ、分かったわ」

「改めてこれからもよろしくね、めぐ兄！」

新しい家族ができた。四年の月日を経て、今ようやく。

部屋の外で壁越しに三人の会話を聞いていたカーレンは、頃合いを見てリビングに入った。

「皆さん、お茶を持ってきました」

「あら、ちようどおやつの時間ね」

時計を見れば三時を回っていた。カーレンがお茶菓子とティーカップをテーブルに並べる。織はカーレンが来ると面をさっとかぶった。さすがにカーレンの前ではまだ外せないようだ。

「そうだわ。駅前の菊池堂で新作の和菓子が出たって聞いたのよ。買ってあげばよかったわね」

「新作？ わー、食べたーい！ 菊池堂の和菓子は一番おいしいもん！」

「じゃあ、今から買ってこようか。エアバイクで行けばすぐだし」

「でも、風が強いわ。雷も鳴っているし、いつ雨が降ってくるか…」
その時、カッ、と閃光が走る。次いでゴロゴロと雷鳴が響いた。
心配そうに止める織枝に、恩は「大丈夫」と笑った。

「それより売り切れていないかどうかの方が心配だよ。待っててね、
織。特急で買ってくるから」

「うん！　ありがとう、めぐ兄！」

「気をつけて下さいね」

織とカーレンに見送られ、恩は菊池堂へと向かった。この後に最悪の邂逅が待っているとも知らず。

菊池堂の新作和菓子はギリギリ最後の一つだった。思い切って買
いに出てきてよかった。家を出てからは不思議と、雷と風が弱まっ
ている。おかげで早くに帰れそうだ。

エアバイクで慣れた道を走っていると、突如、轟音とともに激し
い雷光が目を焼いた。

「うわっ！！」

慌ててエアバイクを停める恩。大通りではなく、人気のない道で
よかった。ちかちかする目をしばたたかせ、恩はエアバイクから降
りた。その時。

ドク…ン

覚えのある感覚が全身を突き抜けた。そしてこの気配。背後から
何者かが近づいてくる。

まるで嵐の前の静けさだったかのように強風が吹き始め、稲光が
空を疾^{はし}った。

心臓が早鐘を打つ。恐怖で足がすくむ。それでも、恩は振り返っ
た。

近づいてくるのは一人の男。風になぶられる長い深紅の髪。空を
駆ける稲妻^{はけ}よりも烈しい緋色の眼。ゆっくりと、けれど力強い足取
りで歩いてくる。

男は恩と目が合うと、にいと口元を笑みの形に歪めた。

「ようやく見つけたぜ、^{フオン}鋒家の星よ」

「……っ、^{レイウエン}……！！」

とうとうこの時が来てしまった。この因縁の男に見つかる時が。恩はぎりつと歯を噛みしめた。

「鋒家周辺を漁ってもなかなか出てこないと思ったら……異国に逃げやがっていたとはなあ。そんなにあの家が嫌か？　くくく、その気持ちは分からんでもねえが……逃げた先がこの藍泉とはな……つくづくあいつに似てやがる」

「何しに……何しに來たんだ！　俺は鋒家と縁を切った！　もう鋒家とは関係ないんだよ！」

のしかかる威圧感と恐怖に耐えながら叫ぶ。しかし^{レイウエン}……は嘲笑を深めただけだった。

「何しに來た、だと？　くくく、笑わせる。貴様を殺すために決まってるだろう」

「……っ」

「鋒家と縁を切ったとぬかしたが、そんなこと知ったことか。貴様に流れる腑抜けた鋒家の血！　それを絶やすのがオレの目的なんだからな！！」

カッ、と閃光が走る。それに一瞬気を取られた恩は目をつむった。しかし、間近に迫った……の気配に勘で横へ跳ぶ。直後、恩のいた場所を鋭い刃が過ぎゆく。

「くくく、避けたか……勘は鈍っていないようだな」

……が羽織っているコートの下から出てきたのは、籠手から生えた鋭利な刃物。あのまま立っていたら首を刎ねられていただろう。

「今のはただの確認だ。貴様の腕が鈍っているかどうかのな」

「……どうしてそこまで鋒家を憎むんだ！？　鋒家の人間がそんなに気に入らないのか！？」

「当然だ。最強を冠していながら、ぬるま湯につかり続けることを選び、なおかつそうであることに気づかん愚かな鋒家など滅びれば

いい!!」

刃物を籠手に引っ込め、??が向かってくる。恩は覚悟を決め、??と対峙した。

拳を繰り出す??。恩はそれを、腕を交差させて受け止めた。すかさず体を沈め、足払いをかけるが??は後ろに跳んで躲す。

今度は恩が間合いを詰め、回し蹴りを放つが、あっさりと片手で受け止められ、投げ飛ばされる。

空中で体勢を直し、着地するが、瞬時に接近してきた??の蹴りをまともに受け、堀に背中から激突した。

「がっ……」

ずるずるとその場にくずおれる恩。かなり腹に衝撃があった。ゲホゲホと咳き込む。

「ふん…昔よりは手応えがあるな。さすがは鋒家次期当主“ティシン綺星”か」

「!」

「だが、この程度で綺星とは…つくづく今の鋒家は弱い」

腕組みをし、??は嘲笑を浮かべながら恩を見下ろした。恩は腹を押さえ、顔を上げた。

「…俺は…綺星じゃ、ない」

声を震わせる恩に、??は笑みを消した。

「何度も言うけど…っ、俺を綺星て呼ぶな! 俺は鋒家当主にはならない!! 俺はもう…鋒家とは関係ないんだああッ!」

姿勢を低くしたまま、恩が??に突進する。??はその場から動こうとしない。恩の拳が??の顔面に打ち込まれる――

「目障りだ」

??の言葉と同時に、恩の体に電撃が走る!

バチバチバチッ

「うあああああッ!!」

がくりと倒れる恩。かろうじて息はあるが、体はほとんど動かせない。

「確かに貴様は綺星ではないな。最強の冠を手にすることに怯える臆病者など、当主になる資格はない！！！」

振り上げた？の腕に電撃がまといついた。もう一度電撃を浴びせれば決着がつくだろう。

「愚かな鋒家の星よ。死ねえ！！！」

？の腕が勢いよく振り下ろされる。激しい稲妻が黒天を駆け抜けた。

恩が出ていってから雷と風が弱まった。けれど、なぜか胸のあたりがざわつく。

カーレンは窓から空を見上げていたが、不意にきびすを返した。

「織枝さん、織さん！ わたし、恩さんを見えます！」

二人の返事を待たずにリビングを飛び出す。外に出ると一変して風が吹き荒れていた。

それでも翼を広げて空へと飛び立つ。菊池堂のある方角は分かっている。

カーレンは強風に目を眇めながら飛んでいく。

（なぜ、こんなにも胸が締めつけられるんでしょう。恩さん…どこですか？ 無事でいますか？ 恩さん！）

その時、轟音が耳^{じだ}朶を打ち、ひときわ激しい雷光が空を照らした。そしてその瞬間、ザワ…と全身が総毛立つ。

「！！ この気配は…？」

暗く、重く、冷たい…けれど激しい怒りと憎悪。

「恩さん…っ」

胸のざわつきは確信へと変わる。恩さんに危険が迫っている！ 再び稲妻が走り、カーレンは憎悪の念が渦巻くところへ急いだ。

刺すような波動。これは、魔の気配によく似ている。一体何が起

きたのか。そう案じた時だった。

「確かに貴様は綺星ではないな。最強の冠を手にすることに怯える臆病者など、当主になる資格はない！！！」

「！」

朗々たる声が耳に飛び込んでくる。見たことのない深紅の髪の男性。その足元には倒れた恩。カーレンは考えるよりも早く急降下していた。

「恩さん！！」

「愚かな鋒家の星よ。死ねえ！！！」

男の腕が振り下ろされる。その腕には電撃がまといついている。

直後、天から落とされる放電の怒槌。いかづち

まっすぐに恩めがけて落とされた稲妻は、しかし恩に当たること
はなかった。

「……なんだ、貴様は」

不機嫌に眉根を寄せる？。？の前に翼を広げたカーレンが立ち
ちはだかり、透明なドームのようなもので恩と自分を包み込んでい
た。

それが雷撃を吸収し、恩は満身創痍ながらもまだ生きている。

「これ以上、恩さんを傷つけさせません！」

表情は毅然としているが、声も体も震えている。？は邪魔が入
ったことに舌打ちした。

恩が小さく身じろぎ、無理やりに顔を上げる。

「カー…レ……」

どうしてここに／危ないよ／動けない。

なんで来たの／苦しい／逃げて。

怖い／ダメだ／痛いよ／殺されちゃう――

――カーレンが、殺される！

「逃げ…て…カー…レン…っ」

ぐぐぐっと立ち上がろうとする恩。この状態で動くなど、無理も
いいところだ。？は恩を睨み据え、鼻を鳴らした。

「その体でまだ戦おうとするか。ますます奴を彷彿とさせやがる。だが」

にたりと??は嗤った。

「それならばそれで面白い。このまま一思いに殺してもいいが、その執念、少し気に入った。今はひとまず退いてやろう」

羽織ったコートを翻して、??は二人に背を向けた。

「貴様は弱い。腑抜けた鋒家の血を持っている。だから殺す。だが、^{なぶ}捌り殺す方に変更だ」

肩越しに一瞥し、狂気をはらんだ笑みを浮かべる??。

「オレは一思いに殺すのも好きだが、捌り殺すのも好きなんだ。せいぜい強くなってオレを愉しませろよ」

嘲笑を残し、??は二人の前から去った。完全に気配が消えると、カーレンは防御壁を解き、恩に駆け寄った。

「恩さん！　しっかりして下さい！」

「：なんで：君が、ここに：？」

「恩さんが出かけてから胸騒ぎがして：ああ、なんてひどいことを」涙目でそつと恩の頬に触れる。恩は申し訳なさそうに顔を歪めた。彼女のこんな顔は見たくなかった。こんな弱い自分を見せたくなかったのに。

「今、治します。セルウィーヴィアオージバル」

ぽわ：と恩の全身を翠色の光が包む。小さな光の玉が傷の周りでポポポンと弾け、みるみる傷が塞がっていく。

「すごい：あれだけの傷が：っ」

痛みも傷も消え、恩は立ち上がった。動かしても全然問題ない。

「ありがとう、カーレン！　もう平気：あれ？」

恩は元気になったが、カーレンの顔に疲労の色が浮かんでいる。「大丈夫です。治療術は少し、神力を多く使うので：少し疲れただけですよ」

ふわりと立ち上がり、カーレンはにこっと笑って見せた。

「それよりも、先ほどの方は一体、誰なのですか？　恩さんのお知

り合いですか？」

「……あいつが、さっき話した??だよ」

「えっ？」

「見つかった。さっきので分かる通り、あいつは容赦なんてしない。こうなった以上、本気で俺を狙ってくると思う。今のままじゃ…太刀打ちできない」

みすみすやられるつもりは毛頭ない。けれど、??は強い。対抗できるほどの力量が今の自分にはない。それが悔しい。

それ以上何も言えず、恩は俯いてしまった。カーレンもなんと言葉をかけていいのか分からず、二人はしばらくその場から動けなかった。

藍泉某所。アジトに戻ってきた??は、暗闇の中をものともせずに進む。

「お帰りなさいませ、??様」

暗がりの中から女性のハスキーボイスが流れてくる。前方に蠟燭立てがあり、揺れる炎の淡い灯りの横に、三十前後の女性が立っていた。女性は恭しく首を垂れる。

「珍しくお早いご帰還ですね。何かありましたか？」

スタスタと傍らを通り過ぎていく??の後ろについていきながら、女性はハスキーボイスで問いかけた。

「ああ。見つけたぞ」

簡潔な答えでも女性は意味を理解した。??はここ数年間、一人の男を探していた。彼が心底嫌悪する鋒家の次期当主、綺星の名を持つ少年を。それが…

「とうとう見つかったのですか。おめでとうございます。では、その者はすでに…」

「まだ殺していない」

「え?。」

見つけたらすぐに殺すと言っていたのに。女性は何を丸くした。そのせいで歩調が少し遅れたが、??は構わず進んでいく。

「少しだが奴に興味が湧いた。奴の悪あがきを見る方が、瞬殺するより愉しそうなんだな」

笑みを零す主人に、女性は慌てて駆け寄り隣に並んだ。

女性にしては背の高い彼女は、長身の??とさほど変わらず、ちよつと視線を上向ければ、主人の至極楽しそうな顔が見える。

女性は諦めたようにごく小さくため息をつき、何も言わず主人につき従った。

第9話 依織と葉草探しと

翌朝は昨日までの雷と風がうそのような晴天だった。登校した恩はさっそく改姓したことを学校側に伝えた。

「「ええーっ!？」 今日から名字が『高天』^{たかま}になったー!？」

クラスメートにも話すと、案の定結構な騒ぎになった。理由は「ちよつと家庭の事情で」と言ったら、妙な方向に解釈されたよう、なぜかいろいろ気遣われた。

「ふーん、まあ、名字変わっただけで今までどおりよね」

「なんだな」

幸緒^{ゆきお}が椅子の上で足を組み、笑顔で恩の机に頬杖をついた。玲汰^{れいた}がこくこく頷いて賛同する。

「そーそー! 穂積：いや、高天がかわいーってことに変わらないしな」

「かわいいって言うなっ。それから頭撫で回すのもやめろ!」

くしゃくしゃと頭を撫でてくる亜榎^{アズサ}の手を振り払うと、まひろが後ろから首に腕を回して寄り掛かってきた。

「高天 恩かあ。なんかかっこいいーね。穂積もよかったけど」

「そうか？」

「『高天』って珍しい名字だよ。高い天って書くんだろ？」

要^{かなめ}がまひろを抱きかかえるように、さらに寄り掛かってくる。ちよつと重い。

「それって確か古い国姓だよ」

眼鏡の奥の眼が光った。「国姓？」と幸緒と亜榎が首をひねると、ちちちつと指を振りながらまひろが説明する。

「国姓っていうのはね、長年強い権力を持った貴族や豪族、皇族や王族の名字のことだよ☆

王族や皇族の姓は自動的に国姓になって、今の藍泉国王様^{あいずみ}、徳永^{とくなが}金剛陛下^{こんぎょう}が王位につかれた時に『徳永』も国姓に定められたから、

暗黙の了解で陛下の一族しか徳永って名字を名乗っちゃいけないの。だから今まで徳永の姓を持っていた一般の人はみんな改姓してると思うよ」

「他に今の藍泉での国姓は『汐見』^{しおみ}『矢尾』^{やゐ}『剣崎』^{けんさき}『加賀』^{かが}『鈴城』^{すずき}『大橋』^{おはし}『三宅』^{みやけ}『月島』^{つきじま}『皇斐』^{すめらい}『中林』^{なかつ}『布瀬』^{ふせ}『石川』^{いしかわ}ってとこかな。

『高天』は数百年前に認定されてたやつだね。今では国姓だって知らない人の方が多いだろうけど、高天姓を持ってる人はほとんどいないと思うよ」

なんでもないような顔でぺらぺらと説明する二人に、さすが天才双子姉弟…と恩たちは感心した。

「ん？　ということはさ、高天って貴族か王族の血筋ってことか？」
「豪族かもしれないんだな。数百年前は豪族が各地の土地を治めてたからなんだな」

「えー？　でも、高天なんて豪族いたっけ？」
「表舞台には出てなくてもいたかもしれないねーじゃん。武将だって有名なのとそうでないのいるし」

「うーん、まあねー」
本人そっちのけで盛り上がる幸緒たち。恩は複雑そうな表情でなんとなしに話を聞いているだけだった。

放課後、^{タカシナフリーワーク}高科FWに行くと思覚えのある人物が出迎えてくれた。

「こんにちはです、めーちゃん♪」

「あれっ、依織^{いおり}？」

入り口のところでちょこん、と後ろで手を組みながら笑っていたのは皇斐依織。

^{タイムプロテクター}時空を守る時空の守人で、普段は時空神^{じくうしん}ジルティリードの住む^{とき}時空神の神殿にいる。その彼女がなぜここに？

「今日はイオ、お手伝いに来たです」

「そうなんだ。でも大丈夫なの？ そっちはそっちで仕事とかあるんじゃない？」

「全然問題ないのです。今日のお仕事がここのお手伝いですから」

「あ、そうなの」

くるっとターンして楽しそうに笑う依織。無邪気な笑顔に癒される。

「ようやく来たか、のろまな亀虫め。依頼はすでに受理してある。とっとと行くぞ」

高飛車に椅子でふんぞりがえっている此武^{コノム}。相変わらずの毒舌に全然癒されない。

「恩さん、頑張りましょうね」

ふんわりと微笑むカーレンに笑い返し、恩は宿命^{フエイトスピナー}を紡ぐ者の衣服に換装した。カーレンの話だと、今回の依頼は薬草探しとのこと。

「薬草探して…なんかあまり人外関係なさそうんだけど。あ、依頼者がまた人外なの？」

「はい。山間の村に住んでいるという妖狸^{ようり}さんからです」

「狐の次は狸か…今度こそ何もないといいけど」

呟くと、脳裏にあの時の悪夢が蘇った。ファーストキスを奪われた恨みは根強い。

（狸なら稜雲^{いずも}とは関係ないかもしれないけど、絶対そうじゃないとも言えない！）

恨みがましく恩は顔をしかめた。それに、妖狸という知り合いに一人いる。まさかそんなことはないだろうと思いつつ、恩は会社を出発した。

依織を含めたいつものメンバーがやってきたのは伊師市^{いじ}にある井ノ山だった。

狩城市^{かれぎ}からほぼ東にある伊師市は、藍泉の南部の中で最も山が多い市だ。多くの登山家が訪れる宇賀尾山^{うがお}を始め、大小さまざまな山

がある。

井ノ山は伊師市の南東にあり、この辺りは僻地で町と言うよりは里や村になっている。依頼者は井ノ山のふもとにある村に住んでいるらしい。

「この村のどこかに依頼者がいるはずだ。探すぞ」

「依頼者の名前は？」

「知らん」

此武がきっぱり返す。恩はがくつとこけた。

「依頼の手紙には依頼内容とこの一井村の名しか書かれていなかった」

「此武：よくそんなので依頼受けたな」

恩が呆れ気味に言うのと、なぜかカーレンがしゅんとうなだれた。

「すみません」

「へ？」

「この依頼を受けたのはカーレンだ」

「！！！」

「とても困っているようでしたし、葉草探しだったらそれほど疲れないかと思って……」

泣きそうな顔のカーレンに、恩は慌ててフォローする。

「あ、いやっ、大丈夫だよ！ 大きな町じゃないし、村の人ってみんな顔見知りっていうから、みんなで探せばすぐ見つかるって！だからさ、そんな顔しないでよ。ね？ ね？」

恩が必死な様子で言うと、カーレンはほっとして笑みを浮かべた。
「はい」

カーレンの笑顔を見て恩も胸を撫で下ろす。此武がつまらなそうに鼻を鳴らし、腕組みをする。

「落ち着いたか。ならば二手に分かれるぞ。オレ様と千咲、カーレンは北側。赤ボケ小僧と守人もりびとは南側を探索せ」

「赤ボケ小僧ってなんだよおっ」

「赤髪のボケたマヌケ小僧だ。文句を言うならしばらくぞ」

「もう殴ってるじゃんっ」

左頬を押さえて訴えたが、此武は聞く耳持たずだ。

「見つけたらすぐに呼べ。いいな」

「呼べて…どうやって？ 此武はヴァモバ持っていないよな？」

「オレ様の名を念じろ。貴様の声ならばどこにいても届く」

「ふうん」

テレパシーみたいなものだろうか。五人は村の入り口で二手に分かれた。言われたとおり、恩は依織と連れ立って村の南方に向かう。都市部と違ってのどかだ。さっきはああ言ったが、果たして依頼人は見つかるだろうか。何せ手がかりがほとんどない。

それに、不思議と村人の姿が見当たらないのだ。気配はあるが、外に誰もいない。みんな家の中に閉じこもっているのだろうか。

道に落ちている枯れ葉が風に舞う。宿命を紡ぐ者の服は半袖なのに、不思議と寒さをあまり感じない。これもこの服の能力だろうか。

「のどかですねえ、めーちゃん」

「うん、そうだね」

それきり会話はなく、無言のまま二人は歩いている。何を話せばいいのか、恩は戸惑っていた。思えば初めて会ってからだいぶ経っている。

初対面が確か秋休み明けで、今が十一月初頭だから、約二週間振りというところか。

（どうしよう、このまま何もしゃべらないっていうのも変だよね。でもまだ会って二回目だし、何を話せば…）

思い悩んでいると、依織の方から話しかけてくれた。

「会うのはお久し振りですよね、めーちゃんにとっては」

「へ！？ ああ、うん。そうだね…二週間振りくらいかな」

「“外”ではそんなに時間が経ってたですか」

「？ 外って…」

小首を傾げて依織を見ると、彼女は立ち止まった。恩も合わせて歩みを止める。

追い風が髪をたなびかせ、依織は髪を手で押さえながらわずかに空を見上げた。遠い^{あきぞら}旻。

「めーちゃん。空は青いですね」

「え？ うん…」

「晴れた日は青い空。曇りの日は灰色の空。雨の日は暗い空。それが、普通です」

「???」

依織は何が言いたいんだろう？　なんだかこのちぐはぐな感じといい、ほわんとした雰囲気といい、依織とカーレンは似ている。

「そしてそれを見るのは珍しいことではないでしょう。でも——イオはこの空を見るのはとても久し振りなのですよ」

「え…？」

いつからだろう、依織の声はさっきまでと違って明るく弾んでいなかった。

妙に落ち着いていて、でも落ち込んでいるわけではなく、静かで淡々と事実だけを語っているような。

時折見える依織の横顔は、笑顔ではなかった。沈黙が降りる。木枯らしがざあっと音を立て、枯れ葉が空に舞い上がる。

ひらひらと落ちてくる枯れ葉を手のひらで受け止め、依織はそれをじっと見つめると、そっと瞑目し、枯れ葉を風に流した。

くるりと振り返った依織は、いつもの彼女だった。

「もう秋も終わりですね！　この年は冬将軍が来るでしょうか」

にこにこ依織は笑っている。けれど、恩は小さな引っ掛かりを覚えた。明るい彼女だが、何か影のようなものがある。寂しさを隠している、そんな影が。

依織はただの人間ではない。自分と同じ特殊な宿命を持った^{タイム}プロテクターの守人だ。それが依織の心に影を落としているのだろうか。

再び歩き出した依織は明るい声で言った。

「さてっ、どうやって依頼人を探しましょうね」

「妖怪ってこと以外に何か情報ないかなあ。俺も依頼の手紙見てくればよかった」

さっきのことは触れないでおく。今はその時ではないと思ったからだ。

触れていいことか分からないし、時が来ればいずれ知ることになるだろうという予感のようなものがあつた。だから今は依頼のことだけ考えよう。

「お手紙の内容だったら、イオ覚えてるですよ」

「ほんと？ よかったー」

「えーっとですね、【一族に伝わる薬草が足りなくて困っています。冬が来る前に貯めておきたいのですが手が足りません。よろしければ井ノ山の一井村まで来て下さい。】だったです」

「うーん、ほんとに依頼内容と村の名前だけだなあ。片っぱしから薬草を欲しがってるヒトはいませんかって村人に訊くしかないかな……」

だが、その肝心の村人に出会わないので、一軒一軒訪ね歩くしかないか。恩が腕組みをして困ったように首を傾げた時だった。

「そこのにちゃんたち、村の外から来たのか？」

背後から子供の声で尋ねられた。振り返ると、小犬くらいの大きさの狸が二本足で立っていた。

「あ……うん、そうだけど」

「やっぱり！ 村じゃ見かけないもんな、そんなハデな服」

二人が着ている服は黄色や緑のパステルカラー。村人を一度も見かけていないが、声をかけてきた子狸が着ているのは紺の着物。たぶん他の村人も似たような色合いの服を着ているのだろう。

「めーちゃん、この子に訊けば依頼人が見つかるかもですよ」

「そうだね。あの子、この村に薬草が足りなくて困ってるヒトいない？ 俺たちはそのヒトと呼ばれてきたんだ」

恩が子狸と話していると、少し離れたところに立っている家の窓

から視線を感じたので、依織はちらりとそちらに顔を向けた。

「葉草？ うーん、もしかして美麻里みまりばーちゃんのことかな」

「美麻里ばーちゃん？」

恩は気づいていないのだろうか。窓からは大きな狸がこっそりとこちらを窺っている。心なしかその視線は鋭く、警戒心というよりも敵意がこもっていた。

「美麻里ばーちゃんは体弱っててさ、葉草で作った薬をいつも飲んでんだ。その葉草は冬は生えないから、その前にたくさん集めておきたいんだけど、今年はあるまり手に入らないって言ってた」

依頼内容と合っている。運良く依頼人が見つかったかもしれない。依織の視線に気づいたのか、大狸がさっと身を隠した。

「そのヒトに会いたいんだけど、どこに住んでるの？」

「あの川の向こうだよ。連れてったげる！」

「ありがとう」

子狸はうれしそうに、恩の腕を引っ張っていく。

「依織ー？ 置いていっちゃうよー？」

「！ はいです」

恩に呼ばれて、依織は周囲の空気を気にしながらも駆け出した。離れていく三人の後ろ姿を、複数の目が家の中から睨みつけていた。

二人は子狸についていく。川にかかった小さな橋を渡り、少し歩くと生垣に囲まれた萱葺き屋根の家があった。庭には栗の木と柿の木がある。

二人は子狸にお礼を言い、家の中に入った。

「ごめんくださいです」

「すみませーん。高科FWの者ですが、美麻里さんはいらっしゃいますか？」

そろりと木の引き戸を開け、中を窺う。家の中には誰もいない。広い土間は台所にもなっていてかまどがある。地面より高く作っ

である居間の真ん中には囲炉裏があり、細い煙が立ち上っていた。そして、その向こうにある黒みがかった灰色の丸い物体。

「……何あれ」

恩がぼつりと呟くと、その物体がもそもそと動いた。

「うわっ」

「う、動いたです！」

仰天する二人。その時、開けっ放しにしていた戸から茶色い毛の狸が駆けこんできた。

「ばあちゃん！ 魚獲ってきたんだな！ あれ？」

聞き覚えのある声に恩はドキッとした。なんだか振り向きたくない。

「どちら様なんだな？」

十歳児程度の大きさの狸は魚籠びくを両手で抱え込んで問いかけてきた。恩は棒立ちのまま無言で、依織が代わりに応じる。

「高科FWから来たです。薬草探しの依頼で」

「え……」

一瞬、狸の表情がこわばる。背中を向けていた恩は気づかなかつたが、依織は気づいた。だがすぐに狸は笑顔を作る。

「ああ、そう言えばあちゃんが頼んでたんだな。来てくれて助かったんだな。ところで」

笑顔の狸は恩の方を見て、

「そこにいるの恩くんなんだな？」

「ぎくっ」

このしゃべり方は間違いなく玲汰だ。彼は妖狸族だし…まさか本当に知り合いに会うとは！

（俺がどこでバイトしてるかは秘密なのに！ ここはなんとしても別人になりきらねば！！）

恩は背を向けたまま素早くフードをかぶってごまかす。

「いいえ、ワタシ、恩くん違いまーすアルヨ」

「え…でも、その赤い髪…」

「違うであります、拙者は恩ではないでござんす！」

「はあ…人違いなんだな」

かなり疑い気味ではあるが、とりあえず納得してくれた玲汰にホッとする。

（あー、よかった、バレなくて。上司があのだ慢ドSちびっ子の此武なんて知られたくないもんな。ましてやあいつから受ける仕打ちの数々を…）

「誰が傲慢ドSちびっ子だ」

突然、下から強烈なアッパーを喰らった。天井を突き破って空高く吹っ飛んだ恩は、栗の木の枝に引っかけりながらぼてりと地面に落ちた。

「め、恩さんっ」

此武と一緒に空間移動してきたカーレンが恩に駆け寄る。結局、恩の正体はばれてしまったのである。

「恩くんのバイト先って高科FWだったんだな」

人間の姿に変化した玲汰は恩たちを家に招き入れた。人数分のお茶を注ぎながら、玲汰はにこにこ笑う。

あの謎の黒い物体は実は寝ていた大狸、つまり美麻里さん本人だった。

体を起こした美麻里さんは大人のクマほどの大きさで、額に大きな刀傷がある。

恩たちは囲炉裏いろりの周りに座った。此武だけは壁に寄り掛かってあぐらをかき、その傍らに千咲が正座する。

「なんとなく嫌な予感はしたんだ。玲汰は妖狸族だし、村に住んでるって言ってたし、だからって、いくらなんでも連続で学校の知り合いに見つかるなんて出来過ぎじゃない!？」

頭を抱える恩に、玲汰は苦笑する。

「他にも誰か知り合いに会ったことあるんだな？」

「うっ……どこぞの眼鏡狐に」

さかきばる
「榊原会長なんだな？」

「わああああっ、思い出したくないことまで思い出しちゃた！！」

玲汰！ このこと絶対に誰にも言わないでよ！？」

涙ながらにすがりつく恩。玲汰はにっこり笑った。

「高科FWでバイトしてること？ うん、誰にも言わないんだな」

「ああありがとうございます」

ばれたのがまだ玲汰でよかった。他の人だったらいろいろなからかわれるに違いない。特に亜穂とか。

「おい、豆狸。依頼のことを詳しく話せ。オレ様たちはそのためにわざわざ出向いてやったのだからな」

「ちよっ、此武！」

豆狸とはひどい言い草だ。だが、玲汰は気にしていないようで、逆に謝っている。

そりゃあ長い時を生きてきた戦神の此武から見れば、数百年しか生きていない妖狸など赤子のようなものだろうが、友人を悪く言われるのは非常に気分が悪い。

「手伝ってほしいのは、マダチ草っていう薬草集めなんだな。その草がないとばあちゃんの手が作れないんだな」

「美麻里さんはお病氣なんですか？」

カーレンが問うと、美麻里さんはズズズ、とお茶を飲んで一息ついてから言った。

「うんにゃ。わしももう歳でよお、体のあっちゃこっちゃにガタがきとるんよお。じゃけえ、痛み止めだわな」

「まあ、ガタさんがいらっしやると大変なんですねえ」

ずれた発言をするカーレン。美麻里さんはぶはーと大儀そうにため息をついて「神族のおみやーさんじゃ分かるめえ」とお茶を飲む。種族が違うとはいえ、さすが同じ人外。カーレンが神族だと一目で見抜いたようだ。

「マダチ草は秋に採れるんだけど、今年は猛暑だったでしょ？ そ

の影響であまり育っていないんだな。

だから数が少なくて里の近くに生える分だけじゃ足りないんだな。それで他の山にも採りに行きたいんだけど、オイラだけじゃ難しくて…」

「そっか、それで人手が欲しいんだな。分かった、手伝うよ、玲汰」

「ありがとうなんだな、恩くん！」

「豆狸、人手が足りないと言うが、ならばこの村の連中を使えば済むだろうが。なぜわざわざうちに依頼した」

じろりと睨まれ、畏縮する玲汰。彼も本能で此武が何者か察しているのだろう。

「そ、それは、その…」

口ごもり、それきり黙りこんでしまった玲汰に、恩は目をしばたかせた。理由に気づいているらしく、此武は「まあいい」とそれ以上追及はしなかった。

「どこぞの赤ちようちんが『手伝う』などと抜かしたしな、すぐに出るぞ」

六人はマダチ草を求め、山の中に入った。井ノ山は三つの小山から成り立ち、それぞれ井上、井中、井下と言う。六人が向かったのは、一井村がある井上山の隣の井中山だ。

手分けして探すことになり、恩はカーレンに声をかけようとしたが、寸前で此武に止められた。

「恩、貴様は守人で行け」

「へ！？　なんで？」

「オレ様の命令に従えんと言うのか」

「うう…：わ、分かったよ」

射抜くような眼光に恩はそう答えるしかなかった。今日はやたらと依織と組まされる。嫌なわけではないが、なぜだろう？

考えてみれば、依織が高科FWに来ていた理由も知らない。仕事

だと言っていたが、手伝いをするのが仕事だなんて、どういふことだろうか。

などとあれこれ悩んでいると、依織が恩の手を取った。

「では行きましょうです、めーちゃん♪」

「ふえ!?!? あわわ、はいっ」

恩はぱつと赤面する。依織に手を引かれるまま、恩は此武たちと別れた。

第10話 永い時を生きること

マダチ草は日がよく当たる木のそばに生えるらしい。たいてい三つ葉で、葉っぱの先が内側に折れ曲がっているとのこと。

恩と依織は日当たりのいい場所を探し、マダチ草を探す。またも二人きりで、恩の方はあまり落ち着かない。女の子と二人きりなんてほとんど経験したことがないのだ。

それに、さっきの依織の話も少し気になっていた。いや、依織自身が気になっている。

自分と同じ特別な宿命を持つ少女。時空を守る、たったひとりの人間。

（んー、パートナーになるなら、お互いのこといろいろ知ってた方がいいよな。依織は宿命を紡ぐ者のことも少しは知ってるみたいだし…）

パートナーということは、共に行動することも多いだろう。なんの会話もないのもさびしいし、依織のことを知るためにも、恩は依織に尋ねてみることにした。

「あ、あのさ、依織」

「はいです？」

「えっと…依織は時空の守人なんだよね？
タイムプロテクター 時空の守人ってどういうことするのか、訊いてもいい？」

マダチ草を探す手を止めずに、依織は「いいですよ」と笑った。
タイムプロテクター

「時空の守人は言葉そのままの意味で、時空を守ります。時空とは様々な世界や時間のこと。時間は過去、現在、未来。空間はこの人間界や天界、魔法界などの六界です」

「あ、六界ってカーレンから聞いたことあるな。えーと、確か他には…神界と魔界と、冥界だっけ？」
じくうかいろう

「正解です♪ 六界はすべて、時空廻廊じくうかいろうによって繋がっているのですよ。そしてその時空廻廊を管理、保全しているのが時空神ときがみの神殿

にいらっしやるジルティリードさまなのです。イオはジルさまのお手伝いをするのがお仕事なのですよ！」

木の根元にマダチ草を見つけ、依織は摘み取りながら楽しそうに笑う。恩もきよろきよろと辺りを探してみる。

「へえー、そうなんだ。すごいね」

「他にもジルさまは六界すべての歴史も管理しているのですよ。歴史が狂わないように調整する、これが一番大変なのですよ」

「歴史って、未来も？」

「もちろんです。過去や現在が変われば未来は変わってしまうのです。だから歴史が変わってしまったように、ジルさまはいつも六界を見守ってるです」

それは途方もない話だ。この世界だけでも多くの人間がいる。

それらが歴史を変えてしまわないように細かく見続けていたら、いくら神でも疲れてしまうのではないだろうか。

（あ：だから依織がいるのかな）

時空神を手伝うのが仕事だと言っていたし、やはりジルティリード一柱ではかなりの負担がかかるのだ。

ようやくマダチ草を見つけ、摘み取る恩。結構探し回っているが、まだ数本しか見つかっていない。本当に数が少ないようだ。

「歴史とは素晴らしいものです。様々な人間や種族の歩んできた道、文化、思想、それらを知るための手掛かり。それが歴史です！」

依織が何やら熱っぽい口調で語り始めた。恩がそちらを見ると、依織は手を組んでうつとりとした表情をして立っている。

「残された資料の数々から解る過去の出来事。それはいわば一つの物語です！ 様々な思いのもとに紡がれる物語。ああ、心揺さぶられるですっ。歴史とはなんて素晴らしい壮大な過去からの贈り物なのでしょうっ？」

目を輝かせている依織に、恩はたらりと汗を流した。なんだか想像していた彼女のイメージと違う。

（も、もしかして：依織って歴史マニア…？）

恩が抱いていた依織のイメージは、おっとりしていてちょっと幼さの残るかわいらしい女の子、だ。

（まあ、会ってそんなに経ってないし？ 第一印象だけでは分からないことってあるしね…でもあんなに熱い子だったのかあ…）
だいぶイメージが崩されたが、このまま放っておくと薬草探しがおろそかになりそうだ。

「あのさ、依織。時空神の手伝いって、具体的にはどんなことするの？」

「はわっ。ご、ごめんなさいですつ、トリップしてました〜！」
我に返り、顔を赤くする依織。恥ずかしそうな笑顔を見ると、やつぱりかわいいなあと思ってしまう。

「えと、ジルさまのお手伝いのことですよねっ。たいていは歴史に変化がないか、いろんな時空を見て回るのです。

あとは、他の時空に行きたいという人たちを送ってあげることですかね。他の時空に行くには時空神の神殿ときがみを通らないといけないのですよ。

まあ、神族さんや魔族さん、魔法界に住んでいる一部の方々は時ときがみ空神の神殿を通らなくても自力で移動できるみたいですけど」

「六界かあ。それについてってさ、俺も知ってた方がいいこと？」

「そうですね、その方がいいかもです。宿命フエイトスピナーを紡ぐ者が関わるのはこの人間界だけではないですから」

「ふうーん」

以前、カーレンから聞いたこの時空以外にある五つの世界。

十七属の神々やその他の神々、聖獣などがいる神界。

天帝とその子供である斂子フイリン、天帝が創り出した天使がいる天界。
神族と敵対している魔族や堕神などがいる魔界。

神族・魔族と人間の混血種族アトムスや、鳥獣の姿をした種族がいる魔法界。

全ての世界の死者が辿り着き、転生の時を待ったための場所、冥界。
天界・魔界は事実とは異なるとはいえ、神話や物語で知っている。

神界・冥界は天界と混同されて神話などに出てきていたが、魔法界はまったく存在を知らなかった。

「魔法界……って、なんかファンタジー小説に出てきそうところだよね。魔法って本当にあったんだ」

「正確には魔法術デイルというです。神族と魔族が使える術で、人間の異能は魔法術デイルが変化したものなのですよ」

「えっ！ そうなの！？」

一部の人間に生まれつき備わっている特殊な力——異能。そのルーツは多くの学者が調査しているが、まだはつきりしていないはず。「大昔、リーフェには人間だけでなく、現魔法界の住民であるジョアロトさんたちも住んでいたです。でも、ジョアロトさんたちと人間との間で戦争が起こってしまい、ジョアロトさんたちはリーフェを去って魔法界に移住したのです。」

けど、ジョアロトさんみんながリーフェを去ったわけではなくてですね、何人かリーフェに残った人たちがいたです。その残った方たちの子孫が異能者らしいです」

「そうだったんだ……」

「あ、魔法界に移住してからは、ジョアロトではなくテュレーゼミアルって呼ぶみたいですけどね」

呆氣にとられる恩。まさか異能のルーツがそんなものだったとは。神族や魔族と人間の混血児がジョアロトで、その子孫が異能者。

（てことは、俺の先祖もジョアロトで、俺は神族か魔族の血を引いてるってこと？）

これは重大な発見だ。おそらく世界中の誰も知らない異能者のルーツを知ってしまった。だが、これを誰かに話したところで信じてもらえるだろうか。

自分は学者でもないし、自分で調べたわけでもないから、根拠だってない。

「って、依織はなんでそんなこと知ってるの？」

「ジルさまから聞いたのです。時空の守人タイムプロテクターとして六界のことを知っ

ている必要がある、と、六界の歴史をたくさん、たくさん教わったです。歴史が狂ってしまったように管理するのが、イオたちの役目ですから」

「そっか、時空タイムプロテクターの守人って大変なんだね」

長い、多くの歴史を覚えるなんて、自分には難しい。それを守り続けるなんて。時空タイムプロテクターを守るのが、時空の守人。

（俺の方はどうなんだろ。一応、此武には何をするのか聞かされたけど、あんまりよく分かってないんだよな）

葉草を探しながら、恩はぼんやりと此武の言葉を思い出す。

『生あるものには必ず運命がある。いつどこで生まれ、誰と出会い、別れ、死ぬのか。それは生まれる前にすでに決められている。すべての生き物が、その運命通りに生き、死んでいく』

『だが宿命さだめは違う。宿命さだめは『定められた運命』。どんなことがあるうとも決して変わることはない。運命は誰でも変えられるが宿命さだめは変えることができない。だがな、貴様ならばそれができる。貴様はこの世で唯一、宿命さだめを動かすことができる人間だ』

決して覆らない、変えることのできない運命が宿命さだめ。けれど、自分だけはその宿命さだめを変えることができる。それが宿命フエイトスビナーを紡ぐ者。

『宿命さだめは自然な流れに任せても必ず定められた通りになるが、いくつかの選択肢があるのだ。他の誰にも、本人でさえもその選択肢を選ぶことはできないが、貴様だけは選択肢の中から一つを選ぶことができる。それが宿命さだめを動かすということ。』

運命を導くというのは、選んだ選択肢になるように、その宿命さだめを持つ者を動かすことだ。貴様が誰かと出会ったり、助言をすることで運命が選んだ宿命さだめへと流れていく。そうして宿命さだめを紡いでいくのだ』

『我々、神にとって、人間が生きる様は物語のようなものだ。すでに決まっている結末までをただ眺める。これまで多くの人生を見てきた。だが、それだけでは物足りなくなれたのだろう、あの方々は』

すでに定められた運命に“フェイトパス”を導く。此武の言う“あの方々”が創った“プロット”通りに。

説明をされてもいまいち実感がわかないし、具体的に何をすればいいのやら。それにまだ謎がある。“フェイトパス”“あの方々”“プロット”“終焉の刻^{とき}”：

考えながら探しているうちに、だいぶ日が傾いてきた。だが、カゴの中のマダチ草はあまり増えていない。

美麻里さんのことを思えばもう少し探した方がいいだろうが、日が暮れては見つけにくいだろう。恩は離れたところでマダチ草を探している依織のもとに行き、そろそろ戻ろうと提案する。

依織もそうしようと思っていたようで、二人は待ち合わせ場所に帰ることにした。

「ねえ、依織。質問ばかりで悪いんだけどさ、フェイトパスってなんなの？」

「フェイトパスとは宿命の鍵を持つ者：分かりやすく言うと、キーマンですね。めーちゃんはこの先、フェイトパスと出会ったり、フェイトパスをプロットの通りに誘導してあげるです」

「プロットって、あの方々が創ったシナリオ：なんだよね？ その、あの方々って誰？ あの此武が敬意を示すほどだから、神族の偉いヒトかなーとは思っただけど」

そう言うと、依織は大きな目を丸くした。

「はうう、知らなかったですか？ うーん、これは言っちゃっていいんですかねえ？」

「え、そんなに言っちゃあまずいヒトなの？」

「神族なのは確かですよ。でもですね、イオが軽々しく口にしていいのかどうかは…」

言い淀む依織。なんだ、まさかそんなに偉いヒトなのか？ そりゃあ、あの高飛車な此武が敬語を使うくらいだ。

此武、というか戦神クロムが神族の中でどれほどの地位にいるのか知らないが、あの態度からしてたぶんそれなりに高い地位にいる

のだろうから、そんなクロムが敬意を表す神族と言えば：

（誰だろう？ 神族って上下関係あるのかな。基本的に十七属の神々は神族の中では偉い：人間で言う貴族みたいなものだし、戦神のアスラオ一族は十七属だから上位神、だよな？

でも十七属の中ではどうなんだろう。属によって階級が決まってるのか、それとも年功序列とか？）

「いずれ話すですよ。それか、クロムさまに直接聞いてみるとか」

「ええー、此武に？」

拳か蹴りの三発や四発耐えれば教えてもらえるかもしれない。：嫌だなあ。

「んー、まあ、それは置いといて、終焉の刻っていうのはさ、あの方々が創ったプロットのエンディングのこと？」

「はいです。全てのフェイトパスを導き、紡ぐことで迎える物語の結末。それが終焉の刻。普通の人間では永らえることのできない、ずっとずっと遠い未来です」

「そっか。終焉の刻を見届けるまでが仕事だから、その時まで俺たちの仕事は終わらないってわけかー」

普通の人間では、ということは百年か二百年くらい先だろうか？それまで自分の寿命が持つといいが。

天寿がいつなのか知らないけれど、自分は不老長寿である白鳳だから、百五十年やそこらならいけそうな気がする。

「でも、依織は普通の人間だよな？ 俺だって長生きできるか分からないけどさ、その終焉の刻まで生きていられるのかなあ」

何気なく零した言葉だったが、依織は足を止め、くっと小さく唇を噛んだ。隣を歩いていた依織がいなくなり、恩は後ろを振り返った。

「イオなら大丈夫なのですよ」

恩が振り返った時にはもう、依織は笑みを浮かべていた。あの、どこか寂しそうな笑顔を。

「――イオの時間はもう、すでに止まってるですから」

「…え？」

恩は軽く目を瞠る。時間が止まっている？　どういう意味だろう。依織は伏し目がちに、マダチ草の入ったカゴをきゅうつと抱きしめた。

「めーちゃん。イオはさっき、空を見るのはとても久し振りだと言ったですよね」

「ああ…うん」

思いの他、依織の声は穏やかだった。いや、そう聞こえているだけだろうか。恩は奇妙に鼓動が早まるのを感じた。

「それは、言葉通りの意味です。イオは、空を…いいえ、人間も、動物も、この広い世界も、見るのは久し振りだったのです。イオはずいぶん前から、あの神殿を出たことがなかったですから」

「……」

「イオは…タイムプロテクター時空の守人は“さだめ宿命の刻”しか神殿から出てはいけけないのです」

「宿命の、刻？」

「プロットの分岐点や、重要なイベントとでも言うですかね。イオはその時にしか、この世界との接触を許されないのですよ」

さくさくと落ち葉を踏みながら、依織はゆっくりと歩み寄ってくる。こんな音すらも、最後に感じたのはずいぶんと前のことで。

タイムプロテクター

フュイトスピナー

「時空の守人と宿命を紡ぐ者は、終焉の刻を見届けるまで存在して

いなくてはいけませんが、さっきも言ったように、終焉の刻までは長い長い時間を要するので、普通の人間は生きていられないです」

恩の隣で、依織は懐かしむように空を見上げた。

「だから、イオは終焉の刻まで存在できるように、ジルさまに体の時間を止めてもらっているのです。イオがこれ以上、年を取ることはないのですよ」

年を取らない、つまりは不老の体。老化することがないため、死ぬこともないのだ。

恩は啞然として、ぽかんと口を開いた。不老の存在と言えば、神

族か魔族、人間では白鳳一族くらいなもの。それ以外で永遠に不老であるなんて。

「そ、そっか。時間を操る時空神だもんな。人間の成長を止めるくらい訳ないのか。じゃあ、依織はこの先ずっとその姿のままってこと？」

「はいです。ずーっと一七歳のままですよ」

「うえ！！？」

にこっと笑った依織に、恩はぐりんっと顔を向ける。衝撃の事実を知った。依織は中学生くらいだろうと思っていたのだが、まさか自分と同じ年だったとは！

（ど、童顔？）

しかし、そんな恩も童顔で、周囲からは中学生程度にしか見られないということに自覚していない。

「お、同年だったんだ」

「はいです。めーちゃん、イオのこと中学生だと思ってたんじゃないですか？」

「ぎくんっ。あ、いや…年下かなあとは思ってたけど」

凶星を指されて慌てる恩に、依織はくすくすと笑う。

「ふふ。めーちゃんだって大差ないですよ？ でも、イオはめーちゃんと違って不老の一族ではないですから、ずっとこの世界で生きてはいられないのです」

「え？ なんで？」

「さっ、早く戻りましょうです。暗くなつてからの山歩きは危ないですよ？」

笑顔ではぐらかされてしまった。だが、訊いてから思い当たった。人外でも白鳳でもない普通の人間が、長い間まったく年を取らずにいたら周囲の人間はどう思うだろうか。

不老長寿だと知れ渡っている白鳳でさえ、奇異の目で見られることがあるのだ、言わずもがなだろう。

（触れちゃいけないことだったよな。あー、俺のバカ！）

ぽかぽかと自分の頭を殴る恩。依織がこれまでどんな人生を送ってきたのかは知らないが、常人である彼女は、もしかしたら時空の^{タイムプロ}守人^{テクター}になったことで、何かしらつらい思いをしたかもしれない。パートナーとして彼女のことを知っておくべきだろうが、なるべく傷に触れてしまわないようにしなければ。

先を行った依織に呼ばれ、恩は気合を入れてから駆け出した。

第11話 新しい時代へ

此武グループと合流した恩たちは、美麻里の待つ家に戻ってきた。美麻里は集められた薬草を見て、しわだらけの頬を一層しわくちやにして笑った。

「おーおー、よくこれだけ集められたもんだあね。ありがとさん。これだけありゃあ十分さね」

美麻里は恩たちのために、山菜鍋を作ってくれていた。ちょうど体も冷えてきていたので心遣いがあった。

「おいしー♪」

「素晴らしいお味ですわ」

「あつたまるです」

「たぁんと食べんしゃい」

此武と千咲以外のお椀にご飯をよそいながら、玲汰がうれしそうに笑う。

「こんなに大勢でご飯食べるのは久しぶりなんだな」

「ほーいえば：ごくん、玲汰はここで二人暮らしなんだっけ？ 大変だろー」

「まあ：でも、ときどき近所の子が手伝ってくれることもあるし」

「そうそう、この家にも子狸が案内してくれたんだよ。ね、依織」

「はいです。紺色の着物を着ていて、茶色の体毛なんですけど、毛先だけが白かったですね」

「きつと陽二郎くんなんだな。あの子とは昔からよく遊んでるから」
「でも、この村の大人さんはイオたちのこと、歓迎してはいないようですね」

ピクリと玲汰が手を止めた。「そうだなー」と恩は首を傾げる。
「視線は感じたけど、よそ者を警戒してるだけだろうなーと思って気にしてなかった」

「ふん、当然だろう。基本的に人外のみで構成される村や団体は、

他の種族との交流を好まんからな」

輪から外れて壁に寄り掛かっている此武が淡々と言う。

「村の雰囲気からして、大人連中は同胞以外の種族、特に人間には敵意を抱いている者が多いようだな」

「敵意って…そこまで？」

不穏な空気に、恩はお碗を片手に此武に向き直る。

「その豆狸が葉草摘みを他の連中に頼まんのも、それが原因だろう」

「へっ？」

恩が玲汰を振り返ると、玲汰は俯いて両手を膝の上で握りしめていた。

「玲汰？」

「……オイラが悪いん、だな」

「？」

「オイラが人間の学校に行ったから……」

玲汰とは高校入学後に知り合った。それまでの経歴は聞いたことがない。ただ、学校に通うのは初めてだと聞いたことがあるだけだったのだが…

「本当は、オイラが人間の学校に行くのは反対されてたんだな。この村では数十年前から人間との交流を断っていて、村の中だけで支え合ってきたんだな。」

だから人間の町には極力近づかないようにしてたんだけど、オイラはずっと人間の暮らしが気になって、どうしても人間の学校に通ってみたいかったんだな。それで、みんなの反対を押し切って通ってたんだけど…」

「それで村の大人たちは、玲汰をさけるようになったのか」

「…うん」

力なく頷く玲汰。恩は食べかけのお碗をグッと握りしめると、だんっ、と床の上に置いた。

「そんなのひどいじゃないか！　いくら人間との交流がなかったか

らって、村八分にするなんて！」

恩の怒鳴り声に此武は、まさに言葉通りだな、と心中のみで呟いた。

「なんで人間の学校に行ったくらいで、仲間外れにされなきゃいけないんだよ…」

「村の住人だけで支え合っていくことがこの村の信条で掟だからなんだな。それを破ったオイラは裏切り者だから」

「だからって、同じ仲間なのに困ってるのを放っておくなんて!…」

「もうやめろ、恩」

静かな声に恩は此武を振り返った。此武は腕組みをし、目を閉じていた。

「我々人外は多くが同胞のみで問題を解決するもの。他種族に介入するのも、されるのも嫌う。この村の問題はこの村で解決せねばならんのだ。下手に口出しすれば余計にこじれるぞ」

此武の言うことはもっともかもしれない。人外には人外の、人間には人間の事情がある。他人に口出しされたくない気持ちも分かるけれど。

「それでも…っ、このまま見て見ぬふりをするなんて、俺にはできないよ!!!」

「恩さんっ?」

立ち上がった恩はそのまま家を飛び出した。遅れてカーレンがその後を追う。依織はのんびりと二人が出ていった戸に顔を向けた。

「めーちゃんはどこに行くつもりですかねえ?」

「おおかた、村の長にでも直談判するつもりだろう。まったく、人間とは本当に愚かな生き物だな。あんな小童一人が抗議したところで何もならんだろう。むしろ状況を悪化させるに決まっている」

不機嫌そうに顔をしかめる此武。玲汰は苦笑して小さくため息をついた。

「恩くんは、優しいんだな。困ってる人や、他人と距離を置いている人を見ると、放っておけなくて」

初めての人間の学校に戸惑っていた自分に、最初に声をかけてくれたのも彼だった。

『君、人外だろ？』

まったく気後れすることなく。

『ああ、俺、人外か人間かなんとかなく判るんだよね』
子供のように無邪気な笑顔で。

『困ったことがあったら遠慮なく頼っていいからさ！』
手を差し伸べてくれた。

「恩くんにとっては、人間とか人外とか、そんなの関係ないんだな」

玲汰は微笑むと、ぽん、と狸の姿に変化した。

「恩くんを追いかけるんだな」

「イオも行くです」

ごちそうさまでした、と礼儀正しく手を合わせて、依織も玲汰と一緒に家を出る。ややあって、此武は小さく舌打ちをして腰を上げ、千咲とともに消えた。

残った美麻里は、お椀に鍋の野菜をよそい、ズズズと音を立てて飲み干した。

村の中を恩は一心不乱に駆けていた。村人たちが何事かと目を向けてくるのも意に介さず、
むらおさ村長の家を目指して突っ走っていく。

「恩さんっ、長さんがどこにいらっしゃるのかご存じなんですか？」
猛スピードで走る恩には足では追いつけないので、カーレンは翼はねを出して寄り添うように飛びながら尋ねた。

「統治者とか権力の強い人っていうのは、中心部か奥の方にいるって決まってるものなんだよ！」

「そうなんですか。でも、恩さん。長さんに会ってどうするつもりですか？」

「決まってるだろ。玲汰を仲間外れにするのをやめさせるんだ！」
前だけを見据えて言う恩。カーレンは恩の真剣な横顔を、憂いの
含んだ目で見つめる。

他人の痛みを自分のことのように感じ、助けたいと願う。ひたむ
きで純粋で力強い、それが恩の優しさ。それは尊いものだけれど。
痛みを感じ、受け入れてしまうからこそ、自分を追い詰めてしま
うような気がする。

受け入れても、包み込む^{つよ}勁さがなければ、その重みに耐えきれず
目の前の現実から逃げ出してしまう。

恩が実家を飛び出したのも、そういった恩の性格ゆえだろう。

（やっぱり、恩さんは優しい方です）

そんな優しくも弱い恩の力になりたい――。カーレンはいつから
かそう思うようになっていた。

風神と雷神の話をした時、神の存在を信じない人が多いのは哀し
いと言っていた恩。あの時、なぜだかともうれしくて。今も気づ
けば恩の後を追っていたのだ。

不思議と恩のそばにいるのが当たり前になっていて、できること
ならこのままそばにいて、支えることができたらと。

（なぜなのでしょう？ 恩さんが優しいから、でしょうか？）

カーレンがぼんやりと考えていると、進行方向に空間移動してき
た此武と千咲、そして千咲に抱え込まれた玲汰と依織が現れる。

しかし、気づいても急には止まれない。恩がぎょつとした直後、
此武の肘が恩の腹に思い切り叩き込まれる。

「ごふおっ――！」

「イノシシか貴様は。闇雲に走り追って」

激しい衝撃を受け、恩は口から泡を吹いて地面に倒れる。カーレ
ンは体を反転させて恩に駆け寄ろうとしたが――

「めーちゃんっ」

ひと足早く依織が恩の傍らに膝をついた。恩の体を支える依織。
カーレンは目をしばたたかせて二人を見つめた。

「痛い痛い飛んでけーですっ」

「な、内臓出るかと思った……」

依織がスカートからハンカチを取り出し、恩の口元を拭いてやる。恩がぷるぷると手を震わせて依織の袖をつかんだ。

カーレンは二人を見て、わずかな寂しさを覚えた。自分ではあんなふうに恩に触れられない。触れれば翼が出てしまう。

人外しかいないこの村ならばいいが、町中などでそうなれば注目を浴び、恩に迷惑をかけてしまう。

（わたしでは、恩さんを支えることはできません。けれど、依織さんなら）

ああして、近づいて、触れて、寄り添うことができる。同じ人間であり、同じ特別な宿命を持つ彼女なら。

（恩さんの力になりたいのに、わたしではダメなのでしょうか）

二人を見つめていると、恩がカーレンの方を向いた。

「心配かけてごめんな、カーレン。でも大丈夫だからさ」

笑顔を見せる恩。カーレンの胸にあたたかいものが宿る。カーレンは微笑んで、ふわりと恩のもとへ飛んでいった。

「恩くん、村長に会いたいんだな？」

玲汰の問いに恩は強く頷いた。

「じかに話し合いたい。俺はよそ者で口出しできる立場じゃないけど、玲汰の友達だから、友達の力になりたいんだ」

てらいもなく言い切る。少し気恥ずかしいが、はっきりと友達だと言ってくれる恩の気持ちがうれしい。玲汰は頷いて「じゃあ、ついてきてほしいんだな」ときびすを返す。

「オイラが村長のところまで案内するんだな」

「うん！　ありがとう！」

「お礼を言うのはこっちなんだな、恩くん。オイラのために一生懸命になってくれてありがとうなんだな」

「友達だからな。当たり前だろ！」

にかっと思う。すると、此武が後ろから頭を踏みつけた。

「へらへらするな気色悪い。貴様は這いつくばって地面でも舐めていろ」

こんな状態で大丈夫なのだろうか。玲汰はちょっぴり不安になった。

村長のところに案内する、と玲汰に連れてこられたのは玲汰の家だった。

「玲汰？　ここって玲汰の家…だよな？」

「うん」

「…まさか村長って」

「そのまさかなんだな」

にこにこと玲汰が引き戸を開ける。中には、あぐらをかいてどっしりと構えた美麻里がいた。

「ばあちゃんがこの一井村の村長なんだな」

「ええーっ!？」

「わしに話があるよね。言ってみんしゃい、小童」

美麻里は大儀そうに口を開いた。だが、さっきまでと違い威圧感というか威厳のようなものを帯びている。呆気にとられていた恩は慌てて美麻里の前に正座し、頭を下げた。

「美麻里さん、いえ、村長。玲汰への冷遇をやめさせて下さい」

「ふうむ。皆が我が孫に冷たく当たっているのはわしも知っておるよう。けどなあ、それは当然のことじゃて。人間との交流を禁じる。それが妖狸族の、いや、この村の掟。それを破ったのであればそれなりの罰を受けねばのう」

「でも、そのせいで薬草を取れず、美麻里さんも困っているじゃないですか。うちに依頼をしてきたのは美麻里さんなんでしょう？　困っているから助けを求めた。違うんですか？」

「確かに薬草がないのは困る。けどなあ、ただそれだけじゃて。薬草さえあれば、わしゃあいいんじゃ。じゃから薬草摘みは玲汰でな

くても構わん」

恩は顔を上げ、美麻里を睨み据えた。

「それってどういう意味ですか。まるで玲汰は必要ない、みたいな言い方ですね」

「まあ、この村にはおらんでもええわな」

瞬間、恩の中で怒りが爆発した。立ち上がった恩は両足に力を込めて怒鳴った。

「どうしてそんな言い方ができるんですか！？ 家族なんでしょう！？ 家族ならどんなことをしても受け入れてあげるべきです！！ 掟を破ったからって、いなくてもいいなんて言い方ひどいでしょう！！」

恩の怒号にカーレンと依織はびっくりと身をすくませた。恩がここまで怒りをむき出しにするのを見たのは初めてだ。

だが、美麻里はまったく動じることなく深くため息をついた。

「小童よ、おみゃーさんは甘いいう。いや、甘ったれ過ぎじゃわい。掟とはいう、絶対に守らねばならん約定じゃ。守らねば意味がないこと。それはおみゃーさんらの社会でも同じじゃろうて」

美麻里の反論に恩は少しひるんだ。

「…ええ、確かにそうです。俺たち人間にも守るべき規則はあります。けれど、俺たちは破ったならばそれ相応の罰を受けます」

「そうじゃろう？ なら、わしらと変わらんじゃないかえ。掟を破り、人間の町に入った玲汰には罰を与えた」

「では訊きますが、その罰とは具体的にどんなものなんですか？ 俺たち人間には、犯した罪に対してははっきりと罰が定められています。あなたたちが玲汰に科している罰を明確にして下さい！」

二人の強い視線がぶつかり合う。美麻里はため息交じりに告げた。

「村人との交流を断つ。それが罰じゃて」

「それは、いつまでですか？」

「そんなものは決まっとらん」

今度は恩が小さくため息をつく。

「無期限、ですか。それって、ちょっと罰としては重すぎませんか？ 交流なんて、会話をした時点で交流したことになります。今、俺と美麻里さんがこうして話しているのだって交流でしょう。だったら、あなたも掟に触れたことになりませんか？」

「……………」

「村に初めて来た時、この家まで案内してくれた子狸がいたんですけれど、その子も掟に触れたことになりますよね？」

「…おみゃーさんの言い分の通りであれば、そうなるのう」

「でも、あの子は明るく俺たちに話しかけてきました。まるで掟のことなんか気にしていないような。——いや、むしろ知らないんじゃないですかね？」

微かに見麻里の耳が動く。それを恩は見逃さなかった。

「知っていれば、あんな屈託のない笑顔で、よそ者…しかも人間の俺たちに話しかけたりしないはずです。俺たちが人間だと分らなかったということはないでしょうしね。」

人間は人外と人間の区別がつかない人が多いですけど、人外は人間と人外を簡単に見分けられます。たとえ幼い子供でもね」

「……………」

「それで俺は思ったんですけど、あなたの言う人間と関わってはいけないという掟、実は大人たちにしか浸透していないんじゃないですか？」

玲汰を筆頭に、カーレンと依織が驚愕する。美麻里は静かに目を伏せた。

「め、恩くん。どういふことなんだな？」

「なあ、玲汰。玲汰が掟を聞かされたのはいつだ？」

「え？ えっと…」

「高校に入る少し前、なんじゃないか？」

「！ そ、そうなんだな」

「それまで掟のことを聞いたことは？」

「…ないん、だな」

少しずつ空気の流れが変わってきた。緊迫した空気は依然変わらないが、奇妙に落ち着いた空気だ。美麻里は傍らの急須から湯飲みにお茶を注ぎ、ごくりと飲んだ。

「おかしいですね。この村は何年も前から人間との交流を断ってきたようですが、掟のことはそれまで耳にしたことはないということですよ。」

交流がなかったのは事実でしょう。でも、人間と交流してはいけないという掟は、存在していなかった。玲汰が高校に入学するまでは！」

尋問する警吏のように、恩は湯飲みを傾ける美麻里を睨みつけた。恩の迫力に気圧されていた依織だったが、恩の言葉を受けて気づいた。

「あの、めーちゃん。もしかして、その掟は古くからあったものではなくて、急遽作られたもの、ということですか？」

「依織の言うとおりだよ。あの掟は、玲汰のためだけに作られた掟、違いますか？」

美麻里はふう、と一息つく、と、湯飲みを床に置いて大きく嘆息した。

「：おみゃーさんの言う通りじゃよ。あの掟は、玲汰が人間の学校に行きたいと言いつ出した時に作ったものじゃて」

「本当、なんだな？　ばーちゃん」

美麻里が首肯すると、玲汰は美麻里に駆け寄った。

「なんで！？　なんで急にそんなの作ったんだな！？」

「……」

「それはさ、玲汰。お前を人間の学校に行かせたくなかったからだよ」

「え？」

玲汰は恩を振り返る。恩はゆっくり腰を下ろした。美麻里が湯飲みにお茶を注ぎ、恩に差し出す。恩は小さく苦笑して湯飲みを受け取った。

「一井村は長年、人間と交流を断ってきた。つまり、それだけ、人間社会の仕組みを知らなかったってことだろ？ そんな未知の世界に孫を送り出したくなかった。」

だから、何度も反対したけれど玲汰は意思を曲げなかった。それで、最後の手段として人間と交流してはいけないという掟を作り、玲汰に教えることで思い直させようとした」

だが、その掟にすら玲汰は従わず、結局人間の学校に通うことになった。

玲汰を止めるだけのかりそめの掟だから、大人にしかその掟は伝わっておらず、かりそめである故に子供には伝えられていなかった。そのため、大人だけが玲汰をさけ、子供は今までと変わらず、という現在の状態が出来上がってしまったわけだ。

「じゃあ、みんながオイラをさけてたのは、オイラを人間の学校に通わせないため？」

「そういうこと。ずっとさけ続けていれば、いつか玲汰が人間の学校をやめるんじゃないかと思ってね」

そこまで言うと、美麻里は大きな体を揺らして大笑した。

「まいったのう、全とお見通しかえ。さすがはあの稜雲いずむさんが認めただけのことはあるわい」

恩はぶふっ、とお茶を噴き出した。

「い、稜雲！？ 美麻里さん、あのヒトをご存じなんですか！？」

「昔からの知人でのう。おみゃーさんたちを紹介してくれたのも彼なんじゃよ」

なんてこった。全部あの生徒会長の思惑だったのか。ぐぬぬ、と恩は悔しそうに湯飲みを握った。

「それで俺を試したんですね？ 玲汰が村にいらなくてもいいなんて、本心でもないこと言ったりして」

「もちろんじゃ。玲汰、すまんかったのう」

美麻里が申し訳なさそうに玲汰の頭をわしと撫でる。玲汰はふるふると首を横に振り、泣きそうな笑みを浮かべた。

「ううん。そんなに、ばーちゃんはオイラのこと思ってくれてたんだな？　なのにオイラ、そんなことにも気づかなくて…ごめんなさいなんだな」

「ええんじゃよ。おみゃーは子供の頃からわがままも言わず、聞きわけがよかった。そんなおみゃーが反抗したんがちいと寂しかっただけなんじゃよ。」

おみゃーはわしにとって、残されたたった一人の家族じゃからう。どうしても繋ぎとめておきたかった。傍にいてほしかっただけなんじゃよ」

「ばーちゃん……」

「けどなあ、玲汰ももう子供じゃあない。自分の生きたい道を生きたらええんじゃ。おみゃーが人間の学校に行きたいと言うんなら、もう止めやあせん。好きにせえな。掟も取り消さんとなあ」

玲汰は感極まり、がばつと美麻里に抱きついた。美麻里の毛皮に顔をうずめ、むせび泣く。

依織とカーレンが涙ぐみ、恩もよかったと胸を撫で下ろした。此武だけが胸糞悪そうに、そっぽを向いていた。

第12話 怪しい占い館と前世占い

木枯らしが吹く夜道を、一人の女性が震えながら、息せき切って走っていた。それは寒さのせいもあったが、恐怖からでもあった。

来た道を振り返るが誰もいない。女性は走り疲れて立ち止まった。淡い月光が彼女を照らす。息を整えようと俯くと、月が雲に隠れ、闇が広がった。

「ふふふ、追いついた」

「!!」

響いてきた男の声に、女性はびくんと大きく身を震わせた。だが、声の主の姿は見えない。恐怖で声が出ない。

「手間をかけさせないでもらいたいねえ。あんまり逃げると、楽になるのが遠のくよ?」

「……っ」

歯がガチガチと鳴る。冷や汗が全身を流れ、女性が必死の思いで足を動かした時だった。

「はい、おしまい」

突如、足元がなくなり、女性は悲鳴を上げることもしなげず、ポツカリ空いた黒い穴に吸い込まれていった。

* * *

雲から顔を出した月が、誰もいない夜道を照らした。

十一月も下旬に差し掛かろうとする頃、木枯らしが身に沁みるようになった。狩城市は藍泉国の中で南方にあるため、冬の訪れは国内で最も遅い。北方はすでに雪景色だろう。

午後の授業中、恩はクラスメートの言葉に胡乱な目つきになった。「占いの館？」

「うん、そう！ 最近、隣町にできたって雑誌で見たの」

現在、化学の実験中。四人ずつのグループに分かれ、恩はまひろ、要、玲汰とグループを組んでいた。

まひろがテキパキと作業をしながら、楽しげに笑う。

「複数の占い師さんが一つのお店に集まっててね、それぞれ違う占いなんだけど、よく当たるとって評判なんだって」

「へえ、おもしろそうなんだな」

「占いねえ。つまりは占術だよな。俺、占術ってあんまりいい思い出なくてなあ」

玲汰は乗り気なようだが、恩は渋い顔をする。要が最後の手順に取りかかった。

「恩くんは占いは信じてないタイプ？」

「うーん、物とか人によるかな。本物だったら信用してもいいんだけど」

「本物？」

途中経過をノートに書き込み、恩は頼杖をついた。

「テレビとかで流してる占いつて、たいてい不特定多数の相手を対象にしたものだろう？ 聖霊占いとかさ」

聖霊占いとは、リーフェを護っている十人の聖霊をそれぞれ十二カ月に当てはめ、どの聖霊の守護期に誕生日があるかで、運勢などを占うというものだ。

「そういうのって占う対象が個人じゃないから、当たる確率がその分、減るっていうか……」

「確かにね。まあ、占いは当たるも八卦、当たらずも八卦っていうから」

「今日の放課後行ってみようよ。ねっ」
今日はバイトは休みだ。うきうきしているまひろの笑顔に、恩はしばし考え、折れた。

そして放課後。恩たちは隣町にやってきた。幸緒ゆきおと亜櫓アスサにも声をかけたが、亜櫓には店の手伝いがあるから、と断られた。

玲汰は興味がありそうだったが、急用が入ってしまい来られなくなった。そのため、メンバーは恩と幸緒、まひろと要の四人となった。

四人は雑談をしながら目的の古い屋を目指して大通りを歩いていく。大型のショーウィンドウの前を通ると、テレビでニュースが流れていた。

《今朝、警吏庁に報告された狩城市内の行方不明者は十四人となりました。他の市の行方不明者も含めると、二十九人にも上ります。最近、多発している行方不明事件は、一部では神隠しなどと言われ……》

「あれ、今朝のニュースでもやってたね」

「怖いよねえ。被害者に共通点はないんでしょう？」

「住んでいるところも性別も年齢もバラバラで、神隠しだって思うのは分からなくもないけどさ、どう思う？ 恩」

「ぼけっとしていたところに話を振られて、恩は意味もなくうろたえた。」

「え！？　なんで俺に訊くんだよっ？」

「ん？　なんとなく？」

「た、ただの無差別誘拐だろ？　神隠しなんてさ、なんでもかんでも人外のせいにしちゃいけないと思うけど。それよりさ、早く行こうぜっ」

慌てる恩に、三人は不思議そうに顔を見合わせた。

「あっ、あそこ！」

雑誌の切り抜きの地図を見ながらまひろが示したのは、ちょっと装飾の派手なマンションのような建物だった。

三階建てで、出入り口の看板にはでかかと【摩訶不思議占い館】と書かれている。恩はジト目で呟いた。

「なんか、胡散くさそう…」

「そう？ まんますぎておもしろいじゃない」

「意外とこういうところに掘り出し物があるかもよ？」

「早く行ってみようよ！」

まひろはやけに楽しそうだ。要と腕を組んで真っ先に店に入っていく。やっぱり女の子だし、占いに興味があるのだろう。

「それにしても、幸緒が話に乗ってくるなんてな」

「何それ、どういう意味？」

「だってさ、幸緒ってこういうの信じなさそうじゃん。現実主義だし」

「まあね。ちょっとした気分転換よ」

中に入ると、ホテルのカウンターのような受付があり、そこで店員が店内の案内をしているらしい。店内には若い女性客がたくさんおり、かなりにぎわっている。

「へー、結構繁盛してるみたいね」

「雑誌に載るくらいだからな。わっ！」

「二人とも遅ーい！」

まひろが後ろから恩に抱きついた。ぷうっ頬を膨らませるまひろの頭をよしよしと撫で、要がさりげなく恩からまひろを離す。

「今、ざっと説明を聞いてきたよ。ここには各フロアに三人の占い師がいて、時間内なら何回でも占いはできるけど、帰りにあそこの受付で占ってもらった分の料金を払うんだって」

「えっとねー、カード占い、相性占い、聖霊占いに相占いでしょ？ 夢占いに風水、レゼット占い、ダウジング、あと前世占いなんて

いうのもあったよ」

（前世占い？）

指折り数えるまひろ。それだけの数をすらすらと言える記憶力はすごいが、最後の前世占いというのが気になった。

前世なんて、占いの中で一番信用ならないんじゃないか？ 恩はしかし、なぜかその一点が気になった。幸緒がまひろに尋ねる。

「まひろはなんの占いがしたいの？」

「相性占い！ 要ちゃんとの相性を占ってもらおうのー？」

「そんなの占ってもらわなくても分かり切ってるじゃないか。僕たちの相性は抜群だよ」

「それは分かっているけどお、確証が欲しいの。もし悪い結果が出たらってちょっぴり不安だけど」

そう言って不安そうに俯いたまひろの顔を両手で包み込み、要は優しい笑顔と甘い声で囁く。

「そんな顔しないで、まひろ。大丈夫。どんな結果が出ても、僕はまひろを一番愛してるよ？」

「要ちゃん……。うん、結果なんてなんでもいいよね。だって、まひろも要ちゃんを一番愛してるもん？」

見つめ合った二人はぎゅうつと抱き合った。二人の世界に突入したラブラブ姉弟に、本当に占う必要ないんじゃないか、と遠い目でツツコむ恩と幸緒だった。

それでも一応気になる、ということで行は相性占いをしてくれる占い師の部屋を訪れた。

相性占いは三階の一番手前の部屋で結構な人数が並んでいたが、それでも三十分ほどで終わり、占いの結果は案の定“相性抜群”だった。

一応、恩や幸緒たちも相性を占ってもらい、恩とまひろ&要の相性はかなり良好、幸緒と恩も良好だった。

次にまひろが行きたいと言ったのは前世占いの部屋だった。これには恩も惹かれていたので、表には出さなかったが乗り気であった。前世占いの部屋は二階の一番奥。一行が向かったが、他の部屋と違って誰も並んでいない。その上、中に入ってもしんと静まりかえっていた。

「なんか静かだね」

「ちゃんと占い師いるのかしら？」

「あのお、すみませーん」

まひろが呼びかけると、ややあって奥の方から声が返ってきた。

「はいはい」

出てきたのは口元をヴェールで覆った黒マントの男だった。やたらごつい体つきをしているのが気になる。

「ああ、お客さんが来るなんて久し振りだなあ。どーぞ、こちらへ」

野太い声で占い師は奥のテーブルを指し示す。今の言葉といい、雰囲気といい、不安が募る。この占い師を信用していいのだろうか。恩たちは顔を見合わせた。

だが、占い師はうれしそうににこにこ笑っていて、やっぱりいいですと断れそうにない雰囲気だ。仕方なく恩たちは占い師に促されるまま奥へと入っていった。

「誰から占いましょう？」

「えっ。あ、じゃあ…藤浪さんで！」

「は！？ あたし！？」

要に水を向けられ、幸緒は動揺した。前世占いなんてあいまいで、しかも胡散臭そうなのこの占い師に見てもらうなんて嫌だ。そもそも占い自体、幸緒はあまり興味がない。

「まひろたちはあとでいいから。お願い、藤浪さん」

「ちよつとっ、占って欲しいって言ったのはまひろたちでしょー！？」

慌てる幸緒に、恩はぐっと親指を立て、満面の笑みを浮かべる。

「頑張れ幸緒。俺は無事を祈ってる。」

「なんで占ってもらうのに応援されなきゃなんないわけ!？」 はあ
く、わかったわよ、いってやろーじゃないの」

覚悟を決め、幸緒は占い師と向かい合ってイスに座った。占い師の前には水晶玉が置いてある。占い師はにっこり笑って、その水晶の上に両手を翳した。

「それでは、あなたのお名前と生年月日を聞かせて下さい」

「：藤浪、幸緒。藍泉歴一九九八年九月三十日生まれ、です」

「分かりました。では、藤浪幸緒さん。この水晶をよくご覧下さい」
胡乱げな眼差しで、幸緒は言われるままにバスケットボールほどの水晶玉を見つめる。すると、水晶玉がぼんやりと光り出した。

「そのまま目を離さずに。この中に、あなたの前世が映し出されるのです」

「はあ」

胡散臭い、と思いつつも幸緒は占い師の言葉に従う。

水晶が光り出すと、まひろが俄然目をキラキラさせ始めた。要は少々呆れ気味に水晶玉を見ている。

恩はというと、あごに手を添えて探るように観察していた。

(こいつ、やり方はインチキくさいけど、力はそこそこあるみたいだな)

水晶玉が光を放った時、場の空気が変わった。本物の占術師は占を行う時、自らの力によって聖域を作り出す。その聖域の中で神と交信してその声を聞き、時には神をその身に降ろすという。

この占い師は微力ではあるが、ちゃんと“力”を持っている。だが、この程度の力じゃ神と交信することはできないだろう。

それに前世など、冥界の王に訊かない限り分からないもの。それなのに、なぜこんなにも気にかかるのだろう。自分の前世がどんなものだったのか、知りたいと思っている。

フエイトスピナー
(俺が他人の運命を動かす宿命を紡ぐ者だから？ 少なからず“命”を預かっているから、なのかなあ?)

眉間にしわを寄せて見ていると、占い師が小さく唸り出した。

「うぬぬ、見えてきた。見えてきましたよ。あなたの前世は：二百年前の貴族の娘です」

「貴族の娘え？」

「そうです。貴族といってもけして上流ではありませんが、下流でもない。まあ中流貴族ですね」

「つまり、超大金持ちじゃあないけど、それなりに裕福な家庭のお嬢様ってこと？」

「そのとおりです」

「あっそ。ま、だからって今の暮らしが良くなるってわけじゃないんだろうけど」

ほとんど信じていない様子で、だが一応占い師に礼を言う幸緒。まひろは目を輝かせ、幸緒と入れ替わりでイスに座る。どうやらこの占い師は本物だと信じたらしい。

恩はため息をついた。この程度ならあまり期待はできなそうだ。その後、要も占ってもらい、ついに恩の番が来た。

「えーと、よろしくお願いします」

「それでは、あなたのお名前と生年月日を聞かせて下さい」

「ほづ：じゃなくて、高天 恩。藍泉歴一九九八年四月二日生まれです」

「分かりました。では、高天 恩さん。この水晶をよくご覧下さい」
それにしても、毎回同じ言い方をする占い師だ。基本文句だろうから分からなくもないが、録音かと思うくらい、抑揚も言い回しもまったく同じなのはなぜ。

恩が水晶を覗くと、水晶がぼんやりと光る。その一瞬、恩は微かに寒気を感じた。ごくわずかな時間だったが、ピリピリと肌を刺すような気配だった。

（！？ 今の：なんだ？）

不審に思ったが、占い中は下手に動けない。そのまま見つめてみると、占い師は今までとは違う唸り声をあげた。

「おや：おかしいですね」

「え？」

「一向に、お客さんの前世の姿が見えてきません」

「はい？」

恩だけでなく、まひろたちも怪訝な顔をする。前世が見えないとはどういうことだ。

「霞がかかったように、見えてこないんですよ」

何度かやり直してもらったが、やはり恩の前世だけは見えなかった。時間が来てしまったので、恩たちはそのまま帰ることにした。

「恩くん、あまり気にすることないよ」

「そうだよ、恩ちゃん！ 前世って言っても、今とは無関係なんだから」

慰めの言葉をかけてくる要とまひろに、恩はひらひらと手を振って笑顔を見せた。

「あはは、大丈夫だよ。元々、前世なんて本当かどうか分からないだし」

「そーんなこと言ってえ、さっき結構動揺してたわよね？」

むにー、と恩の頬を指で押しながら、幸緒がにまにまと笑う。

「んなつ、何言ってるんだよ、幸緒！ 俺は全然気にしてなんかないんだからな！」

「はいはい」

「本当だってばーっ」

むきになって手を振り上げた時、恩のヴァモバが鳴った。見ると此武からのメールだった。なんだろう、今日はバイトは休みのはずだが。

中身を開けば、『急な仕事が入った。今すぐ来い、下僕』の短文。メールでも高飛車な男だ。

「なーに？ メール？」

「あ、うん。急にバイト入っちゃったから、俺行くね！ また明日！」

恩は逃げるように駆け出す。急がないと何をされるか分からない。

それに、まひろたちにバイトの内容を話していないので、いろいろ訊かれる前に行かねば。

できるだけ早く、恩は高科FWへと向かった。

「ようやく来たか、亀虫」

ドアを開けた途端、開口一番に叩きつけられた一言。此武はイスでふんぞり返り、机に組んだ足を乗せて、ぎろりと恩を睨みつけた。

「これでもすつごく急いできたんですけど。あれ？ カーレンは？」

「呼んでいない。今回の獲物は奴では酷だろうからな」

「酷って…依頼はなんだったのさ」

尋ねると、此武は眉間にしわを寄せて吐き捨てた。

「依頼ではない。単なる面倒の押し付けだ」

「はー？ でも、仕事なんだろう？」

「無報酬のな。獲物は――人魔だ」

その単語に、恩はドキッとした。不自然に心臓が跳ね上がる。恩の様子が変わったことに此武は気づいたが、知らぬ顔で続ける。

「人魔とは、闇に心身を支配され、魔道に堕ちた人間のことだ。魔となり、人間に害するならば排除しなくてはならない。まあ、貴様ならばこれくらい知っているだろう？」

「…え…いや、全然…」

「しらばっくれるな、屑。裏では祓魔を行う^{フォン}鋒家のガキが」

「！ …知ってたのか」

「当然だ。貴様のことはあの方々から、ある程度聞いているからな」
「……」

鋒家は表向きは、武術家やおもちゃ・お菓子会社の経営をしているが、裏の顔として祓魔の仕事をしている。まさかそれを此武が知っていたようとは。

だからあの棍をくれた時、使い方は分かるだろう？ と言ってきたのだ。自分が鋒家にいた頃、棍を得意武器としていたことも知っ

ていたから。

「一度魔道に堕ちた人間は、二度と人間に戻ることはできない。だから排除する。」

だが、魔道に堕ちたとはいえ、元は人間だ。天界でぬくぬくと育てられた純粋なカーレンでは、倒すことなどできんだろう。むしろ救ってやりたいなどと言いかねん」

此武の言うことは一理ある。というか、絶対そう言う。恩は微苦笑した。

「さて、もう行くぞ。外はそろそろ黄昏——逢魔が時だ」

日が落ち、闇が世界を覆い始める時間。魔がもつとも活動が始める時間だ。

第13話 生み出された魂と創り出された魂

時空廻廊に入った恩は歩きながら此武に尋ねた。

「なあ此武。今回の相手の人魔ってさ、どんな奴？」

「話によれば、ここ数日の人間どもの失踪事件に何らかの関わりがあるらしい」

「えっ、最近よく騒がれてる神隠し事件!？」

占いの館に行く時にもニュースで流れていた。あの事件の関係者ということとは。

「えーと…でもさ、事件に関わってるのがその人魔ってことは、人外の事件だよな？ それって警吏隊の特殊課の仕事なんじゃないの？」

警吏隊は社会の安全を守り、事件や犯罪の防止、捜査や解決などを目的とした組織だ。その中にある部署の一つ、特殊課は異能者や人外が関わる事件を専門とする部署だ。

ピキ、と此武の額に青筋が浮かんた。恩は、地雷踏んだ!？ と頬を引きつらせる。此武は低い声で恨めしげに呟いた。

「あの糞狐め、自分のところの仕事のくせに『なんだか面倒なことになりそうだから★』とか抜かしおって、オレ様のところに押し付けたのだ。己の部下でも下僕でもこき使ってどうにかすればよいものを。子守りの時といいふざけおって…っ！」

此武からダークなオーラが出まくっている。狐、子守りということは、もしかして今回の依頼主というのは、あの『ヒムカ』さんだろうか。

(稜雲会長の父親だっけ？ 結局、あの時は会えなかったんだよな)

此武も結構自分勝手というかやりたい放題だが、ヒムカさんとやらも自由奔放なヒトのようだ。この此武を相手にすごい。

(ヒムカさんってどんなヒトなんだろ。一度会ってみた…)

「恩。陽向^{ひむか}に会いたいなどと死んでも思うなよ。もし遭遇したら渾身の力で殴れ。蹴り飛ばせ。むしろ原形を留めん程に潰せ。」

「怖ろしいこと言うなよっ。なんでそんなに毛嫌いしてんの!？」
「というか、なぜ考えてることがばれた？」

「愚問だな。奴の存在そのものが鬱陶しいからだ、脳みそ筒抜け馬鹿め」

「脳みそ筒抜けって怖いわ!!」

くすくすと千咲が笑う。滅多に話さないので存在を忘れがちだが、このヒトは此武の傍若無人振りにまったく動じない。

此武が創ったゴーレムだから、主に反抗しないということなのだろうが、そも感情があまりないように思える。いつも微笑んでいるが、まるでマネキンのようにそれ以外に表情が変わらない。

主に忠実に動く人形。体だって核がなければただの土塊だ。千咲に“自己”はないのだろうか？ 名前だって元は『チサキ』で、漢字は恩が当てた。此武が『血裂』でいいなどと言うから。

「もう、笑いごとじゃないよ、千咲さん…」

「お二人は仲がよろしいですね」

「「は？」」

思わぬ千咲の発言に二人の声がハモる。千咲は仮面のように張り付けられた笑顔のまま、平坦な声で告げた。

「マスターが誰かに忠告をすることなど初めてです。そしてマスターに心を開かせた方も初めてです」

目を丸くした二人は顔を見合わせる。だがすぐにはっとして顔を逸らす。そんな風に見えたなんて正直考えたこともなかった。

此武は忠告したつもりもないし、恩は此武が自分に心を開いたなんて思っていない。なぜ千咲がそんな風に思ったのか二人は理解できなかった。

それ以上千咲は何も言わず、無言で機械的に歩みを進める。なんだか妙にモヤモヤするが、二人は追及しなかった。

（千咲さんって、何考えてるかよく分からないな…。というか、俺

と此武のやり取りをどう見ればそんなふうに見えるんだろ)

「あー、そういえばさ、今って例の人魔のどこに向かってるんだよな？ 結構歩いてるけど、そいつのいるとこって遠いのか？ それともあちこち移動してるのか？」

「奴はある場所を拠点にしているらしい。どこぞの占いの店と陽向はほざいていたな」

「占いの店…？」

占いと聞いてドキツとする。また思い出してしまった。前世のこ
と。

暗い顔で歩みが遅くなった恩に千咲が立ち止まる。此武も怪訝な
顔で振り返った。

「どうしたウスノロ。とっとと来い」

「あ…ごめん」

「なんだ、占いの館とやらに心当たりでもあるのか」

「…それもある、けど…」

「けど、なんだ。はっきりしろ」

前世が見えないと言われたことを気にしてるなんて、此武に言っ
たら笑われるかもしれない。だが、言わなければ痛い目を見せられ
そうだ。

恩は渋々、前世占いのことを話した。

「前世が見えなかっただど？ はっ」

予想通り、話を聞いた此武は笑った。いや嗤った。腕組みをし、
蔑むような目で恩を見る。

「それは当然だろう。貴様に前世など無いのだから」

「……え？」

「無いものが見えるわけあるか。下らん。行くぞ」

「ちょ、ちょっと待って！」

前世が無い？ それってどういうことだ。引き止めると、此武は
大儀そうにため息をつき恩に向き直る。

「いいか、六界全ての生きとし生けるものは皆、肉体が死ねば魂は

冥界へと送られる。そこで前世の記憶は浄化され、新たな肉体に宿る。それが転生だ」

魂が消滅しない限り永遠に続く。輪のように廻り続ける——輪廻。「知ってるよ、本で読んだ。だからさ、此武の言う通りなら、俺だって前の人生があるはずだろ？」

前世の記憶は引き継がれない。稀に引き継ぐ場合もあるが、自分は前世を覚えていない方なだけ：ではないのか？

「何度も言わせるな。貴様には前世など、前の生など無いのだ」

「言ってる意味が分からない！ 魂が何度も廻るなら、俺が『高天恩』として生まれる前に別の誰かとして生きてたんだろ！？」 此武だって！！」

「そうかもしれんな。オレ様は原初から生きているわけではない。当然、オレ様ではない生を生きていたこともあっただろう」

「だったら！」

「オレ様と貴様は違う」

「：そ、そりゃ、此武は神族で俺は人間だから違うのは分かっているけど」

きっぱりと断言されて怯んだ恩だが、此武は嘆息した。

「解っていない。オレ様と貴様が“違う”のは種族のことではない」「？」

「輪廻にある魂は、元はいくつかの魂だ。それらが分裂し、転生を繰り返して現在の様々な魂がある。オレ様を含む六界全ての魂は、ある方々から生み出された」

突然、恩の心臓が跳ね上がった。

「その方々は我々の魂だけでなく、大地、海、草木、光、闇：世界そのものを創られた」

恩は俯いた。心臓が早鐘を打っている。全ての命、世界を創ることのできる存在。

此武が——戦闘神クロムが“あの方々”と畏敬を込めて呼ぶ存在。それは——

「あらゆる魂の根源。魂の還る場所。我らが大きいなる母。創造神セイルシア様とライフイエ様だ」

「！！！」

全身から汗が噴き出る。創造神セイルシア、ライフイエと言えば、世界創造神話で必ず出てくる万国共通の神の名。

此武の言う“あの方々”とは創造神のことだったのだ。プロットを創ったのも創造神。ならば、クロムが逆らえるはずもない。

「生ある者はすべてあの方々から生み出された。元を辿れば、オレ様も魔族も下等人間どもも同類ということだ。だがな、貴様だけは当てはまらない」

此武の冷淡な声に顔を上げた恩は、びくりと身をすくませた。自分を見つめる此武の眼はひどく冷え切っていた。嘲りも蔑みもない、無感情な眼。

「貴様の魂はプロットのためだけに、セイルシア様とライフイエ様が創られた。プロットの中でのみ生き、死ぬ。」

“終焉の刻”を迎えれば貴様の魂は消滅する。前世も無ければ、死して転生することも無い故に来世もない。輪廻から外れた異端児なのだ、貴様は」

足の力がなくなり、恩はがくん、とくずおれた。自分が他の人間とは違うという事実。

異能者として常人と異なるのとは違う。存在そのものがあらゆる生き物と異なるのだ。人間であって人間でない。

此武は恩がうなだれる理由が分からず、眉間にしわを寄せた。

「おい、何をしてる。とっとと面倒事を片づけるぞ」

いつもなら反応する恩だが微動だにしない。此武は苛立たしげに舌打ちした。

「千咲、そのガラクタを引き摺ってこい」

「はい、マスター」

命令通り、千咲は恩の後ろ襟をつかんでズルズルと引きずり始める。それでも恩は一言も発することなくされるがままだった。

人魔が潜伏している占いの店に着くと、すでに閉店時間で誰もいなかった。真っ暗な店内には静寂が広がり、重い気が漂っている。

昼間は普通の占い師を装い、夜は結界を張って潜んでいたのか。

ホール内を見回し、此武はい、と口の端を上げた。

「なんとも妖しい場所だな。出てこい！ いるのは分かっているぞ！！」

まるで犯人を追いつめた警吏隊士のような言い方だが、ホールの奥からぼんやりと人影が浮かび上がった。

「はいはい。すみせんがお客さん、もう閉店時間なんですけど」

「無駄な演技はやめろ、カス。最近、人間どもを攫っているのは貴様だろう、人魔」

「はて、なんのことやら。俺は普通の人間の占い師ですよ」

「白を切るな。こんな邪気の中で平気でいられる人間などいるか」

店内を色濃く染める邪気。戦闘神である此武や、ゴーレムである千咲、祓魔師の家系で邪気に耐性のある恩は問題ないが、普通の人間ならこの邪気には耐えられないはずだ。

占い師はげらげらと笑いだした。

「バレバレかよ。まあいいがな。んで？ 俺を捕まえんの？ 殺す

の？ あんたが何者か知らないけどな、そうすんなり終わらせられると思うなよ！？」

占い師が両手を広げ、パチンと指を鳴らすと、闇の中から失踪した人々が出てきた。操られているのか目は焦点が合っていない。

「行け！ 傀儡ども！」

号令とともに、占い師の操り人形と化した人々が、一斉に三人に襲いかかる。千咲が此武の前に立ち、自身の腕を土の剣と化して傀儡たちを殴るように弾き飛ばす。

恩にも傀儡たちが襲いかかるが、ショックから立ち直れていない恩は俯いて棒立ちだった。

「動かんか恩!!」

名を呼ばれて恩が我に返ると、本来の姿に戻ったクロムが、恩に襲いかかってきた傀儡たちを氷漬けにしたところだった。

「いつまで腑抜けてる。下僕のくせに主を働かせるとは、余程その腐った頭をかち割りたいのだな」

ものすごい力で頭を鷲掴みされて持ち上げられる。クロムは二メートル以上背があるので、百六十センチ足らずの恩は持ち上げられると、床からだいぶ足が離れる。

「ぎゃーっ痛い痛い!! すみません働かせていただきますう!!」

恩が悲鳴を上げると、クロムは愉悦の表情で恩の頭を放す。

「ふん。貴様はオレ様の玩具だ。せいぜい無様に踊り狂ってオレ様を愉ませろ」

「あいたーっ」

床に強かに尻を打ちつけ、恩は涙目で尻をさする。頭も痛い。しかし我慢して長棍を召喚して構えた。

操られた人々が周りを取り囲むその向こうで、占い師が恩を見ておかしそうに笑った。

「あんれえ? その赤い髪の子はさっきの子じゃないか。前世の見えない摩訶不思議な少年」

「! あんた、前世占いの…っ」

ぼうっとしていたので相手が誰か気づいていなかった。前世が見えない、という言葉にずきっと胸が痛む。

「なんだよ、祓魔師か? さっき店に来たのは下見に…」

「黙れ、魔道に堕ちた下種め。下らん御託を並べていないで、とっとと消えろ!!」

跳躍したクロムが、人魔目掛けて複数の氷のつぶてを放つ。人魔はローブをマントのように翻してつぶてを弾き返した。それと同時に傀儡たちが千咲と恩に襲いかかってきた。

彼らは操られているだけのただの人間だ。傷つけることは、ましてや殺すことはできない。

「千咲さんっ、この人たちは気絶させるだけにして下さいね!？」

「マスターのご命令があれば善処します」

「クロムーっ!! 頼む!!」

長棍で腹や背中を叩くなどして気絶させながら恩が叫ぶ。人魔と交戦していたクロムは舌打ちをし、「恩に従え、千咲」と命令を下す。

「了解しました、マスター。それでは恩様、先程のご命令を遂行します」

仮面のような笑顔のまま、千咲は大きな土壁を作り、複数の傀儡を左右から挟撃する。挟まれた傀儡たちは皆、気絶して倒れるが、下手をすれば圧死するのではないだろうか。

「千咲さんっ!! 他にやりようあるでしょおおおっ!？」

クロムといい千咲といい、加減というものを知らないのか。

「へーえ。あの少年、なかなかやるねえ。あの人がご執心になるわけだ」

「あの人だと？」

人魔の呟きに眉をひそめたクロムは、突如結界に生じた空間のひずみに、弾かれたように振り返った。

恩の背後に空間移動の穴が開く。そこから偃月刀の刃が伸び――どすっ

体を貫く鈍い音。一瞬、何が起きたのか分からず、恩は肩越しに振り向いたまま硬直する。

真朱の眼に映るのは偃月刀と、その刃に腹を貫かれたクロムの背中。恩は息を呑み、大きく目を見開いた。

「クロム!!!」

「…かはっ」

クロムの口から血が飛ぶ。刃が抜かれ、クロムは仰向けに倒れる。恩が抱き止めようとしたが、クロムの巨軀を支えられるはずもなく、恩はクロムの下敷きになった。

「ぐえあーっ!」

「マスターっ」

千咲が駆け寄り、軽々とクロムを抱き起こす。痙攣していた恩だが、すぐさま跳び起きる。

「クロム！　クロム！！」

顔を覗き込むと、みしっ、と顔面を鷲掴みされた。

「喧しい！　耳元で喚くな」

「…んで、あんなこと…」

鷲掴みされたが、今までほど力が入っていない。問い掛けてクロムの手を両手で包み込むように触れると、クロムの手が離れた。

「クロムっ」

「ふん、狙ったのはこいつじゃねえんだがな」

闇の中から聞こえた声に、恩は条件反射で身をすくませた。恐る恐る振り返れば、空間移動の穴から出てきたのは、絳髪緋眼の男。

「！？　レイウエン　？？！　？　どうしてお前が…っ」

「驚いたな。まさかお前が、身を呈して他者を庇うとは」

さらに？？の後ろから現れた異様な風体の男に、恩は驚愕する。

両頬に十字型の痣。尖った耳。からいろ褐色のざんばらな髪。白目と黒目の部分が反転した両眼。どう見ても人間とは違う生き物。

「…悪魔！？」

魔族の中でも邪心が強く禍々しい、魔族の代表格だ。一般人が魔族と聞いて最初に思い浮かべるのは悪魔だろう。

その悪魔がなぜ？？と一緒に？　しかも、かなり上位の魔族だ。

「…ふっ、また貴様か、鎌月れんげつのゾルデッシュ…」

身を起こし、腹を押さえながらクロムは立ち上がる。不敵な笑みを浮かべて悪魔と対峙する。さりげなく恩を背にかばうように。

「戦神。一体どういう風の吹き回しだ？　それは人間だろう。下等生物を庇って傷を負うとは、最凶の戦神ともあろう者が無様だな」

悪魔と同じ疑問を抱えていた恩はクロムの背中を見る。口を開けば、玩具だ下僕だ屑だと罵ったり、殴る蹴るなど当たり前前の散々な仕打ちをするくせに。

「黙れ。貴様に関係ない。貴様こそ、部下兼下僕以外の者を引きつけているとは珍しいではないか」

目に見えない火花が散る。どちらも相手を見下した笑みを浮かべているので、どっちが悪役なのか分からない。

「ふん。こいつは道具に過ぎないさ。しかし面白いものを見せてもらったが、邪魔だなお前らは。ここで始末しておくか」

ゾルディシュが空間から黒い錐を数本出現させ、クロムに向かって放つ。同時に???が恩に肉薄し、偃月刀を突きつける。恩は条件反射で、その刃を長棍で受け止めた。

「こんなところで貴様の顔を見ろとは思っていなかったぜ、綺星」

チイシン

「綺星って呼ぶな！ 俺だって微塵にも思ってたさ。しかも悪魔と一緒にだなんて…どういうことだ!？」

至近距離で睨み合う二人。クロムの方は、千咲がゾルディシュの放った黒錐をすべて叩き落としていた。

「教えてやる義理はないな。ともかく、あの天魔を排除されるわけにはいかねえんだ。あれは大事な駒だからな!」

「駒だって!？ 何を企んでるんだ、???!」

???の刃を跳ね上げ、素早く間合いを取る。???はにい、と嗤った。

クロムは腹に当てていた手に視線を落とす。赫く血で染まった手。誰かのものではない。己の血――

じわじわと体の奥底から熱情が込み上げてくる。他者の血は飽きるほどに見てきた。だが、己の血を見るのは幾年振りか……

ドクンッ

クロムの中で、鼓動がひときわ大きくなった。

???がくいつと手で合図を送る。恩は気づいて背後に意識を向けた。ナイフのようなものを持って飛んでくる天魔を恩が迎え撃とうと体を反転した時、クロムの凄まじい神気が爆発し、目の前で天魔の体が氷漬けになった。

その狂気に染まった神気に、さしもの???も愕然とした。これほ

どまでに激しい狂気を神族から感じるとは。

恩は戦神の強すぎる神気に戦慄し、蒼白な顔をしていた。

ゆらりと立ち上がり、本気になった時にだけ変わる紅い目で一同を見回すクロムに、ゾルディシュは自嘲気味に笑った。

「数百年振りに自分の血を見て理性を失ったか。相手をしたいところだが……?! ここはいったん退くぞ」

「なんだと? オレはまだ遊び足りねえぜ」

「ここで騒ぎを起こせば面倒な虫どもが集まってくるだろう。駒も封じられた以上、人間どもを操ることも難しい」

空間にゆがみの穴を作り、??を促すゾルディシュ。??は舌打ちをし、偃月刀を収めて身を翻した。

「貴様をなぶるのはお預けだ」

「待てよ、???!」

フオン テエンユイ

「綺星、いや、鋒 天雨。序章とはいえ、計画の邪魔をしてくれた礼はするぜ。たっぷり時間をかけて、な」

「???!!!」

捕まえようと手を伸ばしたが惜しくも届かず、??はゾルディシュとともに空間のゆがみの中に消えていった。

??が悪魔と繋がっていたとは。しかもその悪魔、ゾルディシュはクロムと何かしら因縁があるようだし……

「! そうだ、クロム!」

クロムに目をやると、クロムはあらぬ方向を見ていた。今の彼は正気を失っている。何をしでかすか分からない。それに腹の傷の治療もしなければ。

「千咲さん! クロムを止めるにはどうすればいいんですか!?!」

「申し訳ございません、恩様。ああなってしまっただけのことでもできません。マスターの破壊衝動が治まるまで待つしかありません」

「ええっ、そんな!?!」

それではここに人たちがただでは済まない。それどころかこ

の一带にある人家も危険だ。

（なんとかして止めないと。でも、本気の戦神を止めるなんて…）
できるのか。それに、怖い。激しい神気、闘気、狂気。これらを
抑え込むなんて。

（俺なんか、できるの？ こんなに弱い俺に…）

今も体が震えている。怖くて怖くて、それでもなんとか気力で立
っている。気を抜けばこの神気に吞まれて倒れてしまいうさだ。

クロムが見境なく、氷のつぶてを放った。壁や天井、床が破壊さ
れる。幸い、人間たちには当たらなかったがこのままでは危ない。

（どうすればいい？ 早く、早くしないと）

クロムが破壊衝動のままに力をふるい、この一带を破壊してしま
う。傷だって治さないと死んでしまうかもしれない。神とて大量に
血を失えば死に至る。そんなのは、嫌だ。

恩はありったけの気力と勇気を奮い起こし、長棍を手放してクロ
ムへと駆け寄った。千咲の制止の声にも耳を貸さず、まっしぐらに
クロムへと向かい、腕にすがりついた。

「クロム…っ、落ち着けよ！ ここにはたくさんの人たちがいるん
だ。ここで暴れたら死人が出る。正気に戻れよ！」

叫ぶ恩を見下ろすクロム。身長が二メートル以上あるクロムから
すれば、恩は胸の下くらいまでしか背がない。

「クロムだって怪我してるんだ、これ以上動いたらダメだよ。この
まま放っておいたら、クロムも死んじゃう。そんなの、嫌だよ…」

クロムの眼が軽く見開かれる。恩が顔を上げた。恩の眼から涙が
零れ落ちる。

「俺はもう、目の前で誰かが死ぬのは見たくないんだ！！」

切なる叫びに、クロムの眼が光を取り戻し始める。神気の奔流も
治まっていく。千咲が珍しく啞然としていた。

「……くな」

「え？」

「気易くオレ様にくつつくな、玩具の癖に」

ばちーんっ

「ぶふーっ」

しがみついていない方の手で平手打ちにされた。手加減なしで。恩は違った意味で涙目になりながら抗議の声を上げる。

「何するんだよ、バカクロム！」

「主に向かって馬鹿だと？　どの口がそれを言う。これか？　この口か、糞玩具」

「ひふぁいひふぁいっ！」

みよーん、と両頬を引っ張られる。正気に戻ってくれたのはうれしいが、こんな仕打ちを受けるのも嫌だ。しかも本来の姿に戻っているため力が倍増している。

「貴様は馴れる必要があるそうだな。いや、調教の方がいいか？」
頬を放し、にんまりと愉しそうに笑うクロム。ああ、本当にいつものこいつだ。頬をさすりながら恩はクロムの顔を見つめる。

（すっかり元通りだな。憎たらしいほどに。でも）

「…良かった…もとに戻って、くれ…て……」

気が緩み、恩はふうっと意識を手放した。倒れ込む恩をクロムが抱き止める。

戦神の荒ぶる神気を受け続けたのだ。生身の人間には相当きつかっただろう。

「この程度で気絶とは情けない。そんな体たらくでは奴らには勝てんぞ」

ぼそりと恩の耳元で呟いて抱き上げる。想像以上に軽い。クロムは時空廻廊への扉を開き、中に入った。

第14話 今、ここで生きている

細く小さな体。弱く幼い心。

そして、異質ながらも尊い魂。なんとも不思議な存在。

あの方々の命令だからそばにいて、気にかけているにすぎない。
はずなのに。

なぜか時折、奴の言動に胸がざわめく。

『このまま放っておいたら、クロムも死んじゃう。そんなの、嫌だよ…』

『俺はもう、目の前で誰かが死ぬのは見たくないんだ!!』

あの顔と涙を見た時、どこかが痛かった。見たくないと思った。
だから。

『……くな』

泣くな。本当は、そう呟いた。けれど、はっきりと聞かれるのが
嫌で殴った。

『気易くオレ様にくつつくな、玩具の癖に』

そう、玩具。オレ様の退屈を紛らわせる、ただの道具。

補佐をしても、フェイトスベナー宿命を紡ぐ者に関する助言を軽くしてやる程度。それだけの繋がりだ。オレ様と恩は。

フェイトスベナー宿命を紡ぐ者と助言者。それだけの繋がりそのまま始まり、終わる
だろうと思っていた。

だが、実際に会って分からなくなった。人間などという下等生物、
しかもあの方々がプロットのためだけに創ったただの駒である存在
など、どう生きようが死のうがどうでもいい。

奴と出会うまでは、そう思っていたのだ。奴と実際に出会い、話をし、言動を見ていたら、面白いと感じた。

だから玩具にした。鬱陶しいこともあるが、奴の言動は見ている
と滑稽で愉快だ。奴をいたぶる時が一番楽しい。

玩具なのだ、奴は。なのに、なぜだ。奴が傷つけられるのは許せ

ない。体が勝手に動いて、奴を助けてしまう。護ってしまうのだ。
本当に厄介で、不可思議な存在だ、恩は。

＊ ＊ ＊

目を開くと、見慣れた高科FWのメインルームの天井が見えた。
狭い視界の中、ぼんやりと天井を見つめていると、けだるげな此武の声が聞こえた。

「千咲、後は任せる。ついでに糞狐に蹴りでも入れてこい」

「了解しました、マスター」

ソファから恩が跳ね起きたと同時に、千咲がドアの向こうに消えた。不機嫌そうな此武が腕組みをして睨みつけてくる。

「起きたか。気絶してオレ様の手を煩わせるとは、役立たずな下僕だな」

「此武…？ 戻ったのか。あつ、そうだ、傷っ！ お腹の傷は」
慌てて立ち上がるうとしたら頭を押さえつけられた。

「喧しい。穴が開いたくらいで騒ぐな」

「体に穴が開いたら大変だろ！？ なんでそんな平然としてるんだよっ」

「こんなもの、神気を補充すれば自然と治る。しばらくは体を休める必要があるな。依頼も受けられん。貴様のせいだぞ、ボケカス」
ちっ、とあからさまに舌打ちする此武。恩は渋い顔で俯いた。

「それは…悪いとは思うけどさ、なんであの時、助けてくれたんだよ？ 俺を庇ったりしなければ、此武が怪我することなんてなかったよ」

たのに…」

人間嫌いな此武。でも、庇ってくれたということは、少しは人間に情がわいてきたのだろうか？　と淡い期待をして訊いてみたのだが…

「知るか。」

「はい？」

思わず顔を上げた。という返答だ。

「体が勝手に動いたのだ。理由など無い。貴様の呪いか」

「そんなわけないだろう。もう、期待して損した！」

そんな眉間にしわを寄せて、今にも射殺しそうな目で言われても、そっちの方が呪いかと思うわ。

「だいたい武闘一族である鋒家フオンのガキの癖に、背後を取られるとは何事だ。敵の気配も読めんのか木偶小僧」

「うっ、だって、あそこには結界が張られてたから、まさかその中に誰かが入ってくるとは思ってなくて」

「闘いというものは目の前のものと闘うだけではない。時に想定外とも闘うのだ。目の前のことばかりに捉われていては己自身が殺られるぞ」

昔、武闘の師にも似たようなことを言われた覚えがある。恩はうなだれてぼそりと呟いた。

「そうだな…分かつてはいたけど…」

闘いの最中は油断するな。何度も言い聞かされた。けれどあの時、人魔が視界に入るたびによぎった。

見えない前世。それもそのはず。自分には、前世などない。それどころか来世もないのだ。命あるものは原初から幾度の転生を繰り返す。今までも、これからも。

しかし、自分は…『鋒 天雨テエンユイ』こと『高天 恩』だけは、プロットの始まりに生まれ、プロットの中だけで生き続け、プロットの終わりである“終焉の刻”に消滅という死を迎える。

——異端の存在。その事実が心を縛り、動けなかった。

うなだれる恩に、此武は面倒だと言いたげに顔をしかめてから、そっぽを向いて投げやりな口調で言った。

「ふん。まださっきのことを気にしているのか。くだらんな」

投げつけられた言葉に、恩はカッとなり、再度顔を上げて反論しようとした。

「…つくだら…」

「輪廻から外れているのがなんだ。生まれた理由がなんだ。貴様は今、生きているだろうが」

恩は目を瞠った。今、生きている。確かに此武の言うとおりだ。

「ほとんどの生あるものは、己の前世や来世など知らないし、気にせず生きている。なぜなら前世や来世を知ったところで、今が変わるわけではないからな」

それは幸緒も言っていた。前世で貴族だったからといって、今の自分の暮らしが変わるわけではないし、関係がないと。

そうだ。今を生きている誰もが、前世や来世を意識して生きているわけじゃない。だって、今この時を生きているのは前世の自分でも来世の自分でもない、現世いまの自分なのだから。

「生まれた理由がなんであろうと、異端な存在であろうと、恩はこの世に生まれ、今ここで生きている。それでいいだろうが」

ほんの少しだけ、此武の表情が和らいだ。恩は此武の顔をまっすぐに見つめ、ややあつて頷いた。

言い方はつっけんどんだが、心に沁みる言葉だった。どんな存在でも、生きていることが大事なのだと、此武は言ってくれているのだろう。

（そう素直には言ってくれないよな、此武だし）

くすぐったいような、泣きたいような気分で微笑する恩。

「そうだよな。俺がどんな存在だろうと、俺は生きてるんだ。今、この世界を」

此武が目だけをこちらに向ける。恩はにこっと子供のように無邪気に笑った。

「此武、ありがとう！」

励ましてくれたこと、そして庇ってくれたこと。此武は一度瞬く
と、にやりと笑った。

「礼なら体で払ってもらおうか」

「は？ うわっ」

ずかずかと近づいてきたかと思ったら、此武はどういうわけかソ
ファーに寝転がり、信じがたいことに座っていた恩のひざの上に頭
を乗せた。

「……………あの、此武さん？」

「気色悪い呼び方をするな」

「すみませんっ。じゃなくて、これはどーいう意味？」

どう見てもこれは膝枕だ。なぜこんな状況に！？ 混乱する恩に、
此武は目を閉じて淡々と返す。

「さっき言っただろう。しばらく休めば治ると」

「言っただけどさ、だからってなんで膝枕！？ とうか、こういう
のって普通、女の人が男の人にやるものじゃないの！？」

それも親しい間柄の。主に恋人同士とかが！

「今、ここには貴様しかないだろうが。それに千咲はゴーレムだ
からな、硬くて使えん」

「それにしたって、膝枕することないだろ。休むだけならさ…」

「喧しい。これ以上ごちゃごちゃ抜かすと、舌の根引っこ抜くぞ」

「う。…わ、分かったよもうっ。で？ これはいつまでやってれば
いいのさ」

観念した恩はソファーにもたれかかった。

「とりあえず一晩だな」

「一晩！？ このままずっと朝までこうしてろっていうのか！？」

「動くな屑。オレ様は寝る。もう黙れ」

なんたる身勝手さだ。一晩中この状態を維持しろと！？ とにか
く、織枝さんとカーレンが心配するだろうから、家に連絡だけはし
ておこう。

恩は枕代わりにされていたカバンをそおーっと引き寄せ、ヴァモバを出してメールを送った。ふと下を見れば、此武は軽く眉間にしわを寄せて眠っている。

（本当に寝てる…寝る時くらい普通の顔すりゃいいのに）

子供らしくない寝顔だ。中身は子供じゃないのだから当然かもしれないが。

思えばこんなにじっくりと此武の顔を見たことがない。普段が普段なので、見ている暇などない。それにじっと見ていたらそれこそ殴られそうだし。

白く雪のような髪。神族ゆえか整った顔立ち。今は閉じられているバイオレットの目。

（あれ。そういえば…此武の左目ってどうなってるんだろ）

左目は常に前髪に隠れているため、出会ってから一度も見ることがない。今まで特には気にしていなかったが、なぜ左側だけ前髪が長いのか。

（見えてるのかなー、これで。なんでこっただけ伸ばしてるんだろ。

…オシャレ？）

おしゃれをして気取っている此武。

（……ないないないない！ 此武がそんなことするわけないって。

んー、じゃあなんで？ 視力が弱いのかな。それとも、怪我してる、とか？）

その傷を隠すために前髪を伸ばしているのかもしれない。この前髪の下はどうなっているのだろう。

一度気になったらどんどん気にするタイプなので、なんだかモヤモヤしてきた。知りたい。見てみたい。

そんな欲求に駆られ、恩は此武の左目にそろーりと手を伸ばした。

「死ぬ気か…」

「ぴっ!？」

びくうつ、と恩は手を引っ込めた。起きたのかと思ったら寝言だ

ったようだ。

（び、びっくりしたあゝっ。やっぱり何もしないでおう。藍泉のことわざで、触らぬ神に祟りなしって言うしな）

気になるが聞いていいことか分からないし、此武が自分から教えてくれるわけもないだろうが、教えてくれることを期待しておこう。

（あ、千咲さんにそれとなく探りを入れてみようかな。うん、そうしよう）

ふう、とため息をついて心を落ち着ける。

（それにしても、此武も眠ったりするんだなあ）

戦神だし、神が眠るといのが想像できなかった。いや、カーレンは普通に寝ていたが。だが、此武が睡眠を取るといのは全く想像していなかった。

眠るという行為は少なからず隙ができる。そんな隙を作る行為を戦神である此武がするだろうか。

此武の性格からして他者に隙を見せるなんてことはしないだろうから、眠ることはないだろうと思っていたのだが。

（神族も人間と同じで寝ないといけないのかな。なんかイメージしにくいけど）

休んで神気を補充すれば怪我は治ると言っていた。あれだけの傷だし、休むにしてもかなりの時間を要するかもしれない。

そうなってしまったのは自分のせいだ。あの時、^{レイウエン}??の気配に気づいていれば……

（???：あいつはなんで結界内に入ってこれたんだ？ あの結界はあの人魔が張ったもの、だよな？ 元からいたのならともかく、自分以外が張った結界内に入るのは難しい。結界を張った本人より強い力を持っているか、その本人を殺さない限りは……）

だが、??は空間を越えて結界内に入ってきた。空間を越えただけでは結界内には入れない。やはり、相当強い力を持っていないければ。

（鋒家は祓魔師の家系。??も鋒家の人間だから、人魔が創り出し

た結界を破って入ってくるなんて造作もないだろうけど)

だからこそ、もう一つの疑念が浮かぶ。なぜ、悪魔と行動を共にしていたのか。本来、祓魔師ならば滅すべき悪魔。ゾルディシュ、とクロムが呼んでいた。

(あの悪魔：ゾルディシュと？？の関係はなんだ？ 敵対しているとは思えない。むしろ協力関係にあったみたいだし、神隠しを起こしていた人魔のバックにいたのがあの二人だった、と考えるのが妥当だろう)

それに？？は気になることを言っていた。

『序章とはいえ、計画の邪魔をしてくれた礼はするぜ』

(計画って、どういうことだ？ あいつはこれから何かをするつもりなのか…また、人間に害をなす、つもり…なんだろうか…)

難しい顔であれこれ考えていると眠気が襲ってきた。思えば今の時間は外の世界では深夜に当たるだろう。恩は睡魔に勝てず、ソファに背中を預けて眠りについた。

眠りについた恩は夢を見た。暗い闇の中で、片手に剣を下げ、誰かが背を向けて立っている。長い髪がなびく。すらりとして、けれども高い背丈は男性か。

(…なんだ、これ…夢？ あれは…誰だ？)

広がる闇。空が見える。月は雲に隠れ、星が瞬いている――夜？ 恩は男性と思われる人影を遠くから見ているようだった。映画のワンシーンのように視界に広がる光景。

(……っ!!)

それは、背筋が凍るようだった。男が持つ剣からは血が滴り落ちている。そして足元に転がっているのは、バラバラになった人間の、骸。

息を呑む恩。だが、誰かの視点から見ている映像ではないらしく、体を動かす気配はなかった。視界に映るだけの光景。

（人間：！？ こいつが：殺したのか！？）

その時、雲に隠れていた月が顔を出し、月光が男の姿をぼんやりと浮かび上がらせる。

風になびくは深紅の髪。はためく漆黒のコート。携えられた剣は偃月刀。

（！！ あの男は：まさか！！）

男はわずかに背後を顧み、にたりと笑うと一枚の紙切れを落とすた。

遠かったが恩には見えた。そこに描かれていたのは、横向きの黒い三日月を黒い一筋の雷が貫いているようなマーク。

（あの印は：っ）

そこで恩の意識は薄れ、夢が終わった。

「おい起きろ、赤木偶」

「ぐおはっ！！」

突如、脳天に激痛が走った。どうやら此武に肘打ちされたらしい。

「いいいいったーっ！？ 何するんだよ、此武っ！」

あまりの痛さに涙が出てきた。頭を押さえて、恩はいつのまにか目の前に立っている此武を見る。傍らには、いつ帰ったのか千咲が佇んでいた。

「いつまで寝ているつもりだ。とつとと帰れ」

「はああ！？ だって一晩……」

「もう一晩経ったわボケが。だから帰れと言っているんだ、ナメクジめ」

その瞬間、ぞわわっと恩の全身に鳥肌が立った。

「ナ、ナメ：！！ やめろそれだけはああああっ」

両腕を抱え込むようにしてすくみ上がる恩。顔は青ざめ、ぶるぶると震えている。あまりの怯えっぷりに、此武は怪訝な顔をする。

「なんだ、ナメクジがどうした」

「言うな!! 奴の名前も聞きたくないっ! あんな気持ち悪い生物と同列扱いされるなんて今までで一番の屈辱だっ、うわぁあん!」

本気で泣き叫ぶ恩に、さしもの此武も面食らった。ソファアの上で丸くなり、まるで幼い子供のように声をあげて泣いている。

ぼろぼろ涙を零す恩を見て、此武はややあってにいいと笑った。

「ほお? 貴様、あれが嫌いなのか。くくく、そうかそうか。面白いことを知ったなあ」

愉しげな此武の声に、恩は涙でぐちゃぐちゃな顔で此武を見上げる。此武は愉悅の表情で恩の頭をつかんだ。

「ならば次に会う時、貴様にあれを贈ってやろう。甕いっぱい詰めた生きのいい奴らを、な」

「……………っ!!」

甕いっぱい詰め込まれた大量のナメクジを想像してしまい、恩は此武を突き飛ばすようにしてカバンを手になち上がった。

「気色悪いこと言うな!! 此武なんか嫌いだぁぁぁあっ」

泣きながら恩はメインルームを飛び出す。此武は満足げに笑った。

「はははっ、やはりあいつをいたぶるのはうれしいな」

ご満悦な主に、千咲は静かに微笑んでいた。

高科FWを飛び出した恩は、ごしごしと顔を拭きながら現実空間に戻ってきた。なんとか涙は止まったが、鼻はぐずぐずだし、泣きはらした目は赤くなっているだろう。

(うう…こんな顔、織枝さんやカーレンには見せられない。時間はまだあるし、どこかで時間つぶしてこのまま学校行こう…)

明け方なのか外はまだ薄暗かった。おかげで通行人に顔が見られないで済みそうだ。万が一見られてもこの寒さだ。鼻をすすっているのは寒さのせいだと思ってくれるはず。

エアバイクを止めているいつものパーキングエリアに向かってい

ると、きゅるるゝと腹が鳴った。

（あ、そっか。昨夜から何も食べてないんだよな。フードコートで食べていこう。店の中ならあったかいし）

デパートのフードコートで食事をし、まったりしていると、ヴァモバの着信音が流れた。この音は電話だ。

サブディスプレイを見るとしきょう滋生家からだった。昨夜のメールでは朝には帰ると送った。それなのに朝になっても帰らないから心配してかけてきたのだろう。

なんて言い訳しよう。少しためらってから恩は電話に出た。

「は、はい。もしもし？」

《恩さんですか？》

「!？」

相手は織枝さんだと思っていたのに、なんとかけてきたのはカーレンだった。初めて電話越しに聞いたカーレンの声に、全身が覚醒する。

「えっ、カ、カーレン！？ えっ、なっ、なんで!？」

《？ わたしが電話をかけてはいけなかったんでしょか？》

「いやっ、そ、そんなことないんだけどさっ、織枝さんかと思ってたから…カーレンが電話使ったこと、ないし」

《はい。織枝さんに電話の使い方教わってかけてみました。こうして恩さんとお電話でお話するのは初めてですね。目の前に恩さんがいないのに、こうしてお話しているなんて不思議な感じがします》

「う、うん……」

電話越しのカーレンの声は、いつも直接聞いている声とは多少違って、けれど澄んだ声で耳に心地よいが、同時に恥ずかしくもあった。

電話なので耳元で声が聞こえるのだ。こんなに近くで声を聞くななんてことはなくて、電話越しのためか息遣いやかすかな吐息も聞こえて、そのたびに心臓が跳ね上がる。

(こんなに遠くにいるのに、耳元で囁かれているみたいだ)

高鳴る胸。さっきまでとは違う緊張感を感じる。見えないけれど、声の調子から彼女はいつものように微笑んでいるだろう。あたたかく優しく見守る聖母のように。

《わたしたちが使う魔法術デイルにも、遠くの方と言葉を交わす魔法術デイルがあります。ですが、それは心に直接響く声です。こうして口でお話しするわけではありません》

何を言いたいかと、カーレンの声に耳を傾ける。

《耳で聞いて、口でお話をする。普段目の前の相手としていることを、離れた場所の方とできる物を生み出せるなんて、人間はすごいです。不思議で素晴らしいですね》

そんなふうに考えたことなどなかったので恩は啞然とした。ヴァモバや電話を使えば、ごく当たり前にできていたこと。

人間にとっては、いや、人間界で暮らす者にとってはなんてことのない現象だが、天界で暮らしていたカーレンにとっては、不思議な現象だったのか。

生命神の娘であるカーレン。彼女は人間界で、これからもたくさん『すごいこと』や『不思議なこと』と出会うのだろうか。

もっと人間界のことを知ってもらいたい。自分も彼女が暮らしていた天界のことを知りたい。

お互いのことを知って、分かり合っていきたい。そうしていつか、心を繋いでずっと傍にいたことができたなら。

恩は目を閉じ「うん、そうだね」と微笑んだ。

「ねえ、カーレン？」

《はい》

「心配かけて、ごめん」

やわらかな恩の声に、カーレンは軽く目を瞠った。たったそれだけの短い言葉なのに、心の中にあたたかいものが灯る。それがなんだかうれしくて、カーレンは満面の笑みを浮かべた。

《はい》

遠くにいるけれど、とても近くにお互いを感じる。二人は電話越しに笑顔を交わした。

第15話 稜雲の恋人発覚？

カーレンと少し会話をした後、恩は予定通りそのまま登校した。教室に入ろうとすると、横から幸緒が駆け寄ってきた。

「恩ーっ！！」

「幸緒？ おは」

「ちよっとお願ひがあるんだけど聞いてくれる！？」

切羽詰まった形相の幸緒が詰め寄ってきた。

「よう：な、内容によっては……」

幸緒の気迫に押され、恩はたじろいだ。入口に立って話していると邪魔になるので、幸緒を落ち着かせて教室に入る。

「あのさ、明日って暇？」

「うん、しばらくバイト休みだから空いてるけど」

「そりゃ好都合だわ！ 恩、劇の手伝いをする気ない？」

「……劇？」

目を点にする恩。幸緒は頷いた。

「そう。あたしの母さんが勤めてる養護施設で、毎月、子供たちが楽しめる催しをするってことは知ってるでしょ？」

「ああ、うん。たまに幸緒がミニライブしてるんだよな」

幸緒は友人や兄とバンドを組んで活動している。それで時々、その養護施設でもライブをしているらしい。

「それで今回は劇をすることになったんだけど、その劇の役者を任されちゃったのよ！」

「へえ。すごいじゃん。頑張れよ」

「で、恩にもその役者をやってほしいってわけよ」

「はい？」

幸緒はがしっと恩の両肩を掴み、にんまりと笑った。

「あたしとお兄ちゃんだけじゃ劇なんてできないでしょ？」

他にも役者ほしいのよ」

だから

「手伝いをするって、役者をやれってこと!?!」

「あったりー♪」

「むむむ無理! 人前で演技なんてできない!」

ぶんぶんと勢い良く左右に首を振る恩。だが幸緒も引き下がるつもりはないようだ。

「別にプロ並みに演技しろってわけじゃないのよ。子供たちが楽しめればそれでいいの。多少棒読みでもいいから!」

「セリフだって覚えられるかどうか分からないしっ」

「もしもの時はカンペ用意するから!」

「でも…」

「子供たちのためなの! みんな月一のお楽しみ会を楽しみにしてるのよ。中には来週いっぱい施設を出なきゃいけない子もいるし、入ったばかりで周りと打ち解けていない子とかが、他の子と仲良くなるきっかけにもなる。お願い。少しでも子供たちの心を癒してあげたいの」

幸緒の真摯な心が伝わってくる。児童養護施設は、親を亡くして身寄りがいない子供や、親から捨てられた子供、虐待や育児放棄などで親と暮らせなくなった子供などが保護されている施設だ。

事情を理解している子供もいれば、自身の生い立ちを知らずにいる子供もいるし、心に傷を負って心を閉ざしてしまっている子供もいるのだ。

そんな子供たちに、少しでも楽しい思いをさせてあげられるのなら。

「……分かった。やれることはやってみる」

「ホント!? ありがと、恩! 井上たちにも声をかけてみるから」

上機嫌で去っていく幸緒の気持ちも分からないでもないの、恩は微笑した。一息ついて自分の席に座ろうとした時、騒がしい来訪者が飛び込んできた。

「めぐ先輩ーっ!!」

大声で名前を呼びながら教室に駆け込んできたのは、一年生の帝みかど

啓也けいやだった。彼はやたらと恩に懷いだいて、かわいくもあるが時々、正直ちよつとうつとうしいと思う後輩だった。

「啓也！？ 朝っぱらから騒さわがしいな」

「めぐせんばああいっ！ 今日も素敵すてきにかわいいですー？！！」

「だああっ、抱きつくな！ 何しに來たんだお前はっ」

教室に入ってくるなり飛びついて來た啓也の頭にげんこつを落とす。啓也は頭をさすりつつ、にへらと笑った。

「大ニユース持ってきたんですけど、めぐ先輩の顔見たらなんかムラムラっとなんか抱きつきたい衝動が？」

「妙な言い方するなバカ！ 大ニユースってなんだよ」

周りのクラスメートたちも興味が出てきたのか、二人の会話に注目し始めた。

なおも抱きつこうとする啓也を押し返しながら尋ねると、啓也はなぜか深刻そうな顔になった。

「僕、さっき見ちゃったんです」

「見たって…何を？」

「さかきばる榊さかき原生徒会長です」

ぴき。恩のこめかみに青筋が浮かぶ。クラスメートたちも残念な表情だ。真剣な顔して何を言うかと思えば。

「……………帰れ。」

「違うんです、聞いて下さい！ めぐ先輩、僕を見捨てないでえええっ」

「だから妙な言い回しをするなってば！！ 生徒会長を見たからなんだって言うんだよ」

「だってあの会長がですね、女の子と歩いていたんですよ！？ それもとても親しげに！」

その発言に教室中がどよめいた。榊さかき原生徒会長こと榊原稜雲いずもは入学式の時に、全校生徒と教師の前で、初対面の恩にいきなり告白したというのは周知の事実。

友達宣言されている今も、何かと恩をかわいがるほど恩にべた惚

れだ。

「そんな榊原生徒会長が……」

「高天くん一筋のあの人が!？」

「女の人と!？」

「親しく!？」

「「有り得ない!!」」

「なんでそういう結論になるんだよみんな!」

満場一致の声に恩は一人異議を唱える。別に、会長が女の子と一緒にいるなんておかしくないじゃないか。親しそだったからってなんだ。

「えー? だって、ねえ?」

「生徒会長は高天にべた惚れじゃん?」

「そうそう、恩くんには甘いよね」

「榊原先輩って男好きなんでしょ?」

「だからまさかそんなことはないと思ってたけどさあ、会長、女子にも興味あったんだな」

「逆に意外」

「あんまり高天君が冷たくするから愛想尽かしたのかなあ?」

クラスメートたちの認識に頭が痛くなる。そこまで自分と会長は仲がよさそうに見えていたのか。ただの先輩後輩の関係なのにつ。

「めぐ先輩。あの雰囲気は絶対、恋人でしたよ。どうします?」

「どうしますって聞かれても困るんだけど! そもそもなんでそんなこと訊くんだよ。会長が女の人と付き合うならいいことじゃないか。これで俺はあの人につきまとわれなくて済むんだから!」

「じゃあめぐ先輩、今フリーってことですよね!? やったあ、これでめぐ先輩は僕のもですね!」

「どうしてそうなる!!! 元々、誰とも付き合っていない! だから抱きつくなんてば!」

啓也を引きはがしたのと同時に、話題の人がひょっこり現れた。教室内がざわめく。

「恩くん、おはようございます」

「げ。稜雲会長：おはようございます」

礼儀としてあいさつは返すが、顔はしかめっ面である。この男に関わるとロクなことがない。

「なんの用ですか。どうせ大した用はないんだろうから帰って下さい」

「おや、つれないですねえ。君に会いたいという人がいたので案内してきたんですよ。さあどうぞ」

優雅なしぐさで稜雲に促され、そつと顔を出したのはカーレンだった。

「！？ カーレン！？」

「会えてよかったです、恩さん」

なぜカーレンが学校に？ いやそれよりも。さっきの啓也の話で、稜雲と一緒にいた女の子というのはカーレンのことだろう。恋人同士に見えるほど親しげだった、ということは。

「カ、カーレン：まさか稜雲会長と：」

「はい。稜雲さんと一緒に来ました。恩さんにお届け物を持って来たのですが、どこにいるか分からなくて困っていた時に、稜雲さんとお会いしたんです。あら、恩さん？」

「どうやら聞こえていないようですね」

カーレンと稜雲の関係を誤解し、恩はショックで固まっている。

稜雲はくすくすと笑い、恩の体を抱き寄せた。

「恩くん、そんなに無防備でいると襲っちゃいますよ？」

「はっ！！　ぎゃあああつ、放せええっ！」

「あーっ、榊原会長ずるいっ」

我に返り暴れる恩。啓也が取り返そうときゃんぎゃんわめく。そのやり取りを見ていたクラスメートたちは、やっぱりこうでなくちやと納得した。

「ふふ、楽しそうですね、恩さん」

「楽しくないっ！　ってカーレン、なんで学校に来たの？」

さっきの話を全く聞いていなかったのので改めて尋ねる。カーレンは抱えていた小包を恩に差し出した。

「はい。これをお届けに。織枝さんの作ったお弁当です」

「へ。あ、そっか。今朝は帰ってないから昼ご飯持ってきてないんだっけ。ありがとう、カーレン」

恩は稜雲の腕から抜け出し、差し出された弁当を受け取った。教室内が別のざわめきに包まれる。

二人はどういう関係なのか。この少女は何者なのか。会長の恋人ではないのか。あちこちでひそひそと話声がする。

カーレンと恩を交互に見て、啓也がジト目で訊いてきた。

「めぐ先輩。なーんかやけに親しそうですね。知り合いなんですか？ この子、会長の彼女じゃないんですか？」

「そうだカーレン、なんで会長なんかと一緒に……」

「本当に聞いていなかったんですね、恩くん。彼女とは校門で偶然会ったんですよ。君の居場所が分からないというので私が案内してきたんです。君が想像しているような関係ではありませんよ」

状況を楽しんでいるかのように稜雲は笑いながら説明してくれた。恩はほっと胸を撫で下ろす。

「そっか。なんだ、よかったあ」

「おや、心配してくれたんですか？ 安心して下さい。私は君一筋ですから」

「会長のことなんか全っ然、心配してないし！ むしろ安心できないし！」

「めぐせんばあい！ その子が会長の彼女じゃないのは分かりましたけど、先輩とその子はどういう関係なんですかあ！？」

啓也が涙目でしがみついてくる。クラスメートたちも興味津々なのか注目している。

「え。いや、俺たちはその……ええと……」

「こらゝ。そんなところでなにさわいでるのゝ？」

なんて説明すればいいのやら。言い淀んでいると稜雲とカーレン

の後ろからかわいらしい声が聞こえた。二人が振り返ると、出席簿を抱えた一メートルほどの背丈の女の子と、白髪を綺麗にまとめた老婦人が立っていた。

「おや、おはようございます。丸井先生、校長」

「さかきばるくん、おはようなの」

「おはよう、榊原君」

女の子がにっこりと笑う。彼女は丸井ちろる。恩たちのクラスの担任で、その正体はリスに似た恠妖^{あやし}、フェウパである。幼女のような外見だが百年近く生きているらしい。

老婦人も品よく微笑む。学校の校長というより貴婦人のようだ。

「そちらのお嬢さんは外部の方かしら？」

「あ、校長先生、おはようございます！ すみません、彼女は俺の知り合いで」

「あら、穂積君…ではなく、今は高天君でしたわね。おはよう。ふふ、そうですか。せっかいですから、校内を見学していただいてはいかがかしら？」

「え！？」

校長の思いがけない提案に恩は目を点にする。

「それはいいですね。カーレンさんは学校に来るのは初めてでしょう？」

「はい。でも、いいんでしょうか？」

「校長からの提案ですし。案内は私がしましょう。いいですよね、校長？」

「そうですね。榊原君なら任せても安心でしょう。あなたの担任にはわたくしから話しておきます」

「それでは恩くん、カーレンさんはお預かりします」

「へっ！？ ちょっと」

「たかまくん、ホームルームはじめるよ。みかどくんはじぶんの手きょうしつにもどりましょう」

「はい。それじゃ、めぐ先輩、寂しいけどお別れですつ。また会

いましょう！」

戸惑っている間に、カーレンは稜雲に連れて行かれ、啓也もいなくなった。稜雲のことだからカーレンに何かするとは思えないが心配だ。

それからずっとカーレンのことが気になって仕方がなかった。授業中もたびたび上の空。

（大丈夫かなあー、カーレン。というか、稜雲会長は授業出なくていいのか？ まあ、あのヒトは人外だし、何年もこの学校いるんだから授業受けても受けなくてもいいんだろうけど…ああ、カーレン大丈夫かなあ）

ちなみに今は体育の授業中で、体育館にてバスケの試合の最中である。周りではクラスメートたちが動き回っているが、恩は突っ立ったままうんうん唸っている。

（お弁当持ってきてくれたのはうれしいけどさー、なんかちよつと気まずいって言うか、心の準備ができてなかったっていうか、まさかカーレンが学校に来るなんて思ってたわけ…）

などとぼんやり考えていると、どこからかカーレンの声が聞こえた。

「あ、本当に恩さんがいます。恩さーん」

「カーレン！？ …！！」

呼ばれて声の方を振り向くと、カーレンが手を振っていた。しかし、驚くべきはその格好。カーレンは慶星高校の制服を着ていたのだ。さっきまで私服を着ていたはずなのに。

「えっ、なんでうちの制服…」

「恩、パス！ って恩！？」

「へ？」

今がバスケの試合中だということを忘れていた。振り返った途端、要の投げたボールが顔面に的中。恩は気絶し、ボタンとその場に倒れた。

恩が目を覚ましたのは保健室のベッドの上だった。心配そうに顔を覗き込むカーレンが視界に映り、パツと覚醒する。

「わあっ！」

「恩さん。よかった、気がついたんですね」

「カカ、カーレンっ、ここは：保健室？」

慌てて起き上がり、周りを見回す。カーレンはふんわりと微笑んだ。

「はい。稜雲さんがここまで運んで下さったんです。恩さん、ボールが顔に当たって気絶してしまっただですよ。覚えていますか？」

「ああ：うん、そうだった。どうりで顔がヒリヒリするわけだ」

「すみません、わたしが声をかけなければ恩さんは怪我をせずに済んだですよ」

暗い顔で俯くカーレンに、恩はぶんぶんと顔を横に振った。

「そんなの全然気にしてないから！ カーレンは悪くない。だからそんな顔しないでよ。カーレンは、笑ってる方がいいな」

カーレンが顔を上げると、思っていたより顔の距離が近かった。どきっとした恩は赤面して顔を逸らす。つられてカーレンの頬もちょっぴり赤くなった。

「あー！ えっと、今何時だろ！？」

「あ：もうすぐ十二時になりますよ」

「も、もうそんな時間なんだ。あはははは」

ということは一時間以上気絶していたのか。もしかしてその間、カーレンはずっと看着我てくれたのだろうか？

さっきから胸のどきどきが治まらない。カーレンの顔をまともに見られない。恩は顔を逸らしたまま、もじもじしながら訊いてみる。

「あ、あのさ、カーレン。ずっと：ここに？」

「はい。稜雲さんに看ていてほしいと言われまして。心配でしたし」「そ、そっか。ありがとう。ところでさ：その制服、どうしたの？」

ちらっと横目でカーレンを見る。慶星高校の制服は男女共通で、

グレーのシャツ、白と黒のモノクロブレザー。女子は同色のスカートと青いリボン、男子は同色のズボンと青いネクタイだ。

この学校の制服の最大の特徴は、ブレザーの丈が他のブレザーより少し長めだということ。そのためか高校の制服としては、ちょっと有名な制服である。

「これですか？ 校内を回るのにあの服のままでは目立つと稜雲さんがおっしゃったので、貸していただいたんです。変でしょうか？」

「いやっ、全然変じゃないよ！ むしろ………」

「？ むしろ？」

「むしろ…か、か…」

真っ赤になって俯いている恩に、カーレンは首を傾げる。

「恩さん？」

「かわっ」

「とても可愛らしいですよ、カーレンさん」

「だぁーっ！！」

勇気を振り絞ったというのに、突然現れた稜雲に先に言われた。せつかくいい雰囲気だったのに！ 今言おうとしてたのに！

「なんでいるんだよ稜雲会長っ。ていうか急に出てくるな！」

「おや、カーレンさんが言っていたでしょう。ここまで運んだのは私ですし、最初からいましたよ？ そっちのカーテンの後ろに」

「えー！！」

「君たちの熱々空間になかなか入り込めなかったので」

「んなっ」

ぼひゅっ、と顔から湯気を噴き出す恩。カーレンはよく分かっているのかきよんとしている。

授業終了のチャイムが鳴り、稜雲はくすくすと笑いながら、恩の寝乱れ髪に手を伸ばしてそっと整えてやる。

「午前の授業が終わりましたし、お昼の準備をしないですね。恩くんは起きられますか？」

「も、もう大丈夫だよっ。ちゃんとご飯食べられる。わざわざカー

レンが持ってきてくれたんだし、織枝さんが作ってくれたものだからな」

稜雲の手を振り払い、自分で髪を整える。恥ずかしいと思ったらない。「それではわたしは帰りますね。稜雲さん、お洋服お返しします」

「ああ、その制服は差し上げますよ。またこちらに来る時にその方が便利でしょうから」

「え？　でも」

「校長先生のご厚意ですからお気になさらず」

にっこりと笑う稜雲。普通の女の子ならときめいてしまいそうな笑顔だが、カーレンはなんとも思わない。

「そうですか。では、ご厚意に甘えさせて頂きます。校長先生さんによろしくお伝え下さい」

「あ、カーレン、お弁当ありがとう。織枝さんにもお礼言っておいてくれる？」

「はい。お伝えしておきますね」

「あとさ、さっき言い忘れたんだけど、しばらくバイトは休みだから。此武がさ……ちょっと怪我をして休養することになったから」

「まあ、クロム様が？　それは大変です！」

「あのクロム様が怪我をするとは……何があったんですか？」

珍しくうろたえるカーレン。稜雲もやや険しい顔つきになった。

クロムは戦神最強の一族と言われるアスラオだ。中でもクロムの名は神々の間では悪名高い。そんな彼が怪我を負ったとすればよほどの相手と戦ったとしか考えられない。

「あ……えーっと……」

二人に見つめられ、恩は目を泳がせる。理由を言っているものだろうか。しかし、自分を庇って怪我をしたなどクロムにすれば恥かもしれない。

（自尊心高いもんな。いろいろムカつくけど、やっぱり伏せておいた方がいいよな？）

もっともらしい理由を考えると、ガラッと保健室のドアが開

いた。

「失礼します！ 高天！」

「あ、亜櫛。みんなも…」

駆け込んできたのは亜櫛、幸緒、玲汰、要、まひろいつものメンバーである。稜雲に気づいて軽く会釈し、ベッドに近寄る。

「井上から高天が倒れたって聞いて驚いたよ。大丈夫か？」

「うん」

亜櫛は別のクラスなのだが、わざわざ様子を見に来てくれたのか。うれしいものだ。亜櫛の後ろから、要が申し訳なさそうな顔で前に出て、座っている恩の横に立った。

「ごめん、恩。ちゃんと確認しないでパス出したりしたから…」

「大丈夫だよ、要。ぼーっとしてた俺も悪いんだし。気にしなくていいよ」

珍しくしゅんとしている要が年相応の子供らしくて、恩は要の腕を引き寄せて軽く頭を撫でた。

「！」

「もう大丈夫だから。ね」

「………」

そういった経験のなかった要は顔を赤くして固まった。まひろが「要ちゃん、いいなあ」と羨ましそうにしている。

「高天も平気そうだし、昼ご飯にするかー」

「そうね。ところで、朝から気になってたんだけど…その子、恩とはどういう関係？」

ベッドのそばに立っているカーレンを目で指して幸緒が尋ねると、全員が無言で恩とカーレンを見る。

結局、朝はちろる先生に邪魔されて聞けなかったし、授業中もその機会がなかった。これまであえてカーレンのことには誰も触れなかったが、やはり気になる。

稜雲と玲汰は知っているが、亜櫛と幸緒、要とまひろの四人はカーレンのことを知らない。別クラスである亜櫛に至っては、カーレ

ンと顔を合わせるのは今が初めてだ。

「あ：えっと、彼女はその……」

「皆さん、詳しい話は場所を変えてからの方がいいんじゃないですか？　ここで話していると、昼休みが終わってしまいますよ？」

稜雲の言う通り、チャイムが鳴ってから結構経っている。このままここで話すより、どこか落ち着ける場所で話をした方がいいかもしれない。

「会長の言うとおりにすね。んじゃ高天、昼ご飯食べながら詳しく話を聞かせてもらおうってことで」

「お弁当取ってこなくちゃなんだな」

「今からじゃあ購買ほとんど売り切れてるかしらねー」

「まひろたちも購買行かなくちゃ。ねね、そっちの子もせっかくだから一緒にお昼しない？」

「え？　わたしですか？」

水を向けられたカーレンは小首を傾げる。カーレンは神族なので食事を摂る必要がないのだが、いつもは恩たちに合わせて軽くだが食事を摂っている。

なので一緒に食事をするのは問題ないのだが、恩に迷惑ではないだろうか？　恩の顔を窺うと、わずかに渋い顔をしている。やはり自分がいると迷惑なのだろうか？

（これ以上恩さんにご迷惑はかけられませんし、わたしはいい方がいいのかもしれませんが）

「あの、わたしは……」

「カーレンがよければ、一緒にお昼食べよう」

自分を見上げてくる恩は少し照れくさそうに笑っている。

迷惑をかけているのかと思った。突然押し掛けて、怪我をさせてけれど恩は気にしていないと言った。笑っている方がいいと言ってくれた。それなら。

（わたしは、恩さんのそばにいてもいいんでしょうか？）

いてもいいと言うのなら。迷惑でないのなら。とくん、と胸の奥

で小さく鼓動が高まる。あたたかい気持ちで満たされていく。

これはなんだろう。分からないけれど、なんだか心地いい。うれしそうにカーレンは破顔した。

「はい。ぜひ一緒に一緒にさせて下さい」

カーレンの満面の笑みに恩はまたも真っ赤になって俯き、二人の様子を見ていた亜檜たちはそれとなく事情を察して、熱々空間…と内心、呟いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7071/>

Fate Spiner

2011年11月27日14時55分発行